有田・小田部

第22集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第427集

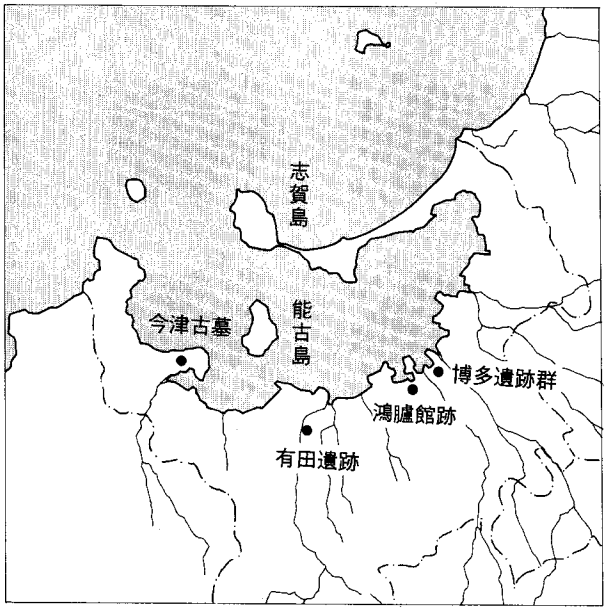
1995

福岡市教育委員会

有田・小田部

第 22 集

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第427集



1995

福岡市教育委員会

第54次調査 Ⅱ区東側全景（西から）

第54次調査　溝 SD 03・04（東から）

序　　文

玄界灘に面した福岡市は、豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。しかし、近年の福岡市は著しい都市化によってその姿を変貌しつつあります。

早良平野は大陸との交流の中で古くから栄え、そのために遺跡も多く存在している地域ですが、都市の市街地の拡大と共にこの地域にも都市基盤の整備がすすめられ、これに伴い埋蔵文化財の発掘調査も増加しているところです。

福岡市教育委員会では、この地域における各種の開発事業に伴い、失なわれゆく埋蔵文化財の保存と保護措置に努めているところです。

本書は昭和56・57年度に発掘調査を行った有田遺跡第54・68・69・73次調査の成果について報告するものです。これらの調査地点は「有田・小田部」と呼ばれる台地上に立地しており、旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物を発見することができました。なかでも縄文時代晩期の環濠やその出土遺物は早良平野における稲作の始まりの時期を知る重要な手懸かりになるものと考えられます。

本書が市民の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成７年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　　言

(1)　本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における住宅開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和56・57年度の２ヶ年において国庫補助を得て実施した緊急発掘調査報告書である。

(2)　本書には昭和56年度の第54次・第68次調査、昭和57年度の第69次・第73次調査について収録する。

(3)　本書では有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。

(4)　発掘調査は第54次・第68次調査を井澤洋一、山崎龍雄、杉山富雄が、第69・73次調査を井澤洋一、松村道博が担当した。

(5)　本書に掲載した遺構実測は第54次・第68次調査を井澤、山崎、松尾正直、渡辺武子、清原ユリ子が、第69次・第73次調査は井澤、松村、山口勝己、池野尚昭、谷沢仁、辻哲也、清原が行った。

(6)　本書に掲載した遺物実測は、牛房綾子、池田孝弘、田中昭子、吉永祐美子が行った。石器、陶磁器については器械実測を行い、吉田扶希子、廣嵜香が担当した。

(7)　遺構・遺物の製図は主に吉永、牛房、廣嵜が行い、石器の製図は井澤が担当した。

(8)　遺構の写真撮影は第54次・第68次調査については井澤、山崎が、第69次・第73次調査については井澤、松村が分担して行い、遺物の撮影は吉田、池田孝弘が行った。

(9)　本書に掲載する遺構一覧表は池田、牛房が、遺物の一覧表は井澤、三浦明子が作成した。

(10)　本書作成にあたっては福田小菊、多田映子、西口キミ子、小松原澄江、池田洋子の協力を得た。

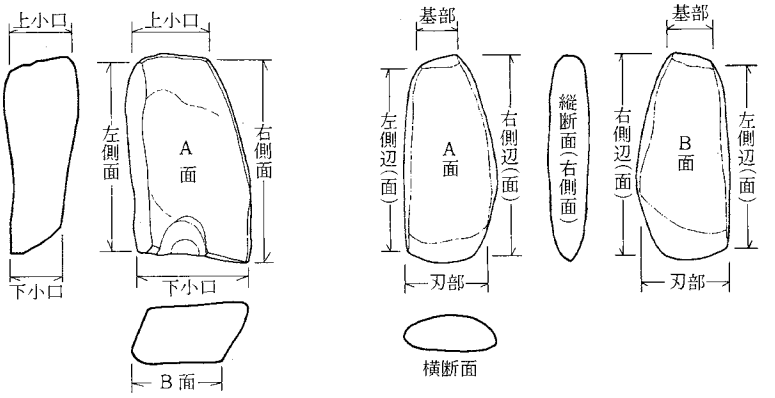
(11)　遺構番号は発掘調査中に於いて検出した順に番号をふり、本書では遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構の略号として用いたのはSC（住居跡）、SE（井戸）、SK（土壙）、SX（構築物）、SB（掘立柱建物）、SP（小穴）である。

(12)　本書の遺物番号は遺構の種類毎に通し番号で示し、挿図・図版番号に一致させている。

(13)　本書に用いた方位は磁北である。

(14)　本報告にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

(15)　本書の執筆は井澤が担当し、編集は牛房の協力のもと井澤が行った。



本 文 目 次

頁

第1章　はじめに …… 1
1．調査に至る経過 …… 1
2．発掘調査組織 …… 1
(1) 昭和56年度の調査組織 …… 1
(2) 昭和57年度の調査組織 …… 1
(3) 平成6年度資料整理 …… 2
第2章　有田・小田部の歴史 …… 7
(1) 立地・歴史的環境 …… 7
(2) 文献資料 …… 7
第3章　第54次調査 …… 9
1．地形と概要 …… 9
(1) 立地 …… 9
(2) 概要 …… 9
2．遺構説明 …… 12
(1) 溝（SD） …… 12
(2) 小穴（SP） …… 19
3．遺物説明 …… 19
(1) 溝（SD）出土遺物 …… 19
(2) 表土出土遺物 …… 36
4．まとめ …… 38
第4章　第68次調査 …… 51
1．地形と概要 …… 51
(1) 立地 …… 51
(2) 概要 …… 51
2．遺構説明 …… 52
(1) 土壙（SK） …… 52
(2) 溝（SD） …… 55
3．遺物説明 …… 59
(1) 包含層・表土出土遺物 …… 59
(2) 溝（SD）出土遺物 …… 59
4．まとめ …… 59
第5章　第69次調査 …… 62
1．地形と概要 …… 62
(1) 立地 …… 62
(2) 概要 …… 62
2．遺構説明 …… 66

(1) 土壙（SK） …… 66
(2) 井戸（SE） …… 66
(3) 掘立柱建物（SB） …… 66
(4) 溝（SD） …… 69
3．遺物説明 …… 74
(1) 井戸（SE）出土遺物 …… 74
(2) 掘立柱建物（SB）出土遺物 …… 74
(3) 溝（SD）出土遺物 …… 74
(4) Pit（SP）出土遺物 …… 74
(5) 包含層出土遺物 …… 74
(6) グリット出土遺物 …… 78
(7) 遺構面出土遺物 …… 78
(8) 試掘調査出土遺物 …… 78
4．まとめ …… 85
第6章 第73次調査 …… 93
1．地形と概要 …… 93
(1) 立地 …… 93
(2) 概要 …… 93
2．遺構説明 …… 97
(1) 井戸（SE） …… 97
(2) 掘立柱建物（SB） …… 98
(3) 溝（SD） …… 98
(4) Pit（SP） …… 100
3．遺物説明 …… 100
(1) 井戸（SE）出土遺物 …… 100
(2) 掘立柱建物（SB）出土遺物 …… 100
(3) 溝（SD）出土遺物 …… 100
(4) Pit（SP）出土遺物 …… 103
4．まとめ …… 103

挿 図 目 次

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡（縮尺1/25,000） …… 3
Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点（縮尺1/7,500） …… 4
Fig. 3 調査地点位置図（縮尺1/8,000） …… 8
Fig. 4 調査地点及び石組井戸・土塁配置図（縮尺1/3,000） …… 10
Fig. 5 第54次調査地点位置図（縮尺1/500） …… 10
Fig. 6 第54次調査遺構配置図（縮尺1/200） …… 11
Fig. 7 溝 SD 01実測図（縮尺1/40） …… 14

Fig. 8　溝 SD 02実測図（縮尺1/60）…… 15
Fig. 9　溝 SD 03実測図（縮尺1/40）…… 17
Fig. 10　溝 SD 04実測図（縮尺1/40）…… 18
Fig. 11　溝 SD 01出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）…… 20
Fig. 12　溝 SD 02出土遺物実測図①（縮尺1/3）…… 21
Fig. 13　溝 SD 02出土遺物実測図②（縮尺1/3）…… 22
Fig. 14　溝 SD 02出土遺物実測図③（縮尺1/3・1/4）…… 23
Fig. 15　溝 SD 02出土遺物実測図④（縮尺1/4）…… 25
Fig. 16　溝 SD 03出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 27
Fig. 17　溝 SD 04出土遺物実測図①（縮尺1/3）…… 28
Fig. 18　溝 SD 04出土遺物実測図②（縮尺1/3）…… 29
Fig. 19　溝 SD 04出土遺物実測図③（縮尺1/3）…… 30
Fig. 20　溝 SD 04出土遺物実測図④（縮尺1/3）…… 33
Fig. 21　溝 SD 04出土石製品実測図①（縮尺1/3）…… 35
Fig. 22　溝 SD 04出土石製品実測図②（縮尺1/3）…… 36
Fig. 23　溝 SD 04出土石製品実測図③（縮尺1/1）…… 38
Fig. 24　表土出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 39
Fig. 25　環濠配置図（縮尺1/2,000）…… 41
Fig. 26　第68次調査地点位置図（縮尺1/300）…… 51
Fig. 27　第68次調査遺構配置図（縮尺1/100）…… 52
Fig. 28　第68次調査区周壁土層実測図（縮尺1/80）…… 55
Fig. 29　土壙 SK 01～05実測図（縮尺1/30）…… 56
Fig. 30　各遺構出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）…… 57
Fig. 31　調査地点及び中世溝配置図（縮尺1/3,000）…… 60
Fig. 32　第69次調査地点位置図（縮尺1/300）…… 62
Fig. 33　第69次調査第 1 面遺構配置図（縮尺1/100）…… 64
Fig. 34　第69次調査第 2 面遺構配置図（縮尺1/100）…… 65
Fig. 35　土壙 SK 01～04・井戸SE01・02実測図（縮尺1/40）…… 67
Fig. 36　掘立柱建物 SB 01・03・04実測図（縮尺1/80）…… 69
Fig. 37　掘立柱建物 SB 02実測図（縮尺1/80）…… 70
Fig. 38　各遺構出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 75
Fig. 39　Pit 出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 76
Fig. 40　包含層出土遺物実測図①（縮尺1/3）…… 77
Fig. 41　包含層出土遺物実測図②（縮尺1/3）…… 78
Fig. 42　No. 1 グリット出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 81
Fig. 43　No. 1 ～ 3 グリット出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 82
Fig. 44　遺構面出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 83
Fig. 45　第 8 ・21・69・156次調査遺構配置図（縮尺1/400）…… 86
Fig. 46　第73次調査地点位置図（縮尺1/300）…… 93
Fig. 47　第73次調査遺構配置図（縮尺1/100）…… 95

Fig. 48　第73次調査区周壁土層実測図（縮尺1/80）…… 96
Fig. 49　井戸 SE 01実測図（縮尺1/40）…… 97
Fig. 50　掘立柱建物 SB 01～04実測図（縮尺1/80）…… 99
Fig. 51　各遺構出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 100
Fig. 52　第26・73・138・151次調査遺構配置図（縮尺1/400）…… 102

表　目　次

Tab. 1　第54次調査遺構一覧表…… 12
Tab. 2　第54次調査遺物一覧表…… 42
Tab. 3　第54次調査青銅製品及び鉄製品一覧表…… 48
Tab. 4　第54次調査石製品一覧表…… 48
Tab. 5　第68次調査遺構一覧表…… 54
Tab. 6　第68次調査遺物一覧表…… 61
Tab. 7　第68次調査丸瓦計測表…… 61
Tab. 8　第68次調査平瓦計測表…… 61
Tab. 9　第68次調査石製品一覧表…… 61
Tab. 10　掘立柱建物一覧表…… 69
Tab. 11　第69次調査遺構一覧表…… 87
Tab. 12　第69次調査遺物一覧表…… 88
Tab. 13　第69次調査平瓦計測表…… 92
Tab. 14　第69次調査石製品一覧表…… 92
Tab. 15　第73次調査遺構一覧表…… 97
Tab. 16　掘立柱建物一覧表…… 98
Tab. 17　第73次調査遺物一覧表…… 101
Tab. 18　第73次調査石製品一覧表…… 101

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

福岡市は、昭和50年までに１市30町村が合併した都市で、面積は約336.81㎢を測る。平野部は大きく分けると福岡平野と早良平野からなっている。有田・小田部地区は福岡市の西部に広がる早良平野のほぼ中央部に位置し、台地上の面積は約70万㎡を測る。この地域はかつては福岡市近郊の農村地帯であった。昭和47年に福岡市が政令指定都市に指定された以降、九州経済の中核都市として目醒しく発展すると共に、人口の集中にしたがって福岡市の西部地域は道路網の整備や地下鉄の開通によって住宅化が著しく進められているところである。有田・小田部地区も同様に過日の田園・畑作地域の面影はなく、現在では高層アパートが林立している。

福岡市教育委員会では、昭和50年より有田・小田部地区のこれらの開発に対処して発掘調査を実施しており、平成５年度現在までに174件を数える。多くは個人専用住宅であったが、近年は学校建設、市営住宅建設などの公共事業や大型の民間の開発事業も含まれている。本書では個人専用住宅及び、店舗付住宅など国庫補助の対象事業として発掘調査を実施した昭和56年度の第54次・第68次調査、昭和57年度の第69次・第73次調査の成果を報告するものである。

２．発掘調査組織

(1)　昭和56年度の調査組織（第54次・第68次調査）

調 査 主 体　福岡市教育委員会
調 査 担 当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第２係
庶 務 担 当　埋蔵文化財第２係長　折尾　学　（庶務）岡島洋一
発 掘 担 当　井澤洋一、山崎龍雄、杉山富雄
調査協力者　松尾和雄、岩城庄助、山下敏、結城茂巳、高浜謙一、山口勝巳、安岡洋二、安達昌利、前田治郎、松井フユ子、坂口フミ子、佐藤テル子、金子由利子、清原ユリ子、渡辺武子、西尾たつよ、松尾玲子、柴田幸子、土斐崎初栄、庄野崎ヒデ子、庄野崎チタカ、内尾トミ子、真子昌子、真鍋町代、佐谷静枝、尾園佳枝、末松信子、砥綿チエ子、堀川ヒロ子、中村千里、伊庭秀子、坂田まさ子

(2)　昭和57年度の調査組織（第69次・第73次調査）

調 査 主 体　福岡市教育委員会
調 査 担 当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第２係
庶 務 担 当　埋蔵文化財第２係長　折尾学、（庶務）岡島洋一
発 掘 担 当　井澤洋一、松村道博
調査補助員　山口勝巳、池野尚昭、谷沢仁、辻哲也
調査協力者　松尾和雄、岩城庄助、山下敏、結城茂巳、高浜謙一、渡辺武子、松井フユ子、佐藤

テル子、金子由利子、清原ユリ子、真子昌子、西尾たつよ、松尾玲子、柴田幸子、土斐崎初栄、庄野崎ヒデ子、庄野崎チタカ、末松信子、砥綿チエ子、堀川ヒロ子、中村千里、伊庭秀子、坂田まさ子、平井和子、後藤ミサヲ、柴田勝子、柴田春代、緒方マサヨ、山田悦子、安部宏、堺裕明、前田治郎、安岡洋二、明野隆、西島健一、前田乱、松江宏文、萩原陽一郎、北川智恵美

(3) 平成6年度資料整理

整理主体　福岡市教育委員会
庶務担当　埋蔵文化財課第1係　内野保基
整理報告　福岡市博物館学芸課主査　井澤洋一（前職　埋蔵文化財課）
整理調査員　牛房綾子、吉田扶希子、廣嵜香、池田孝弘
整理作業員　多田映子、福田小菊、西口キミ子、田中昭子、三浦明子、吉永祐美子、小松原澄江

(有田第54次調査)

遺跡調査番号	8116		遺跡略号	ART-54
地番	有田2丁目16-1		分布地図番号	原82
開発面積	1,224㎡	調査対象面積	1,224㎡	調査面積	233㎡
調査期間	昭和56年7月22日～7月29日			

(有田第68次調査)

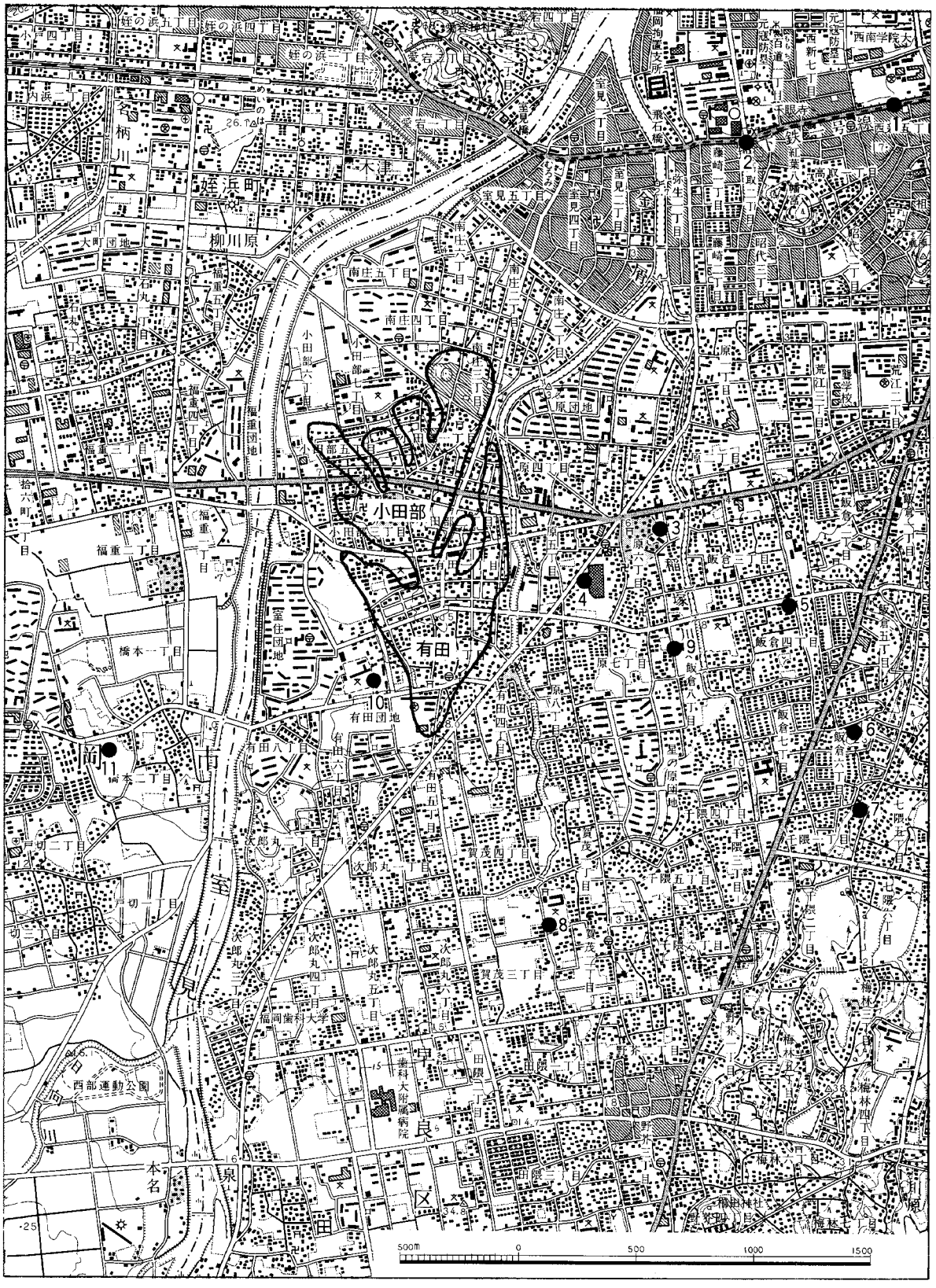
遺跡調査番号	8209		遺跡略号	ART-68
地番	有田2丁目17-42		分布地図番号	原82
開発面積	146㎡	調査対象面積	146㎡	調査面積	76㎡
調査期間	昭和56年6月8日～6月15日			

(有田第69次調査)

遺跡調査番号	8210		遺跡略号	ART-69
地番	有田1丁目13-10		分布地図番号	原82
開発面積	649㎡	調査対象面積	649㎡	調査面積	202㎡
調査期間	昭和57年6月16日～7月31日			

(有田第73次調査)

遺跡調査番号	8214		遺跡略号	ART-73
地番	小田部1丁目189		分布地図番号	室見81
開発面積	144㎡	調査対象面積	144㎡	調査面積	62㎡
調査期間	昭和57年9月28日～10月8日			



1.西新町遺跡　2.藤崎遺跡　3.原遺跡　4.原談儀遺跡　5.飯倉遺跡
6.飯倉原遺跡　7.千隈遺跡　8.鶴町遺跡　9.原染町遺跡　10.有田七田前遺跡　11.橋本榎田遺跡

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡（縮尺1/25,000）

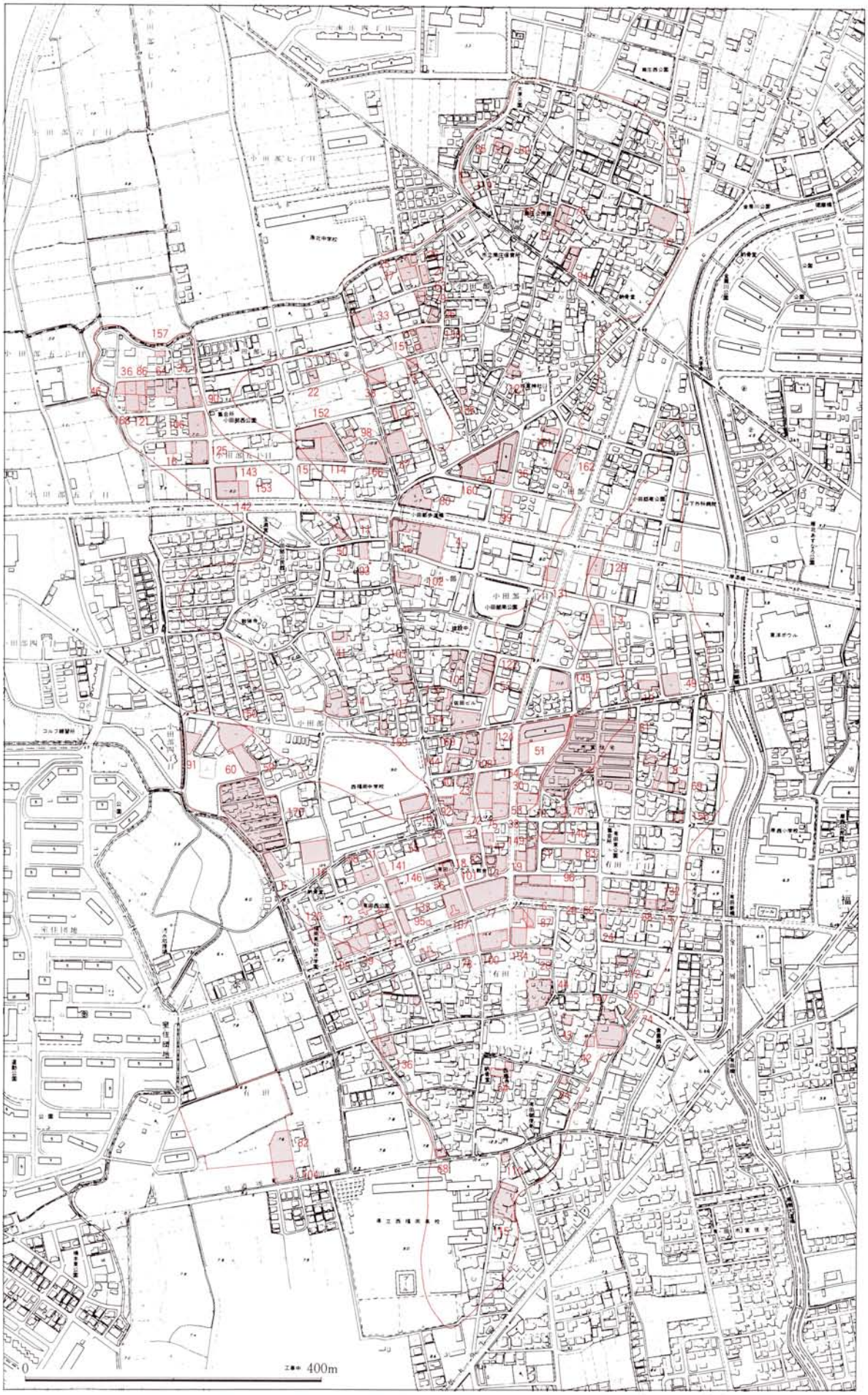
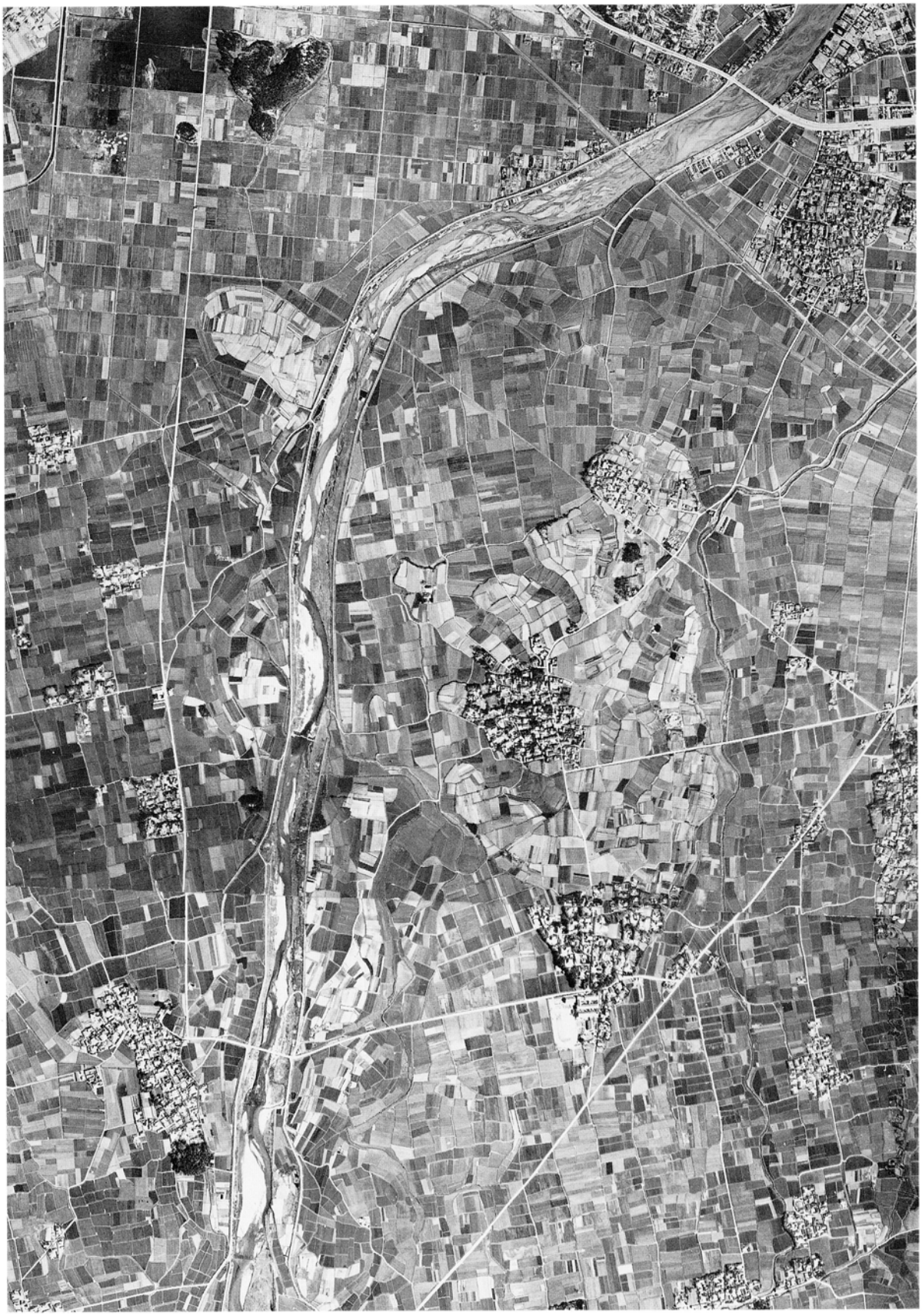


Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点（縮尺1/7,500）　※数字は調査次数を表わす。



有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）

有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）

第２章　有田・小田部の歴史

(1)　立地・歴史的環境

有田・小田部の立地環境及び、歴史的環境については、既刊の報告書の中で詳細に述べられているので、これらの報告書を参照されたい。ここでは、発掘調査に関連する有田・小田部地区の歴史的事項を「筑前国續風土記拾遺」「早良郡志」の文献より転記した。

(2)　文献資料

「筑前國續風土記拾遺」

小田部村

和名鈔に此郡に田部郷あり。此村は其遺名なるへし。日本紀景行天皇五十七年に諸國に田部を置れしよし見えたり。（是古へ屯倉の公田を耕す者の称なり。民の字を多美といふも此田部と同事なり。）有田も本は此村より別れたり。（飯盛社領文永の坪付に小田部郷とあり。此村にも昔飯盛社領有しと見えたり。）村の西に室見川有。（此川の内に若宮、渡瀬、日渡し、渡瀬、柳川原、渡瀬等の名あり。）太閤道鳥飼村の南より荒江原村に入て、左に往還を行は肥前三ツ瀬越の道なり。右の小路を直に西に行は、此村の松尾原を下りて室見川を渡り、姪濱の南を經て下山門村に至る。是天正の比の往還也。秀吉公名護屋御陣の時、此道を經過し給し故に今に太閤道といふ。

教善寺

村西口に在。真宗西博多万行寺末座元也。

古塚　松浦殿塚　筑紫殿塚

松浦殿塚は松尾原に在。又丸山塚とも云。周四十間許高二間。上に古松あり。小田部氏の系圖を按るに、元祖は嵯峨源氏にて松浦黨也。左大臣源融公五代の孫を渡邊源次綱といふ。其子源太夫判官久始て肥前國松浦郡平戸に住す。次男松浦小源次正といふ。其後裔松浦隼人佐鎮隆の時、小田部城主木上何某と云者を討て、當所を領し初て小田部氏と号す。其子鎮俊（後に上総介宗養）其養子を民部少輔俊之（後に入道して紹叱といふ。）と見えたり。しかれは此松浦殿塚と云は、かの隼人佐鎮隆を云なるへし。筑紫殿塚は村の東北田間にあり。また大塚と云。周四十間許高三間許三段に縁有。上の段に土手回れり。古松一本立。筑紫氏由来詳ならす。又村の西に山伏塚といふあり。又松尾原の内に立石三ツ有。中の篇石高六尺幅七尺厚一尺四五寸あり。左右の二石はやゝ低し。共に銘字なし。是も古墓なるへし。其由来傳らす。

有田村

民居一所に在。東に金屑川有。北に流る。（飯盛社應永中坪付に有田村あり。）

寶満宮

村南に在。産神也。所祭玉依姫命　神功皇后　應神天皇也といへり。由来未レ詳。

○天満宮（天神屋敷）小田部氏の鎮守として祭りし社といふ。其側にから堀址有。下に見えたる小田部氏の里城址なり。

西應寺

村内に在。真宗西博多万行寺末也。開基の僧を恵正といふ。

古宅

村内に在。堀内といふ。堀址残れり。廣宅なりしと見ゆ。是小田部氏か里城なるへし。其邊に小田部氏墓といふもあり。塚上に切石二重を置り。銘字はなし。癤を患ふる者祈願すれは必験ありとなん。又村南に築城といふ所あり。鎮西要略に小田邊城といふ見えたるは、是らをさしていふか。

「早良郡志」

村社寶満神社　當社は、有田字馬場にあつて、祭神は玉依姫命彦火火出見尊鸕鷀草葺不合尊である。例祭は九月十九日にして、境内五百二十二坪社殿約十三坪餘明治五年十一月三日、村社に定められた。氏子六十五戸、境内の菅原神社は、明治十五年一月二十日字天神屋敷から遷したのであつて、小田部氏の鎮守として祭つた社と云つて居る。當社の西方に一反歩許りの宮田と云ふ所がある、往年本社の祭田であつたと言ひ傳へて居る。

眞宗教善寺　當山は、小田部字宮城にあつて、菩提山と號し、眞宗西派に屬して居る。境内百七十九坪堂宇四十二坪にして、寺内にある二の觀音堂は字宮城と、字東屋敷とにあつたのを明治十四年七月當寺内に移したのである檀徒八十戸。

眞宗西應寺　當山は、有田字馬場にあつて、荒平山と號し眞宗西派に屬して居る。開基は僧恵正といふも、年月日は詳でない。境内百八十七坪堂宇二十五坪ありて、檀徒は三十五戸。

小田部氏墓　小田部字立石と謂ふ所に、小田部氏の墓と云ふのがある。二段切石を重ねてあるも銘の見るべきものがない、里人は甲塚とも謂つて居る。癤を患ふる者祈願すれば驗ありとて參詣者が多い。

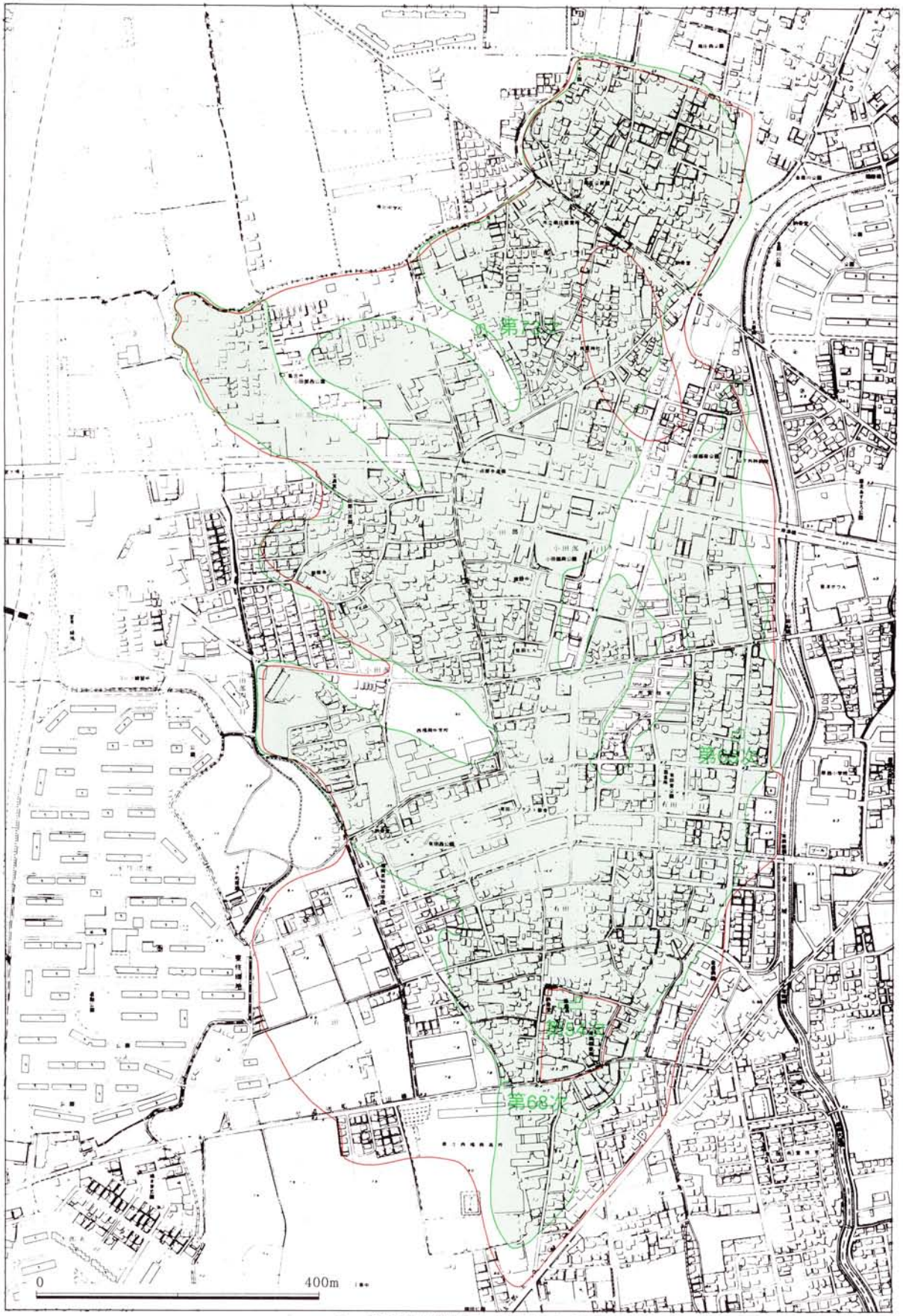


Fig. 3　調査地点位置図（縮尺1/8,000）

第３章　第54次調査（調査番号8116）

１．地形と概要

(1)　立 地

当該地は福岡市早良区有田２丁目16-1に所在し、発掘調査面積は233㎡である。調査期間は昭和56年７月22日～７月29日までである。

今回の発掘調査地点は旧有田村の中心地域に位置し、戦国時代において荒平城主として歴史上に登場する小田部氏に関係が深い西応寺の境内にあたる。この地域の有田・小田部の台地は南側に向かって尖った形状を示し、かつ台地の両側に北側から小さな開析谷が入り込むことで、幅160ｍのくびれ部を形成している。

西応寺は台地の南側の尖った地形の中心に位置し、標高13.4ｍを示す宝満宮の北側後背地にある。この地域は、戦国時代に存在したと云われる小田辺城の推定地でもある。この城は「早良郡志」によれば小田部氏の里城と云い伝えられている。有田地域には現在も「常丸」・「堀ノ内」・「馬場」などの旧地名が通称として残り、台地縁辺部には「ホカヤネ」・「鬼丸ホゲ」などの濠跡があったと云われる。又、現在も数ヶ所の土塁の跡が確認できる。昭和16年の地図によれば当該地の東側には南北方向の長さ約55ｍの土塁が存在していることが示されている。現在は削平を受けている。

西応寺は荒平山と号し、浄土真宗西本願寺派であるが、開基の恵正は天正７年に落城した荒平城主小田部鎮元（俊之）紹叱の家臣小林氏の末裔と伝えられている。境内には丸石を用いた石組井戸が１基残っており、第44次調査で検出した中世末の井戸構造に合致している。

(2)　概 要

発掘調査は庫裏の建替えに伴うものである。残土処理の関係から、２区に分けて調査を行った。又、Ⅱ区では排水管等の地下構造物が存在したため、調査は困難を極めた。Ⅰ区では江戸時代の溝１条、Ⅱ区では縄文～弥生時代の溝２条、中世末の溝１条及び、柱穴群を検出した。

西応寺境内の古井戸（北から）

井戸内の状態

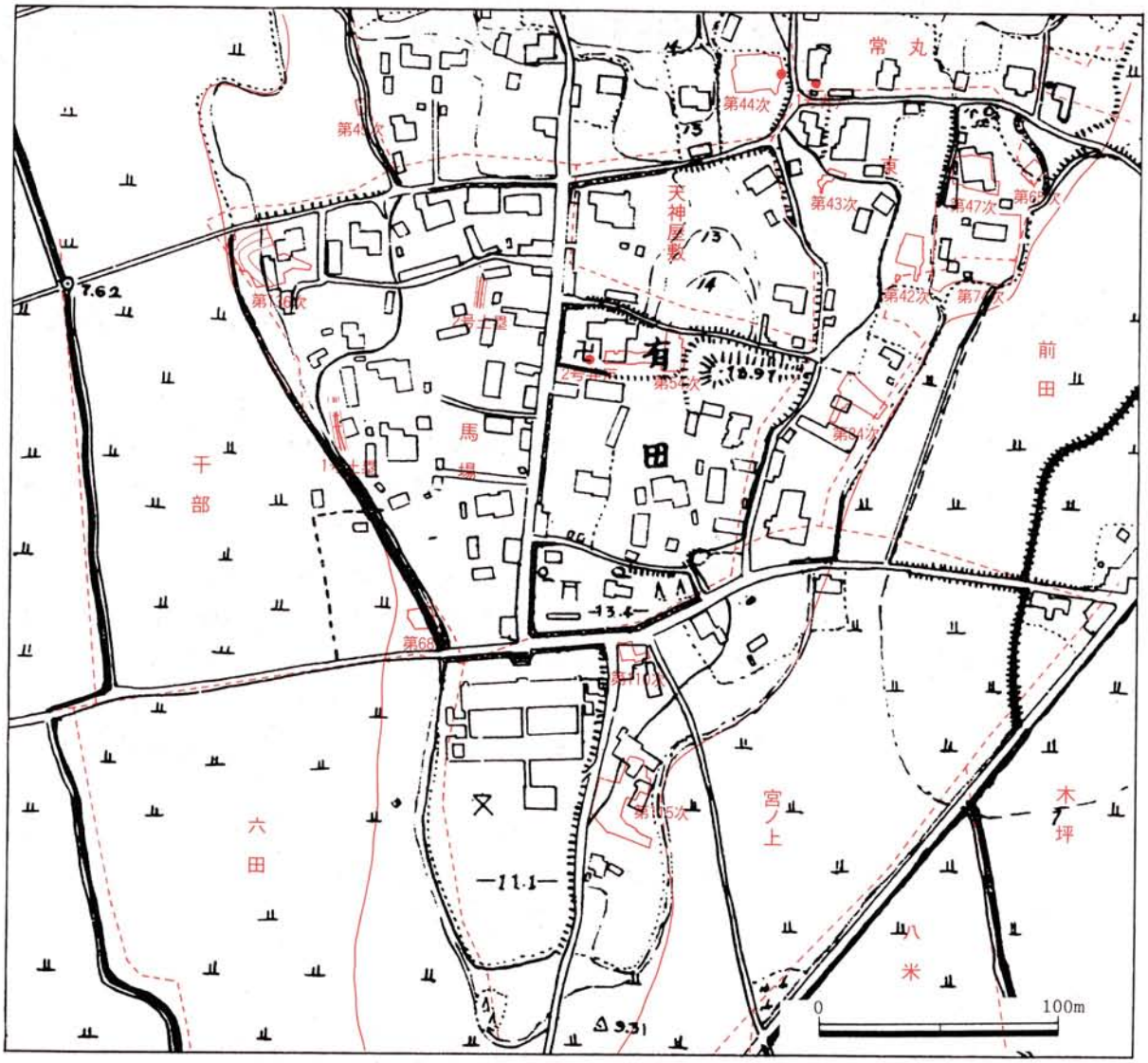


Fig. 4　調査地点及び石組井戸・土塁配置図（縮尺1/3,000）

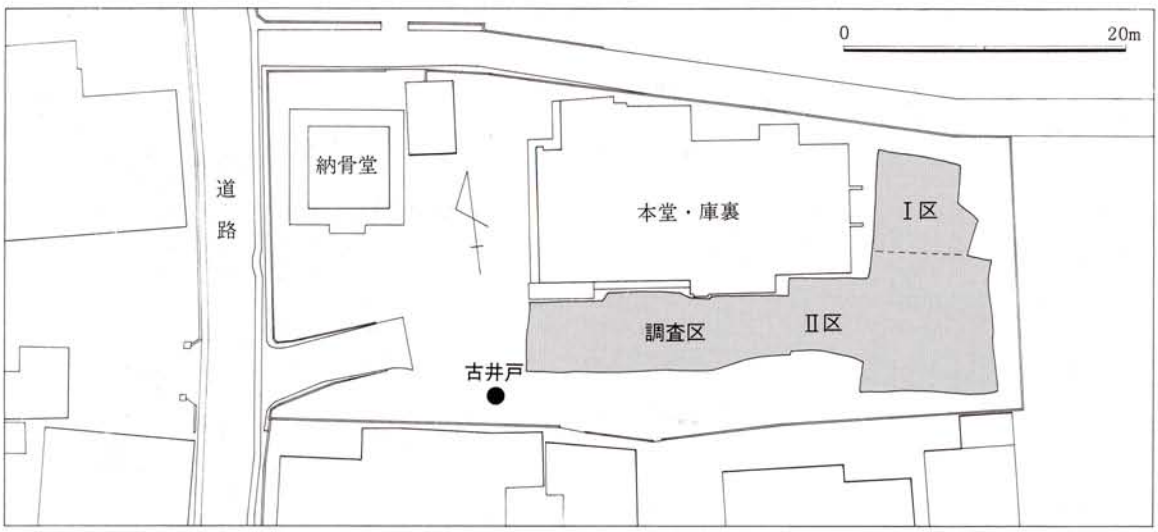


Fig. 5　第54次調査地点位置図（縮尺1/500）

Fig. 6　第54次調査遺構配置図（縮尺1/200）

2．遺構説明

(1) 溝 (SD)

調査区のⅠ区・Ⅱ区において南北方向の溝を２条、東北から東西方向に曲がる溝１条、南北方向の溝１条を検出した。溝SD 03・04は台地を横断する形で存在する。溝SD 01・02は排水的な役目をもったものと考えられる。

Tab. 1　第54次調査遺構一覧表　　(単位：cm)

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形態 平面形	形態 断面形	長	幅	深	出土遺物	時期	備考
SD01	M 1	溝		逆梯形	980$^{+\alpha}$	104～194	最大43	夜臼式土器壺・甕、弥生土器鉢・壺・甕、土師器、須恵器、瓦質土器摺鉢、中国青磁碗、中国白磁香炉、中国陶器、国産青磁碗・香炉、国産白磁、伊万里焼？足付坏・赤絵、染付皿、国産陶器摺鉢、平瓦、貨幣（寛永通寶）、鉄釘、鉄滓、石臼、黒曜石	近世18C	北西から南方向（中央部で屈曲）
SD02	M 2	溝		V字形	950$^{+\alpha}$	180	166	夜臼式土器蓋・甕・鉢、弥生土器高坏・壺・甕・蓋、土師器皿・坏・高坏、土師質土器鉢・摺鉢・鍋、須恵器提瓶、瓦器皿、瓦質土器鉢・摺鉢・片口摺鉢・鍋・釜・羽釜・火舎・鉦、中国白磁、中国陶器碗・甕・大甕、国産陶器摺鉢、唐津皿、備前焼甕、丸瓦、鉄製鍋・鉄製刀子、鉄滓、砥石・石錘・石斧・石鏃・凹み石・板碑・石塔・石鍋、黒曜石	中世16C	南北方向 上部を近代の攪乱で切られる
SD03	M 3	溝		V字形	1440$^{+\alpha}$	最大200	最大100	夜臼式土器・丹塗り鉢・丹塗り壺・甕、弥生土器鉢・丹塗り壺・甕、土師器、国産染付、瓦、扁平片刃石斧・石鎌・打製石鏃、黒曜石、サヌカイト	縄文時代晩期～弥生時代	東西方向 SD02・SD04に切られる
SD04	M 4	溝		逆梯形	2550$^{+\alpha}$	最大350	最大60	夜臼式土器蓋・鉢・壺・甕、弥生土器鉢・高坏・蓋・壺・甕・甑、砥石・石錘・磨製石斧・石鏃・石庖丁・叩き石？・磨石・削器・円盤形石製品	弥生時代前期	東西方向 西側に行くに従い深くなる SD03を切る

Ⅰ区 全景（南から）

Ⅱ区　東側調査区全景（西から）

Ⅱ区　西側調査区全景（東から）

SD 01（Fig. 7）　調査区の東側境界に位置しており、長さ9.8mまでを確認するにとどまった。大略南北方向から東西方向に流下する溝で、排水溝の役目を持っている。断面形は逆梯形、又はU字形を呈し、溝上面の幅は194cm、底面の幅は70cm、深さ43cmを測る。覆土は暗茶灰色粘質土、又は八女粘土を含んだ暗茶褐色粘質土を主体としている。覆土から伊万里焼の碗等が出土しており、18C前半代の遺構と考えられる。

SD 02（Fig. 8）　上部は削平を受けている。調査区の東側境界地に位置しているため9.5mまでの長さを確認するにとどまった。大略南北方向の溝で、断面形はV字形を呈している。溝の上面の幅は180cm以上、深さは166cmを測る。覆土は暗い茶褐色粘質土、又は八女粘土を含んだ暗褐色粘質土を主体としている。溝の中位の高さ90cmのところに礫群が水平堆積して存在する。この礫群内の遺物は唐津焼等の近世の遺物を含んでいる。礫群より下層から出土した土師器坏は中世的様相をもっていることから、溝の廃絶と再利用にかかわる状況を示すものと考えられる。中世後半期の遺構と考えられる。

SD 03（Fig. 9）　調査Ⅱ区の北側境界に位置しており、溝SD 04に切られる。削平が著しく、14.4mまでの長さを確認するにとどまった。大略東西方向の溝で、断面形はV字形を呈している。溝の上面の幅は200cm、深さは100cmを測る。覆土は黒色粘質土、又は褐色土を含んだ黒褐色粘質土を主体としている。覆土から突帯文土器等が出土しており、縄文時代晩期の遺構と考えられる。

SD 04（Fig. 10）　調査Ⅱ区に位置しているが、他の溝との切り合いが著しいことや上部の削平により、約26mまでの長さを確認するにとどまった。溝SD 03を切っている。大略東西方向の溝で、断面形は逆梯形を呈している。溝の上面の幅は350cm、底面の幅は270cm、深さ60cmを測る。覆土は黒色粘質土、又は八女粘土を含んだ黒褐色粘質土を主体としている。覆土から縄文土器、弥生土器が出土しており、弥生時代前期の遺構と考えられる。

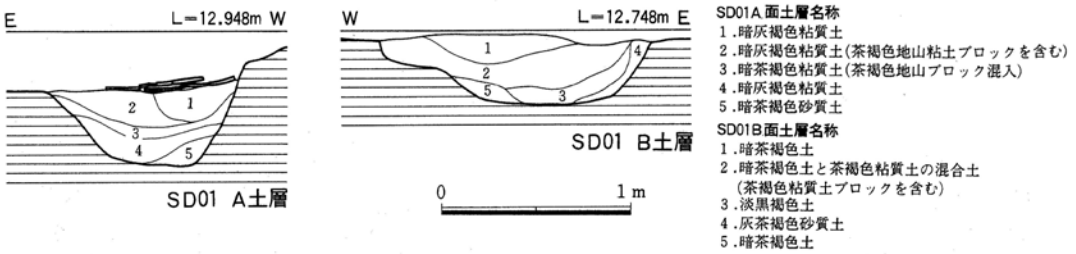
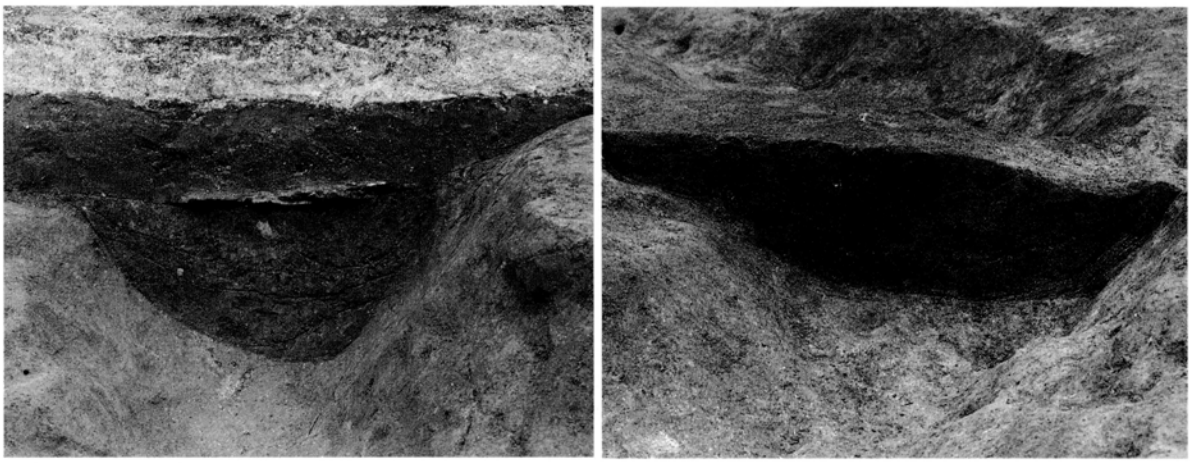


Fig. 7　溝SD 01実測図（縮尺1/40）



溝SD01土層A面の状態（北から）　　溝SD01土層B面の状態（北から）

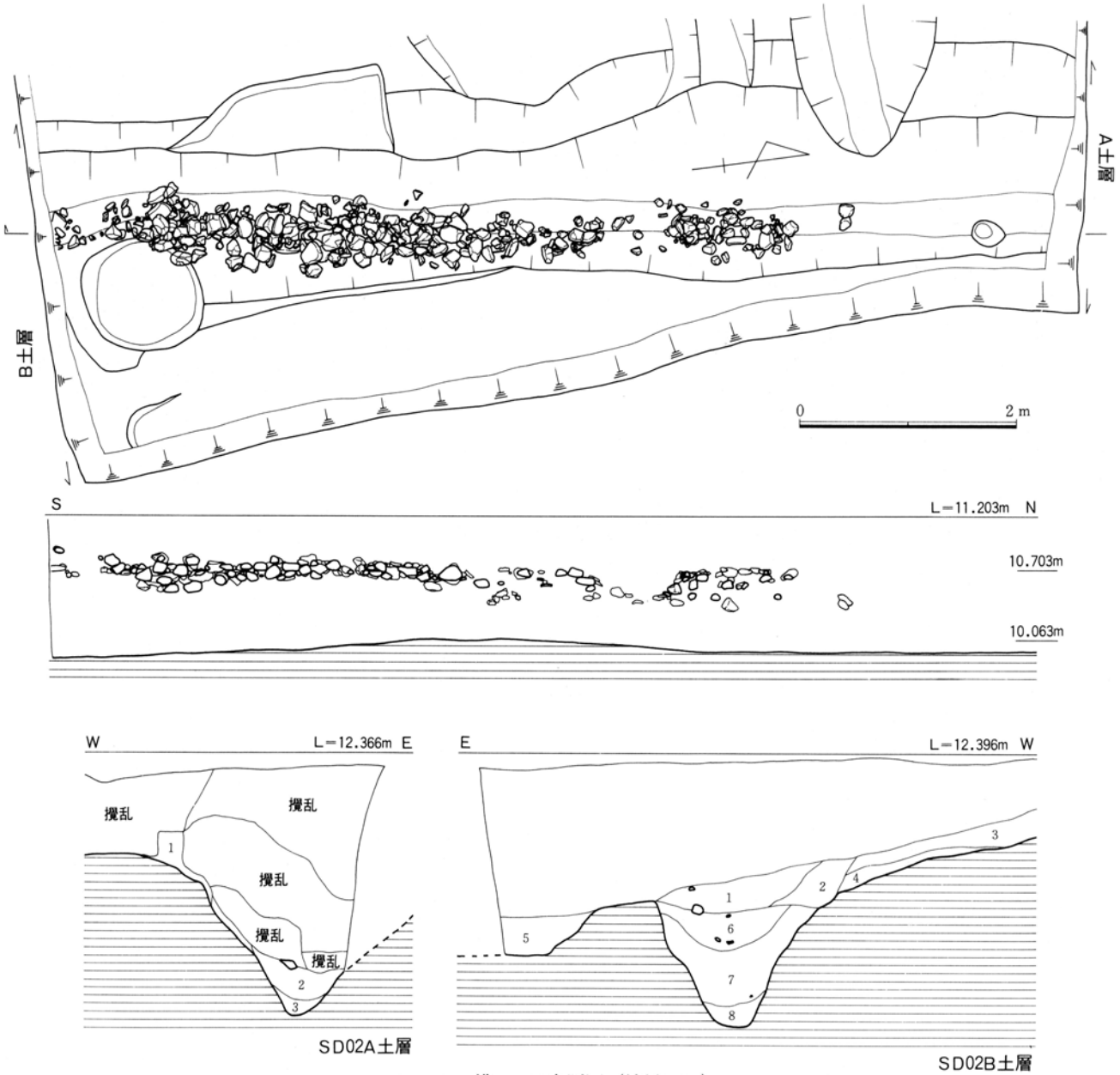
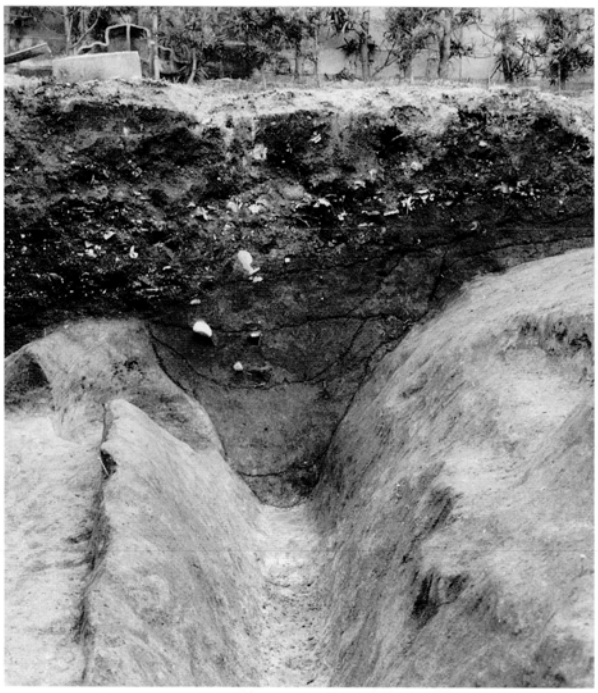


Fig. 8　溝SD02実測図（縮尺1/60）

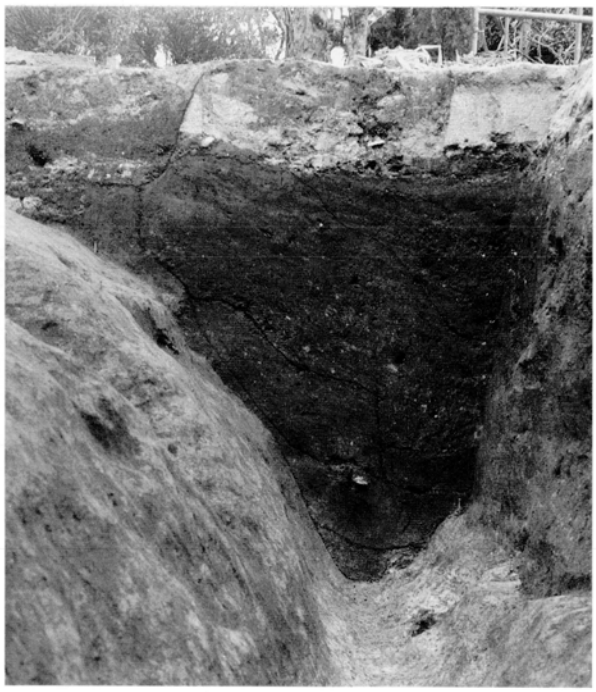
溝SD02A土層名称
1.赤みがかった明褐色土(やや粘質､軟)
2.褐色土(締まりなく､粗い)
3.2に褐色粘質土を含む(固く締まる)

溝SD02B土層名称
1.暗茶褐色土(灰褐色土ブロック混入｡)
2.暗褐色土(茶褐色地山ブロック混入｡やや粘質｡固い)
3.1と同じ
4.明褐色土(茶褐色地山土混入)
5.褐色土と茶褐色地山土の混合土
6.暗褐色土(粘質｡締まりなく､やわらかい)
7.褐色土(やや粘質｡締まりがない)
8.灰褐色粘質土(褐色土混入)

溝SD02礫群内の板碑出土状態



溝 SD02南壁土層状態（北から）

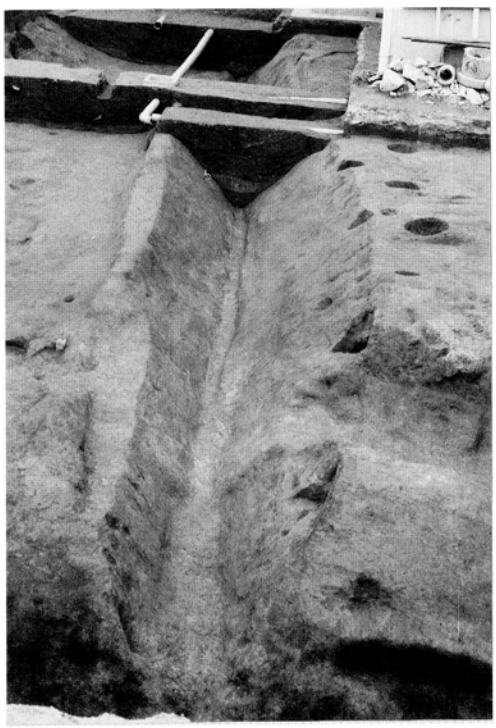


溝 SD02北壁土層状態（南から）

溝 SD02礫群出土状態（北から）

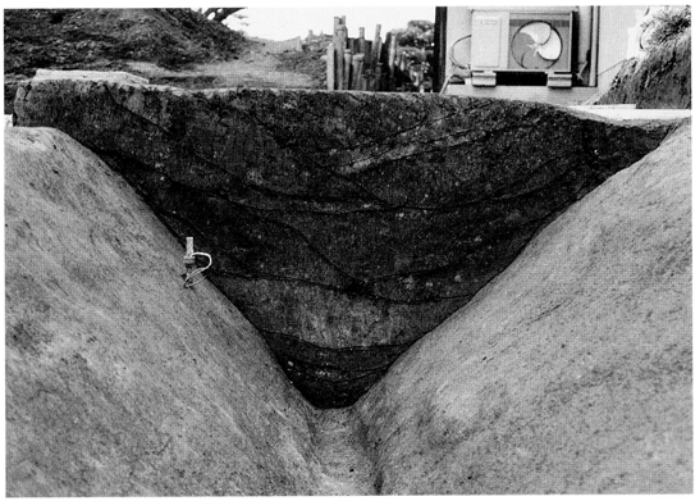
溝 SD02完掘状態（北から）

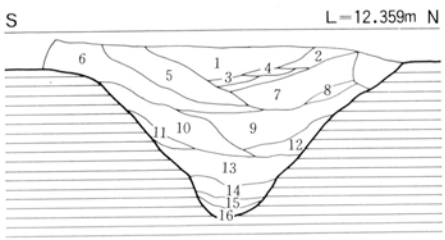
溝 SD03・04（東から）



上　溝 SD03（東から）

右　溝 SD03土層断面の状態（東から）

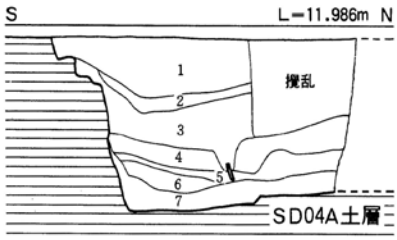




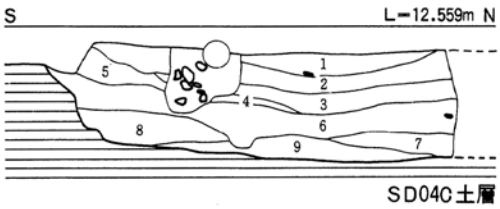
溝SD03土層名称

1.黒褐色粘質土にローム粒子多く混入
2.黒褐色粘質土とローム土の混合土
3.黒色粘質土にロームブロック少量混入
4.褐色粘質土ブロックに黒褐色粘質土混入
5.黒色粘質土にローム粒子及び褐色土ブロック混入
6.暗茶褐色粘質土にローム粒子多く混入
7.茶褐色粘質土にローム粒子多く混入
8.褐色粘質土
9.茶褐色粘質土にローム粒子少し混入
10.褐色粘質土に黒褐色粘質土混入
11.褐色粘質土
12.茶褐色粘質土に黒褐色粘質土とロームブロック混入
13.明褐色ロームに黄褐色粘質土混入
14.茶褐色粘質土にローム粒子多く混入
15.12とほぼ同じ
16.暗茶褐色粘質土

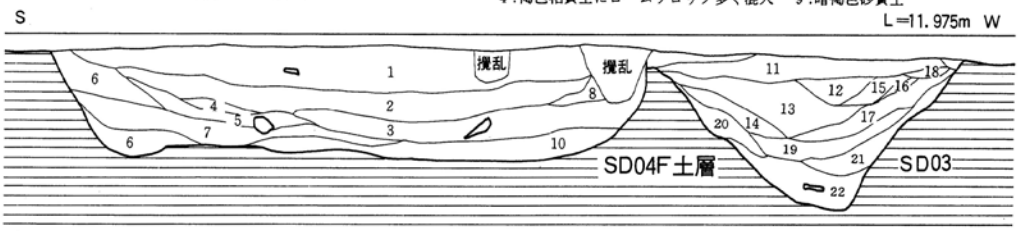
Fig. 9　溝 SD 03実測図（縮尺1/40）



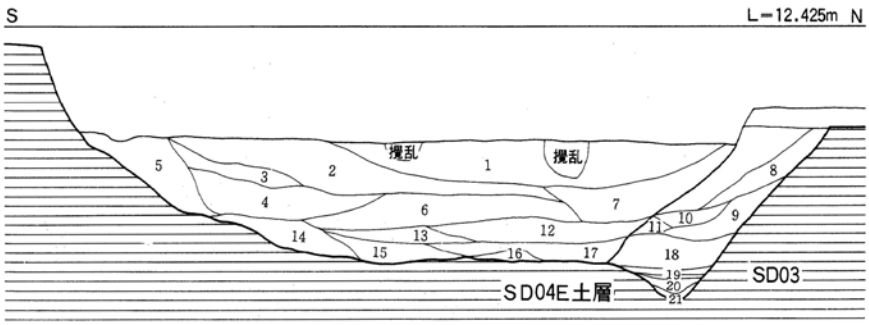
溝SD04A土層名称
1.黒褐色粘質土に黄褐色粒子混入
2.黒色粘質土
3.黒褐色粘質土に黄褐色粒子混入
4.黒褐色粘質土に黄褐色土混入
5.黒褐色粘質土
6.黒褐色砂質土に黄褐色土混入
7.6と同じ(砂質強い)



溝SD04C土層名称
1.黒褐色粘質土
2.黒褐色粘質土に黄褐色粒子多く混入
3.黒褐色粘質土
4.褐色粘質土にロームブロック多く混入
5.黒褐色粘質土に黄褐色粒子多く混入
6.黒褐色粘質土
7.黒褐色砂質土にロームブロック多く混入
8.黒褐色砂質土にロームブロック多く混入
9.暗褐色砂質土

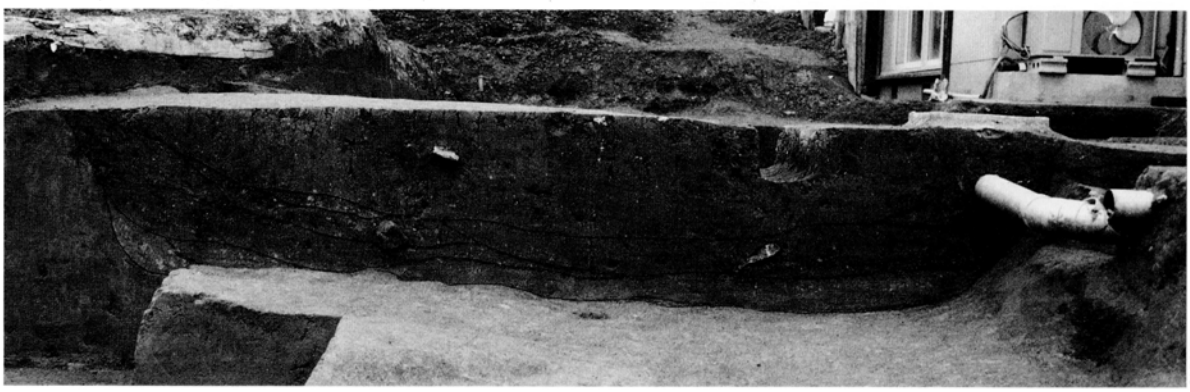


溝SD04F土層名称
1.黒褐色粘質土に黄褐色ローム粒子混入
2.暗茶褐色粘質土に黄褐色ローム粒子混入
3.1とほぼ同じ
4.暗茶褐色粘質土に赤褐色ロームブロック混入
5.暗茶褐色粘質土に赤褐色ロームブロック及び炭化物を多く混入
6.2とほぼ同じ
7.茶褐色粘質土に赤褐色ローム及び炭化物を混入
8.黒褐色粘質土
9.褐色砂質土に赤褐色ロームブロック混入
10.褐色砂質土と黒褐色粘質土と赤褐色粘質土の混合土
11.黒褐色粘質土にローム粒子混入
12.黒褐色粘質土に赤褐色ロームブロック混入
13.暗茶褐色粘質土にローム粒子、黒色土ブロックを混入
14.11と同じ
15.11と同じ
16.暗茶褐色粘質土にローム粒子混入
17.黒褐色粘質土にローム粒子混入
18.暗茶褐色粘質土にローム粒子混入
19.淡赤褐色砂質土にローム粒子混入
20.褐色粘質土(やや砂混じり)
21.茶褐色粘質土と明褐色ロームの混合土
22.明褐色ローム土に茶褐色粘質土混入



溝SD04E土層名称
1.黒褐色粘質土にローム粒子混入
2.1よりやや明るい
3.褐色粘質土
4.褐色粘質土に暗褐色粘土ブロック混入
5.明褐色砂質土
6.茶褐色粘質土にローム粒子混入
7.暗茶褐色粘質土にローム粒子混入
8.暗褐色粘質土にローム粒子多く混入
9.褐色砂質土とロームブロックと黒褐色土の混合土
10.褐色砂質土にロームブロックを少量混入
11.8と同じ
12.暗茶褐色粘質土に炭化物とローム粒子を混入
13.12より明るい
14.明褐色砂質土に茶褐色粘土ブロック混入
15.褐色砂質土にローム粒子混入
16.茶褐色砂質土にローム粒子を混入
17.茶褐色砂質土に黒褐色粘質土ブロックとローム粒子混入
18.赤褐色ロームブロックと褐色砂質土の混合(やや粗い)
19.灰褐色粘質土
20.18と同じ
21.黒色粘質土

Fig. 10　溝 SD 04実測図（縮尺1/40）



溝 SD04東側土層断面の状態（東から）

(2) 小 穴 (SP)

いずれも柱穴と考えられるが、建物を把握することはできなかった。柱穴の大きさは、径30～40cmの間である。遺構の覆土は黒褐色粘質土から茶褐色粘質土までである。

3. 遺 物 説 明

(1) 溝出土遺物 (Fig. 11～23)

SD 01出土遺物 (1～14)　近世遺物を主体としている。1～3は突帯文土器、4・5は弥生土器、7は須恵器である。8・11は伊万里焼で、8の内底と外底にはコンニャク版がある。11は仏飯器であろうか。10は香炉と考えられる。9は龍泉窯系の青磁碗で、内底に花文をヘラ彫りしている。6は瓦質土器の摺鉢、14は石臼の上臼であるが、破損が著しい。復原径17.6cmを測る。凝灰岩製である。側面孔の菱形飾りを欠いている。12は鉄製釘、13は「寛永通寶」である。

SD 02出土遺物 (16～60)　遺物は大きく2群に分けられる。すなわち、溝の中位に分布した礫群内出土遺物及び、礫群よりも上層から出土した遺物の一群と、礫群より下層から出土した遺物の一群である。後者は溝の掘削から廃絶までの段階に関わりをもち、前者の礫層出土遺物は溝廃絶後の切通し道として再利用していた時期を示している。

34～38は礫群中の出土である。他は礫群より下層から出土。礫群より下層から出土した遺物は中世後半期の遺物を主体にしている。24～33は糸切り底の土師器坏で、体部は大きく開き、体部と底部の口径比が大きい。皿の出土はない。これらは、溝中位に検出した礫群より下層から出土したものである。38～43・45～47は瓦質土器である。39・40は湯釜で、いずれも、肩部に家紋状のスタンプをもつ。39は釘抜文、40は梅花文である。41～43は脚付の鍋、45・46は摺鉢、47は鍋である。44・48・49は土師質土器で、44は摺鉢、48は鍋、49は捏鉢である。50・51は鉄製品で、50は口縁部内側に段をもつ鉄鍋、51は鉄製庖丁片であろう。34・36は唐津焼で、34は内面が灰緑色釉の碗、36は摺鉢である。37は中国製の陶器甕である。

その他には、16～21は縄文晩期土器で、16・18・19は鉢、17は浅鉢、20・21は蓋である。22・23は古墳時代の土師器で、22は脚付鉢、23は高坏の脚である。

石器では、52が磨製石斧、53が石錘である。これらは突帯文土器に伴うものと考えられる。54～56・58は砥石、57は凹み石、59は一石五輪塔の破片で、一部を砥石として利用している。60は板碑の頭部で、同様に一部を砥石として利用している。

SD 03出土遺物 (61～83)　いずれも縄文晩期土器で、61～72・76～81は甕、73は浅鉢、74・82は壺形土器である。75は小型の鉢で、口縁部の外側をつまみ出し、端部を水平にナデ調整する。内外面はナデ調整で、黄褐色を呈する。77の外底には木の葉の圧痕があり、78・81の外底は削り調整を行っている。83は磨製石鎌片で、両刃である。

SD 04出土遺物 (85～208)　縄文晩期土器、弥生土器が混在して出土しているが、弥生土器は板付Ⅰ式土器を主体としている。

第1層の出土遺物は、85～88・91～99が縄文晩期土器である。88は浅鉢、85～87、91～97は甕、98は甑である。98の穿孔は焼成後に施す。89・90・100～108は弥生土器で、90・104～106・108は壺形土器である。90の外面は肥厚させ、段をもっている。他は甕形土器である。

第2層の出土遺物では109～112・117・119～126・128・130が縄文晩期土器、他は弥生土器である。

109・110は甕、111は浅鉢、117は壺で内外面はヘラミガキを施す。121・123・124は鉢、112は黒色研磨の壺である。119・120・122・125・126・128・130は甕の底部である。板付Ⅰ式土器の内、116・118・127・129・137・138は壺形土器で、116・127は小型壺で、外面はナデ調整。底部は円盤貼付である。

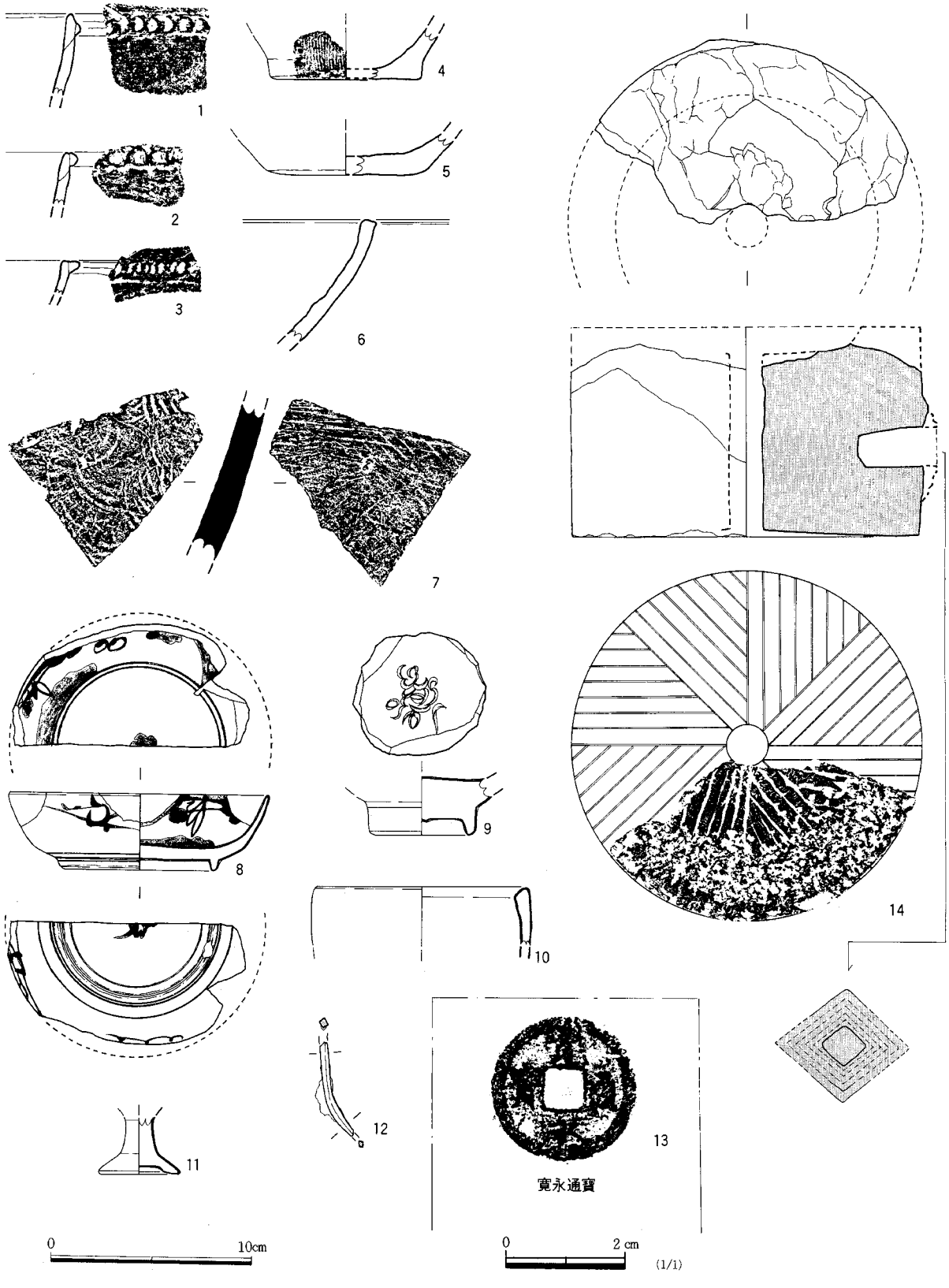


Fig. 11　溝 SD 01出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）

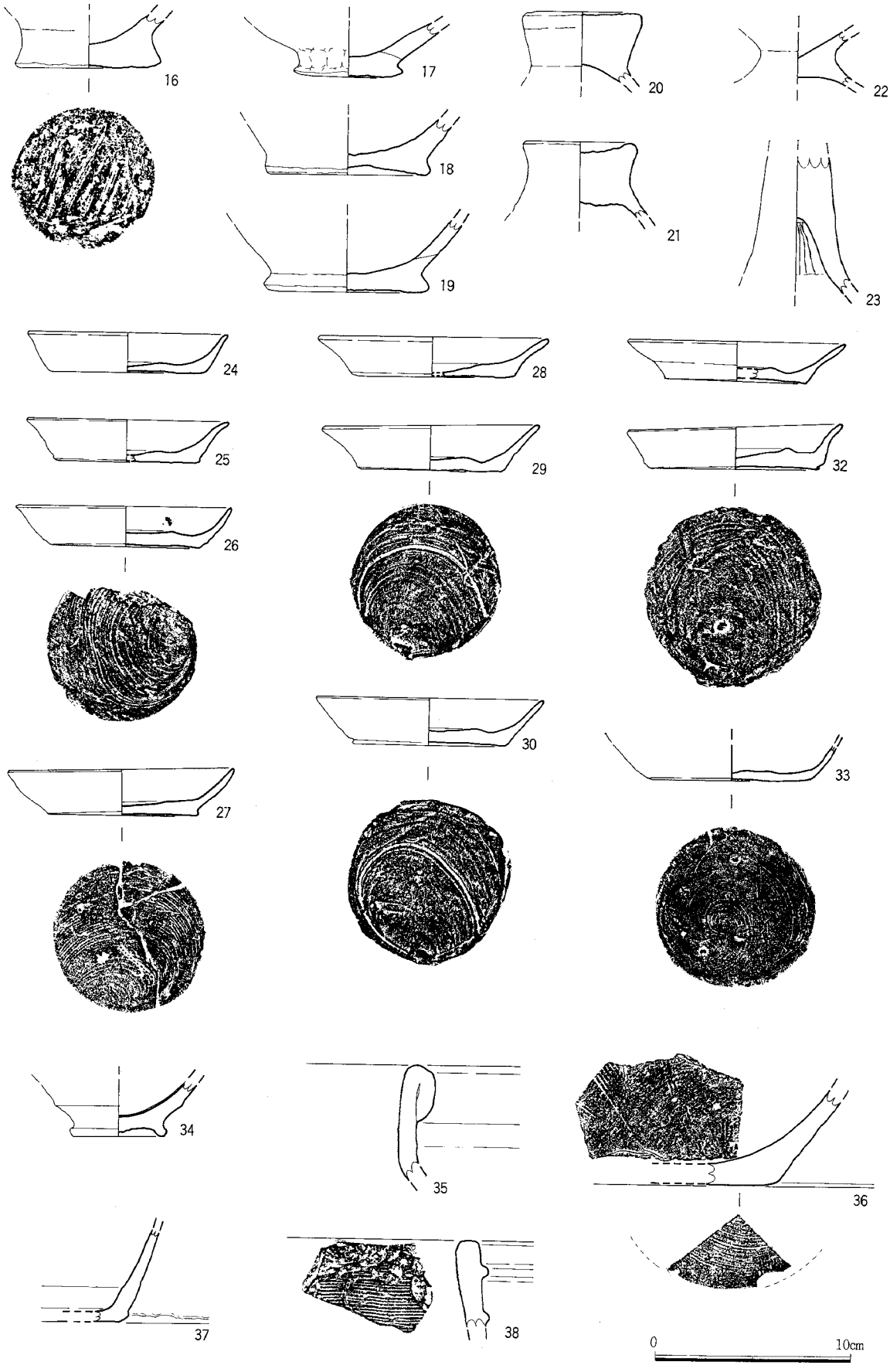


Fig. 12　溝 SD 02出土遺物実測図①（縮尺1/3）

113～115・131～136は甕形土器で、口縁部に刻目を有している。132の外底部に圧痕がある。139は蓋形土器、140・141は高坏の脚片である。142は丸底の鉢で、わずかに小さな底部を形成している。形状より弥生時代終末の土器と考えられる。

第3層の出土遺物も第2層と同様に縄文晩期土器が混入している。又、わずかではあるが新しい時期の土器がある。143・144・148～152は縄文晩期土器で、いずれも甕である。145～147・153～172は弥生土器で、145～147、153～160は甕である。160は後期に属する甕である。147の口縁部には刻みがなく、頸部内面を肥厚させているところから、時期的に下るものである。161～168は壺で、166～168は外面にヘラ描きの山形文、重弧文を施す。171・172は蓋形土器である。

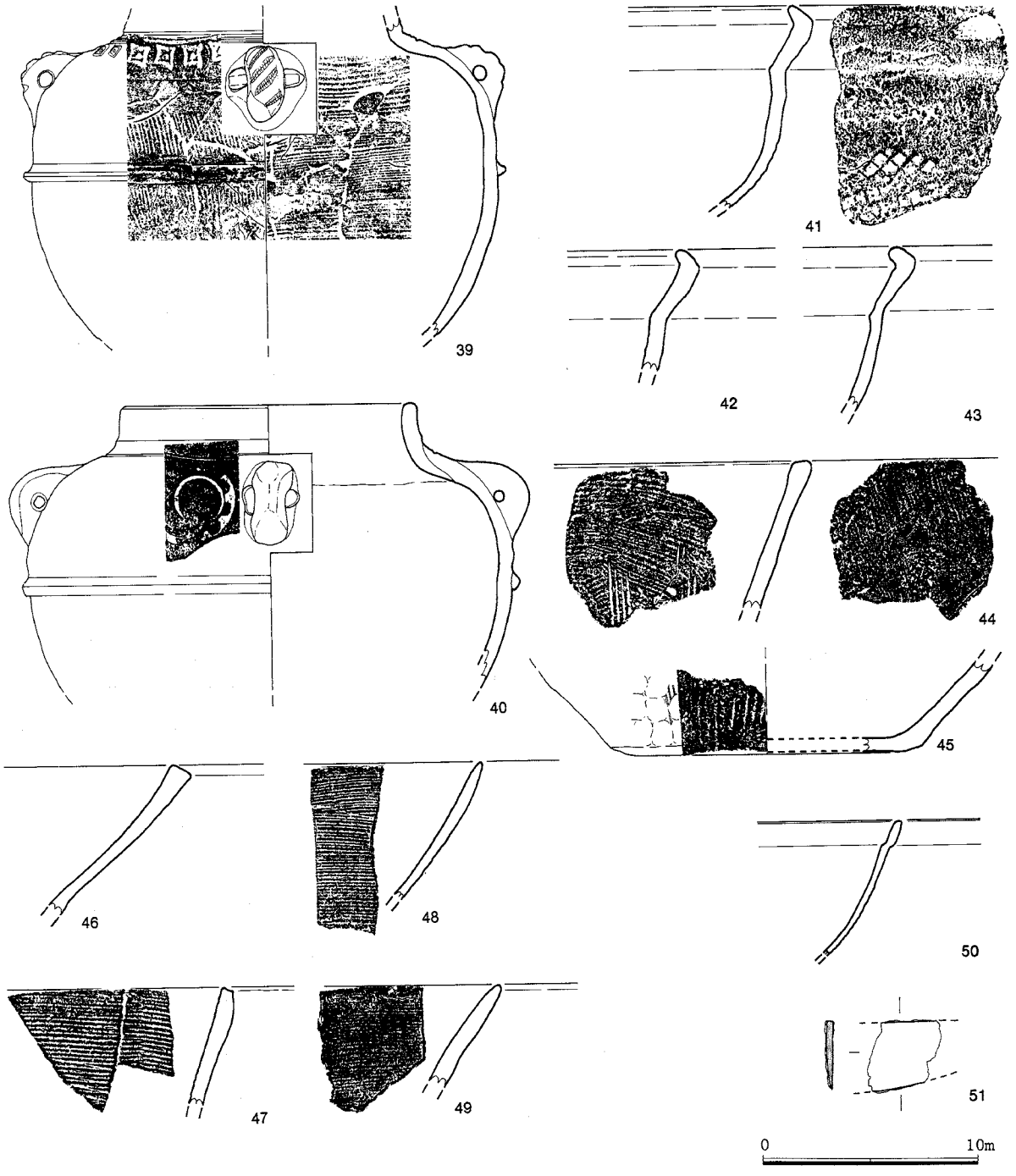


Fig. 13　溝SD 02出土遺物実測図②（縮尺1/3）

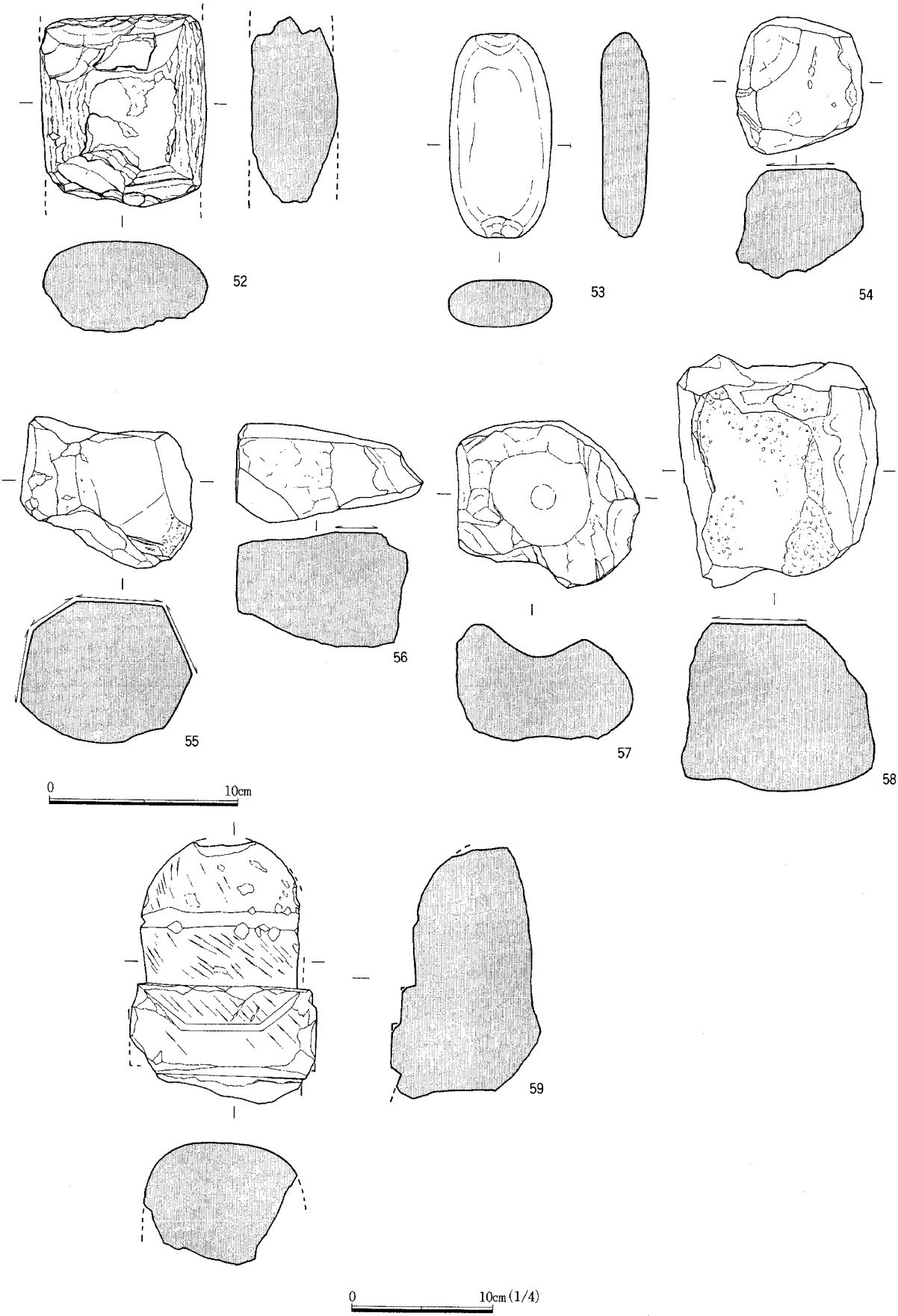
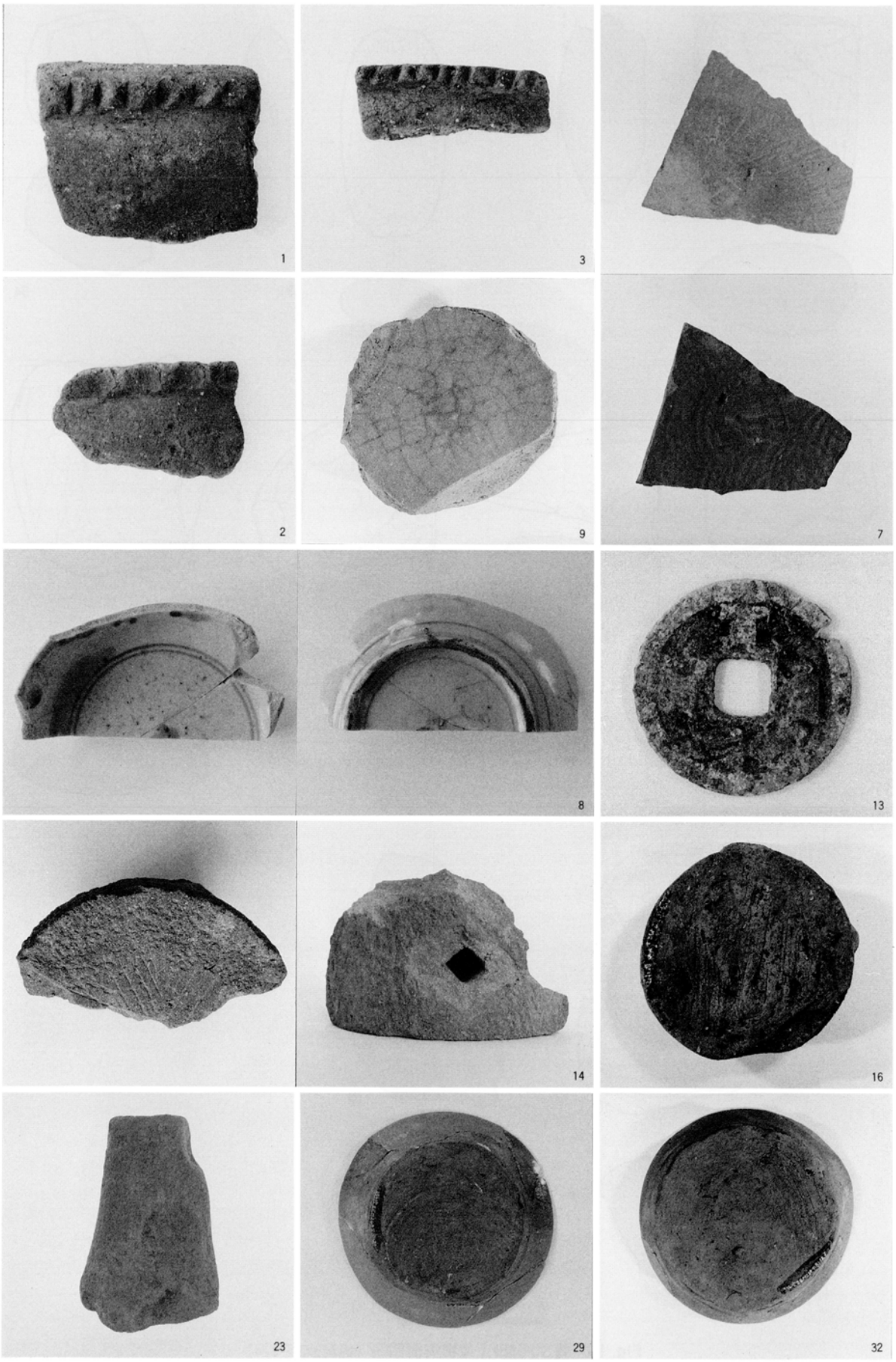
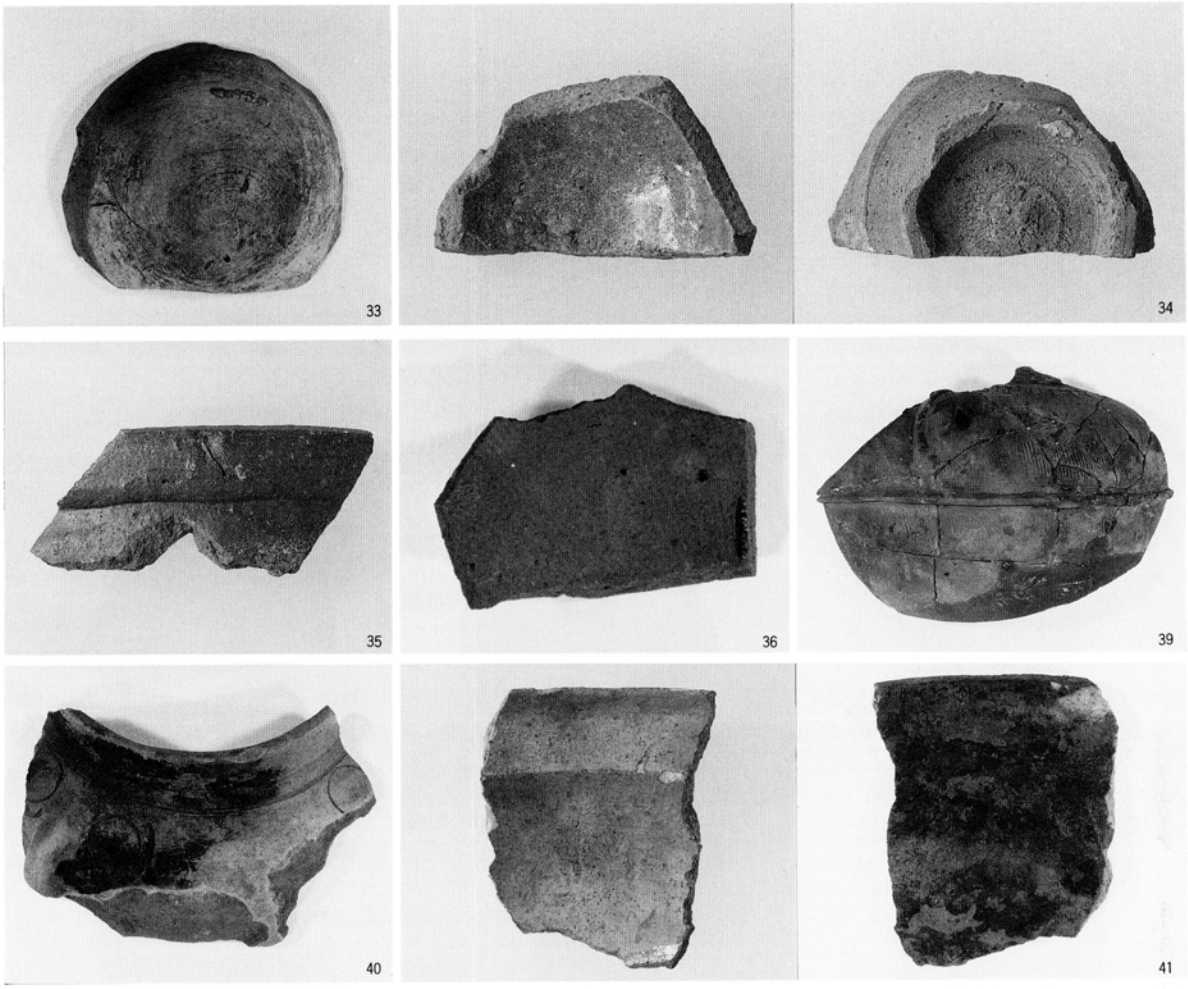


Fig. 14　溝 SD 02出土遺物実測図③（縮尺1/3・1/4）



溝 SD01・02出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する



溝 SD02出土遺物 ①

※数字は実測図の番号に一致する

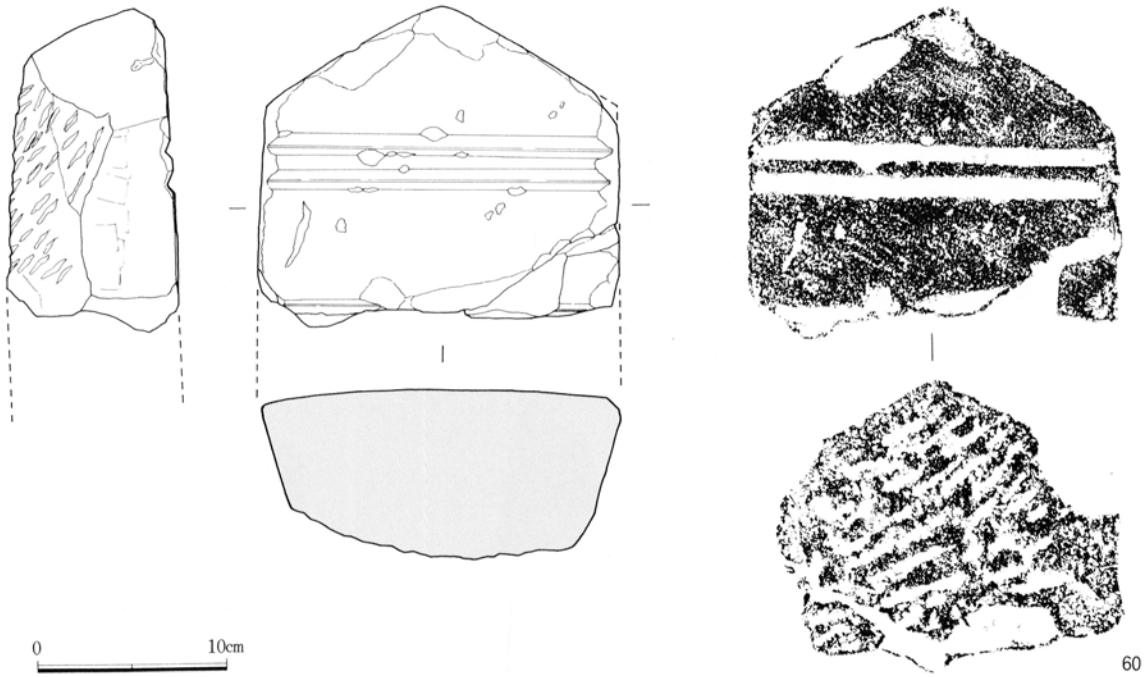
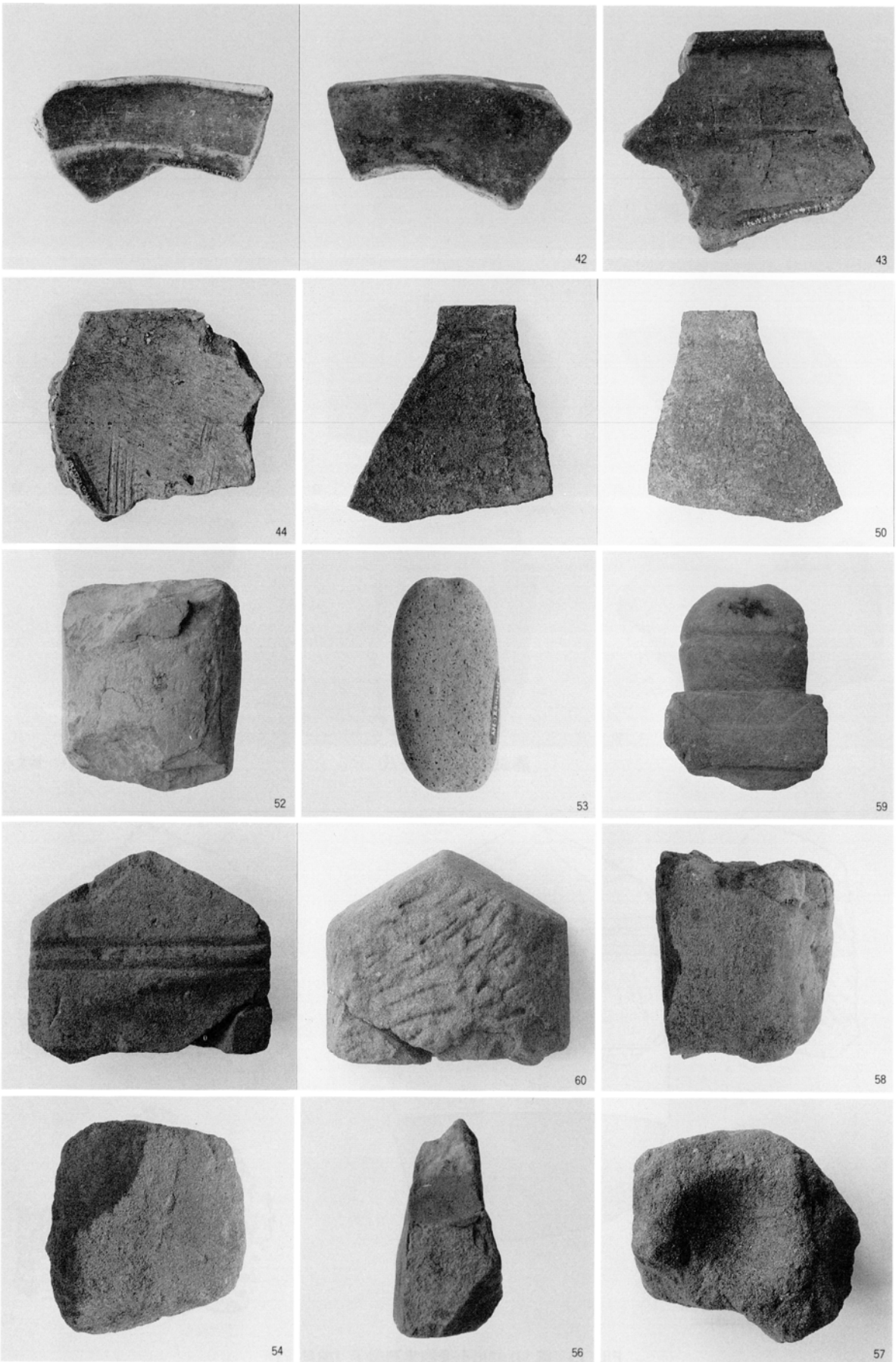


Fig. 15　溝 SD 02出土遺物実測図④（縮尺1/4）



溝 SD02出土遺物②

※数字は実測図の番号に一致する

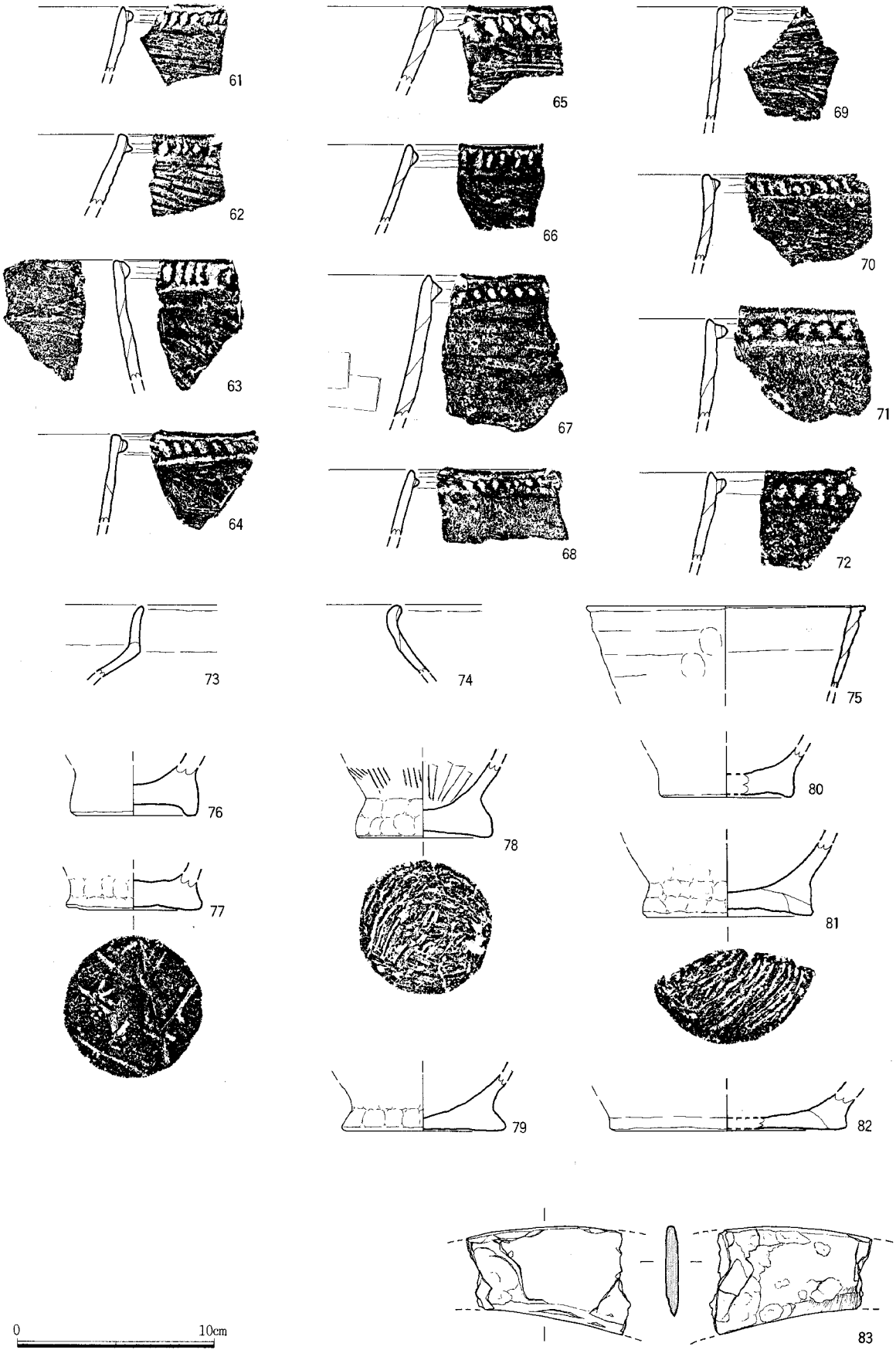


Fig. 16　溝 SD 03出土遺物実測図（縮尺1/3）

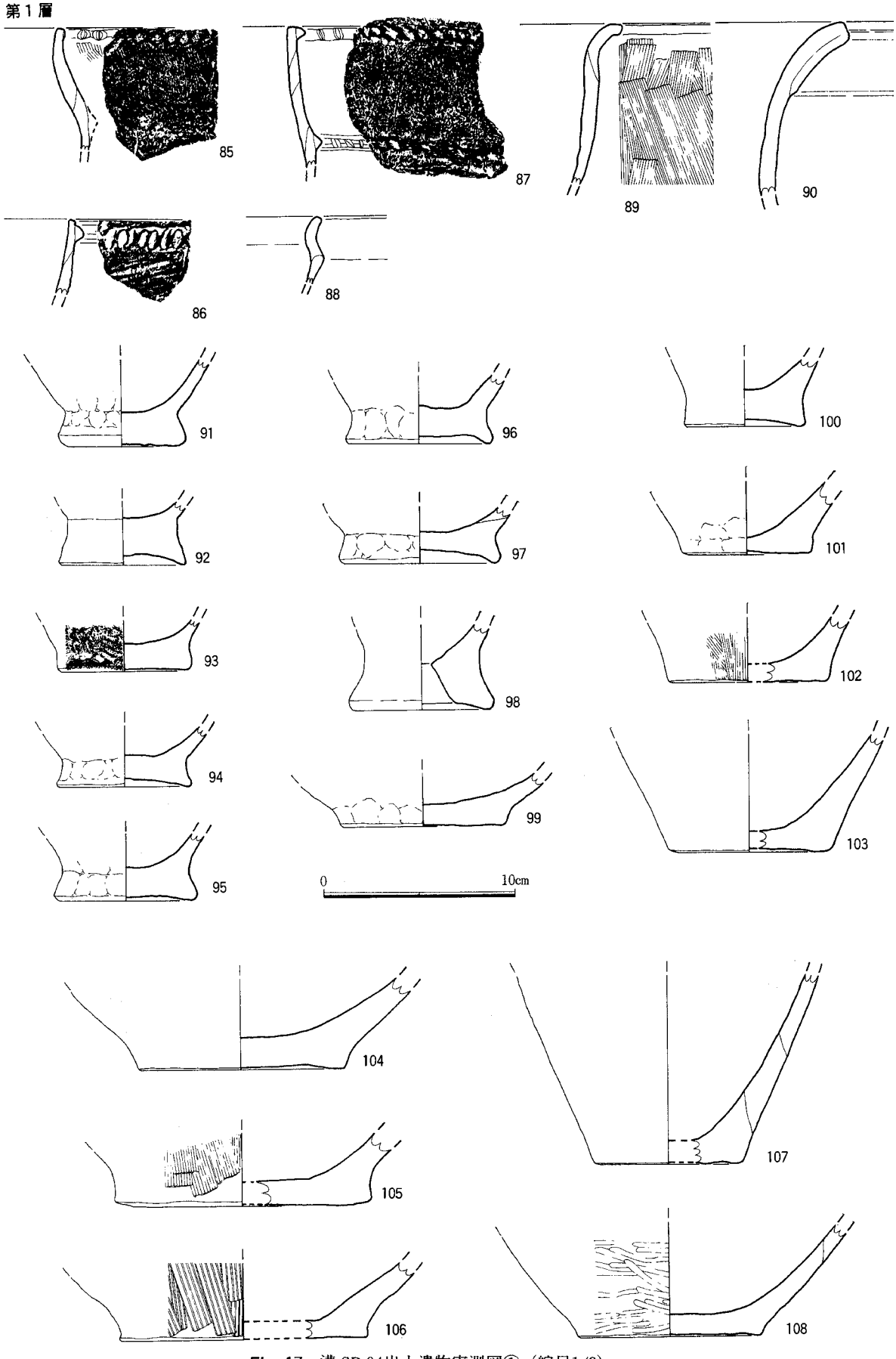


Fig. 17　溝 SD 04出土遺物実測図①（縮尺1/3）

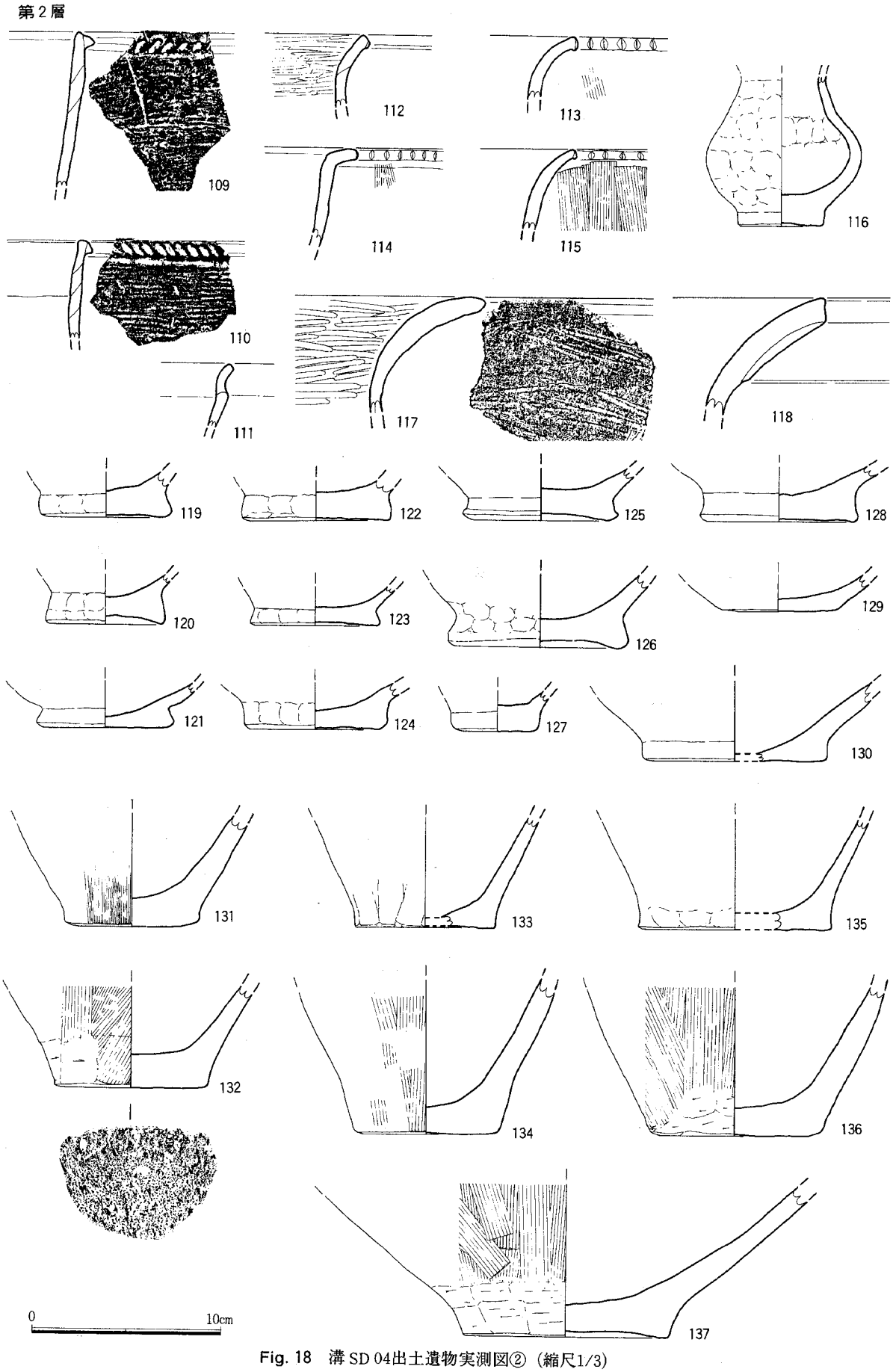


Fig. 18　溝 SD 04出土遺物実測図②（縮尺1/3）

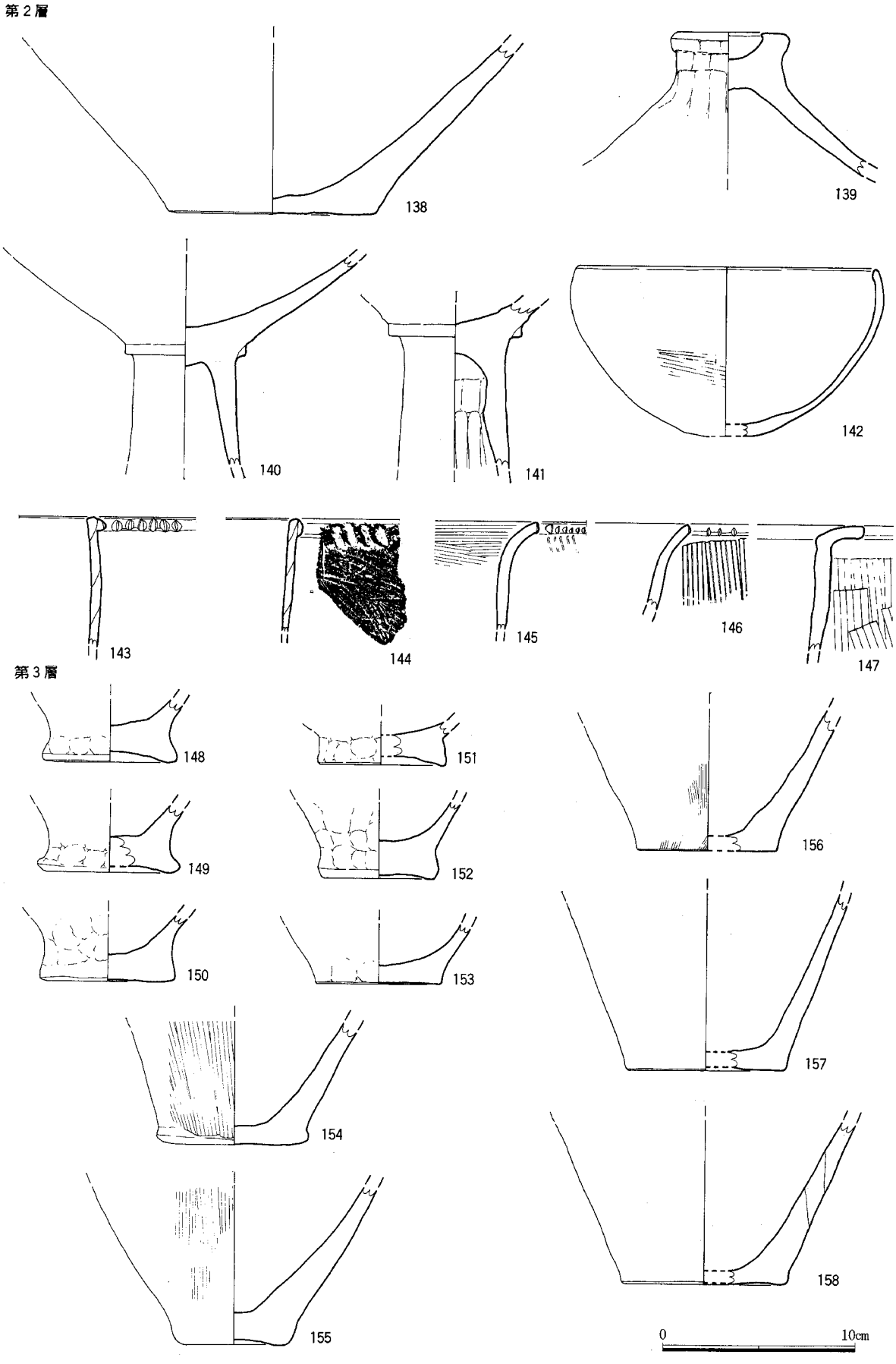
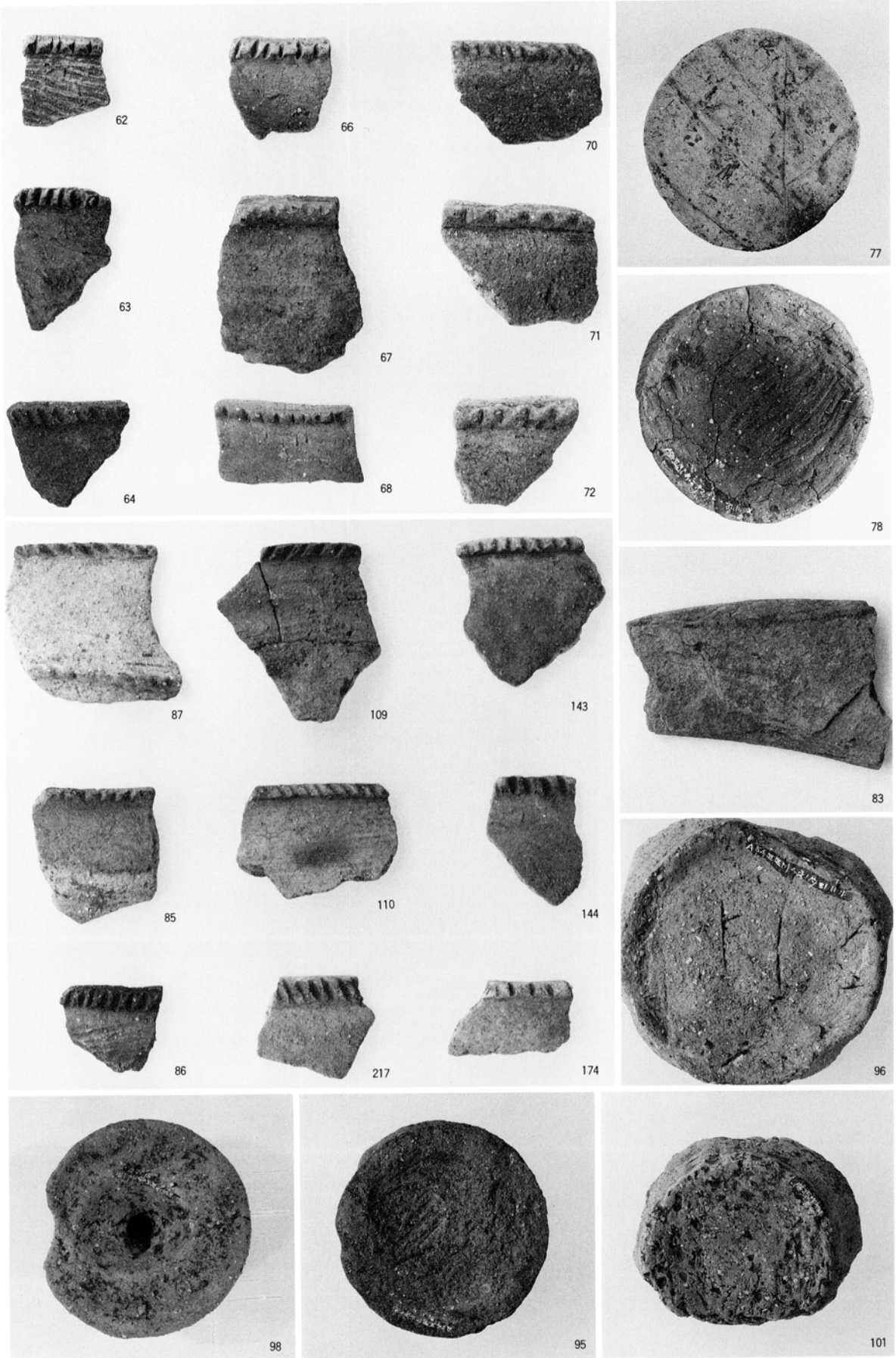
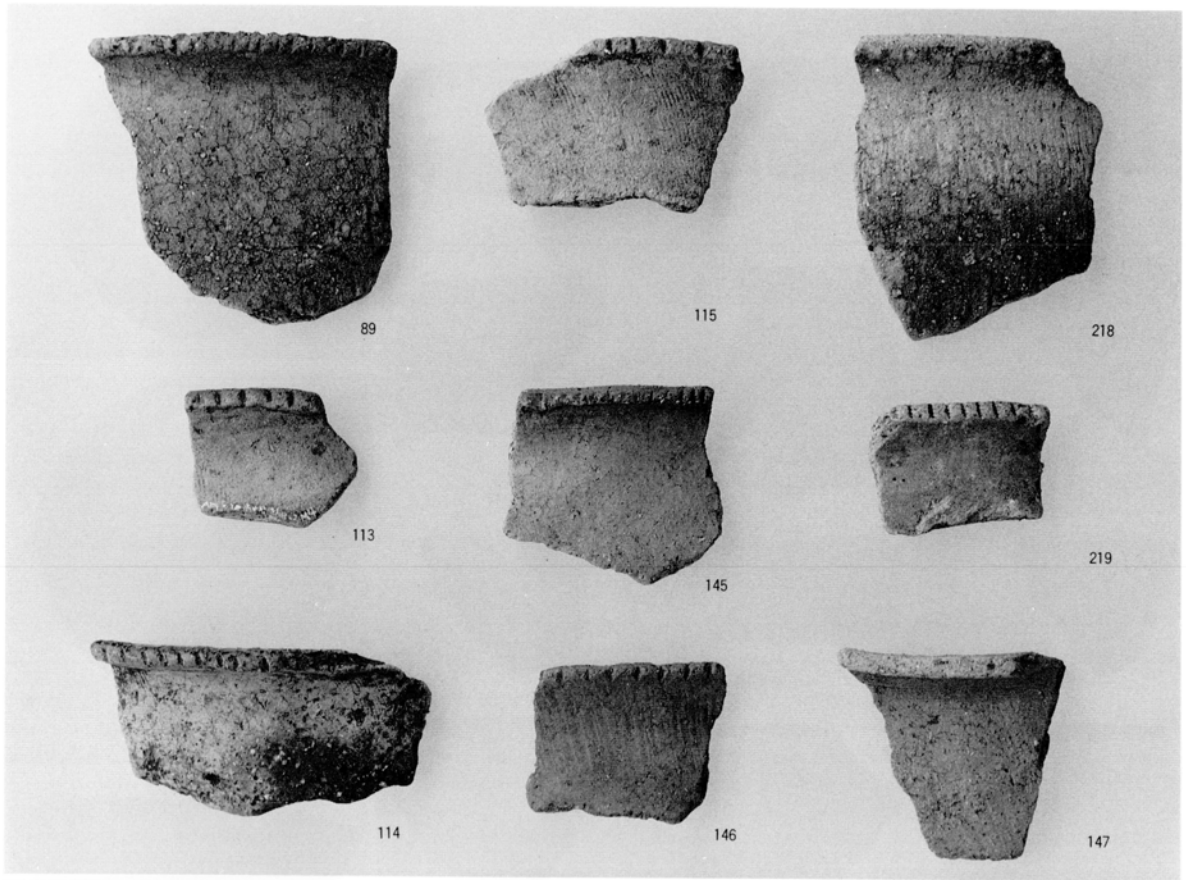


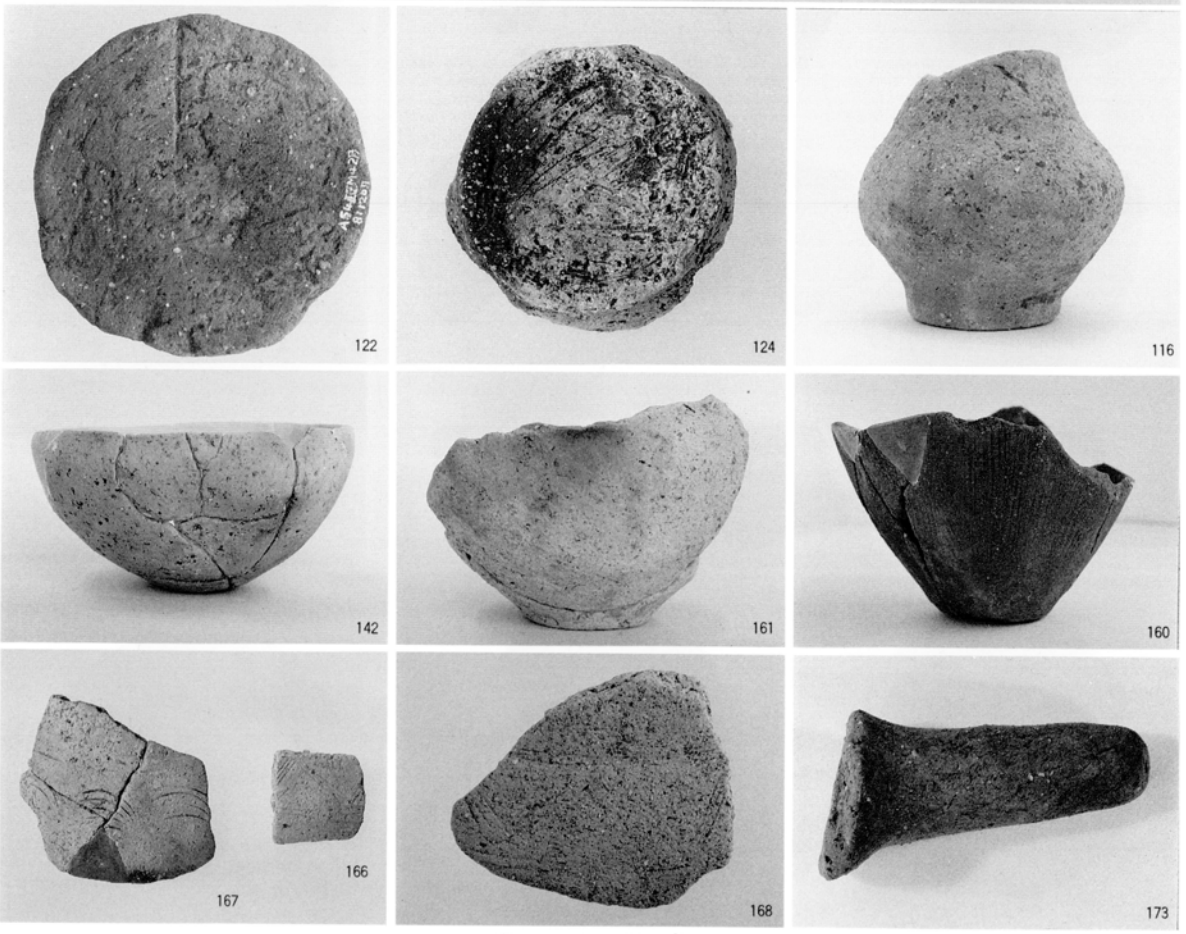
Fig. 19　溝 SD 04出土遺物実測図③（縮尺1/3）



溝 SD03・04出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する　217はSD04出土





溝 SD04出土遺物①　※数字は実測図の番号に一致する　218・219はSD04出土

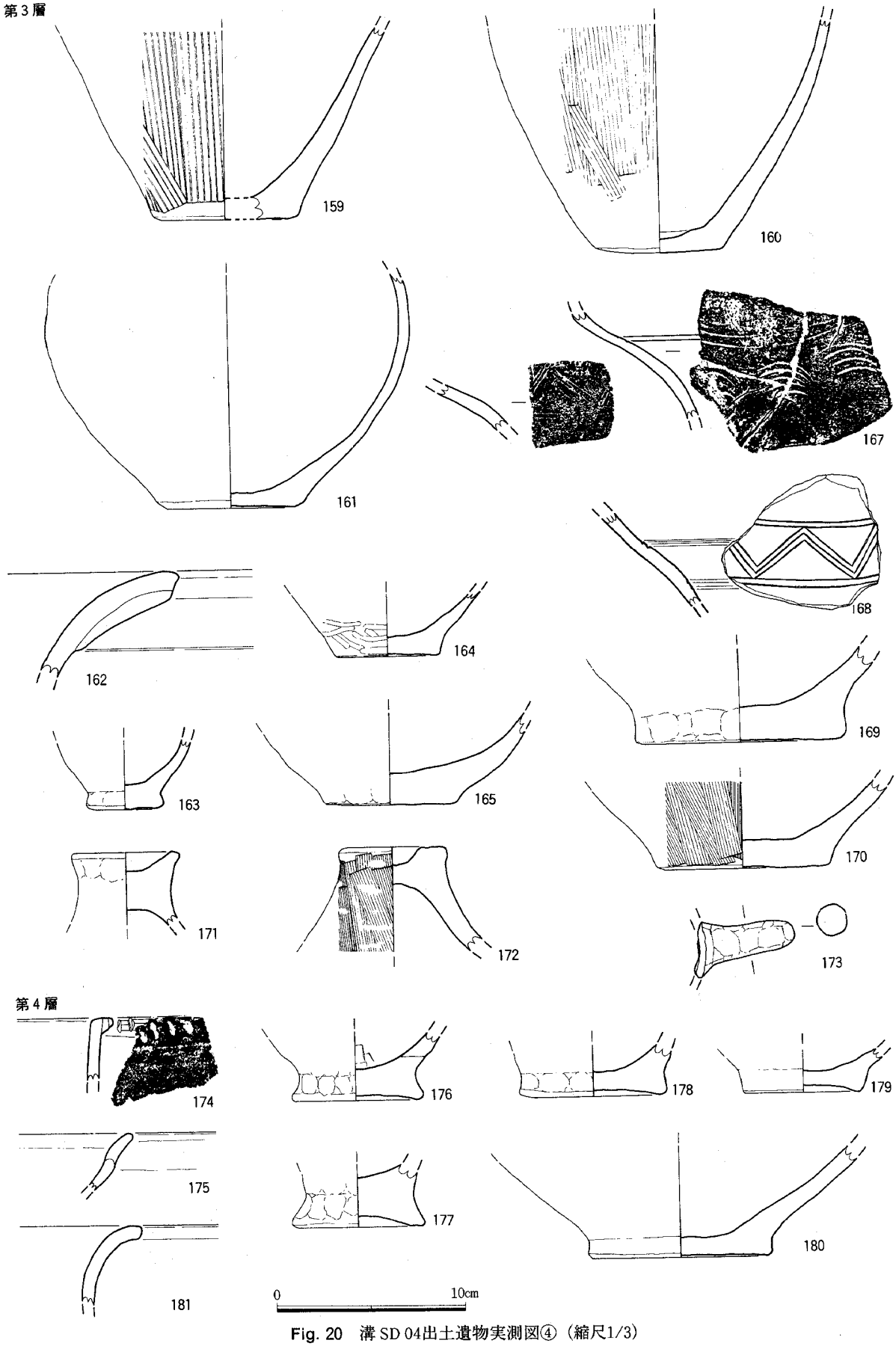
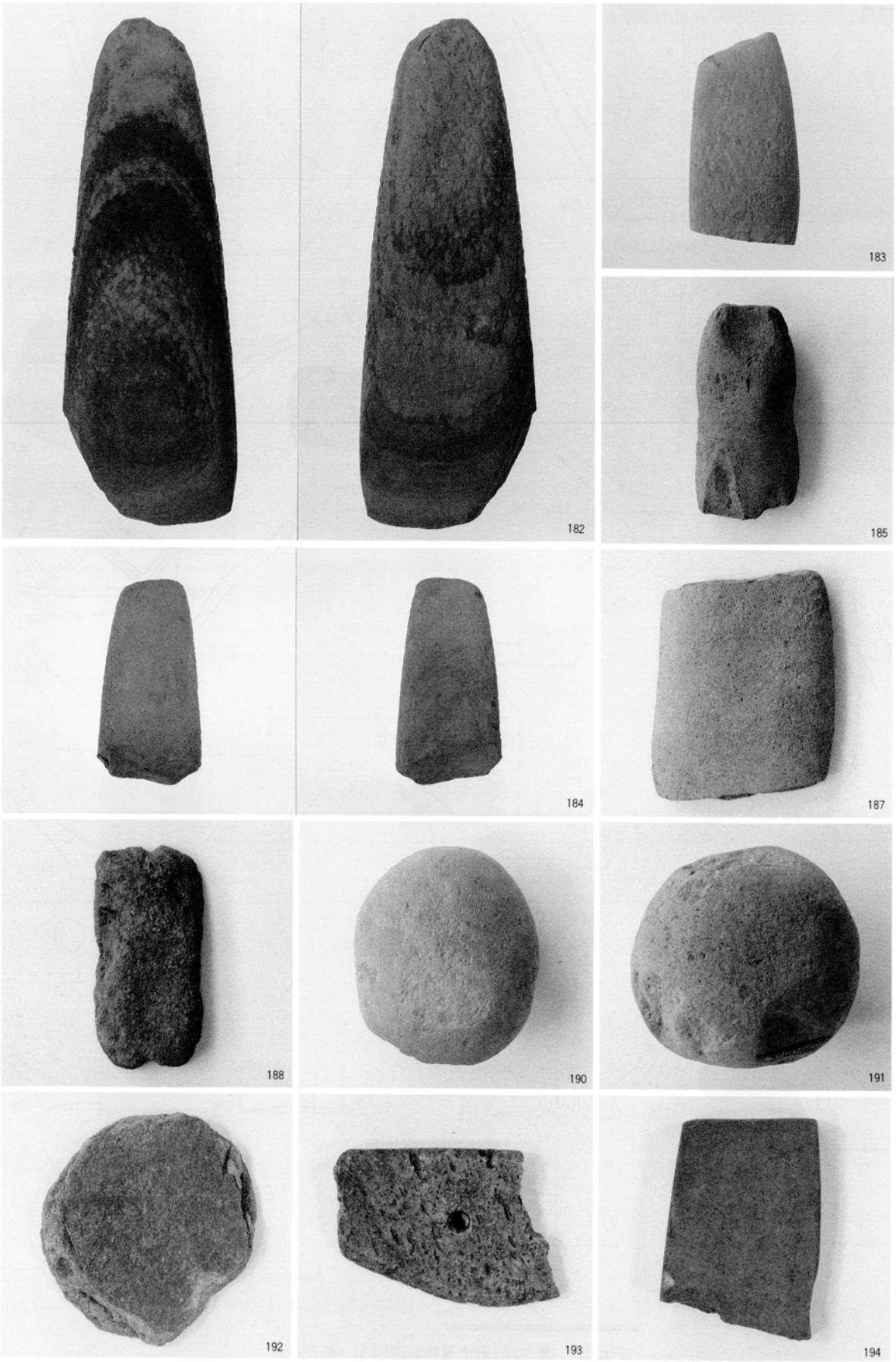


Fig. 20　溝 SD 04出土遺物実測図④（縮尺1/3）



溝 SD04出土遺物②

※数字は実測図の番号に一致する

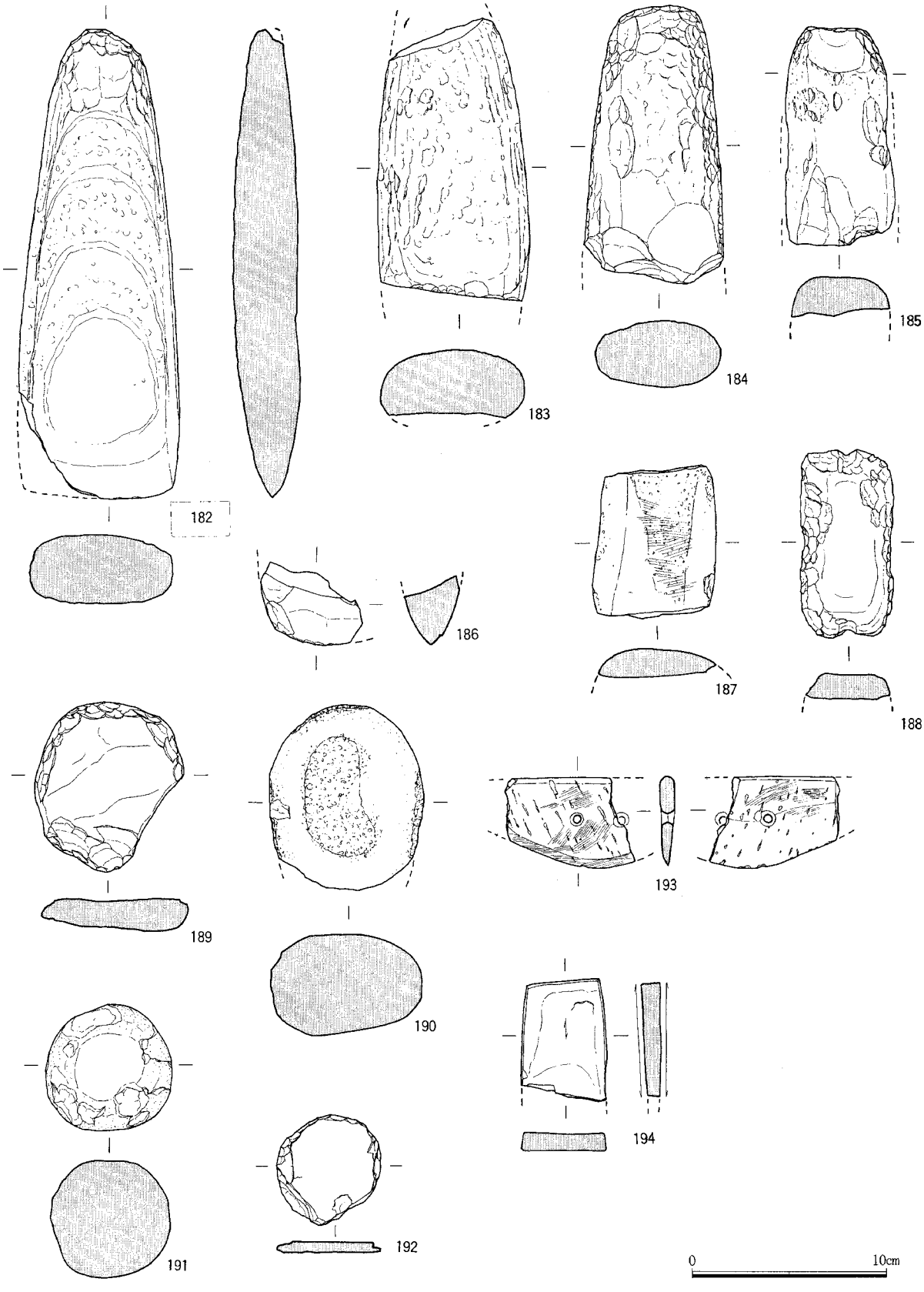


Fig. 21　溝 SD 04出土石製品実測図①（縮尺1/3）

第4層出土遺物は174～179が縄文晩期土器で、175は浅鉢、179は壺、他は甕である。180・181は弥生土器の壺である。

石器は、第1層出土石器が182・185・187・192・194・199・205・208、第2層出土は183・184・186・193・202・204、第3層出土は188・189・191・195・197・200・206・207、第4層出土は190・194・196である。182～187が磨製石斧で、182は大型扁平石斧である。183～187は蛤刃石斧であろう。188・189は石錘、190・191は叩石、或いは転用の磨石である。192は円盤状石製品、193は石庖丁、194～199は砥石、201～208は打製石鏃で、207・208は未製品である。200はスクレイパーである。

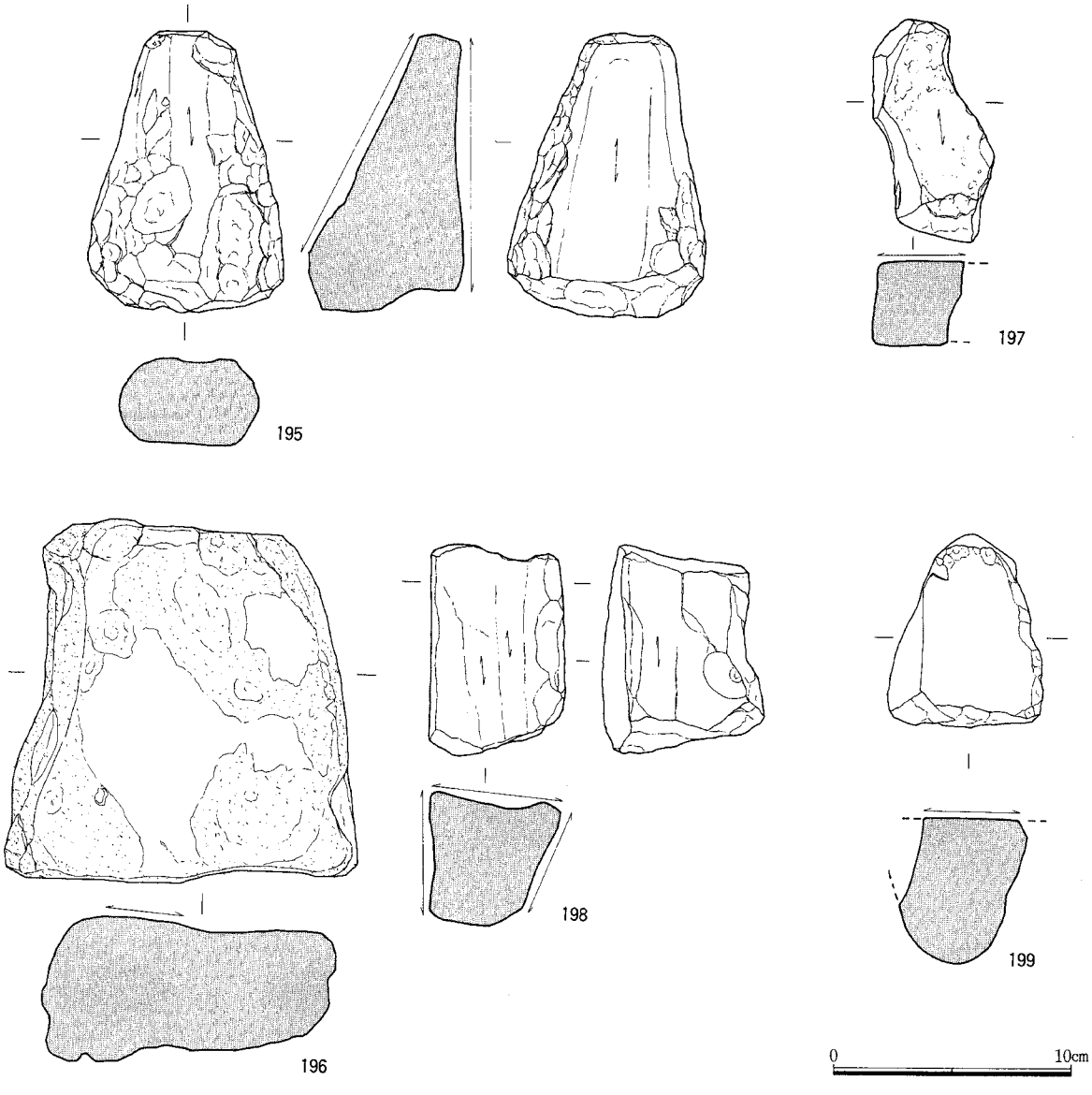
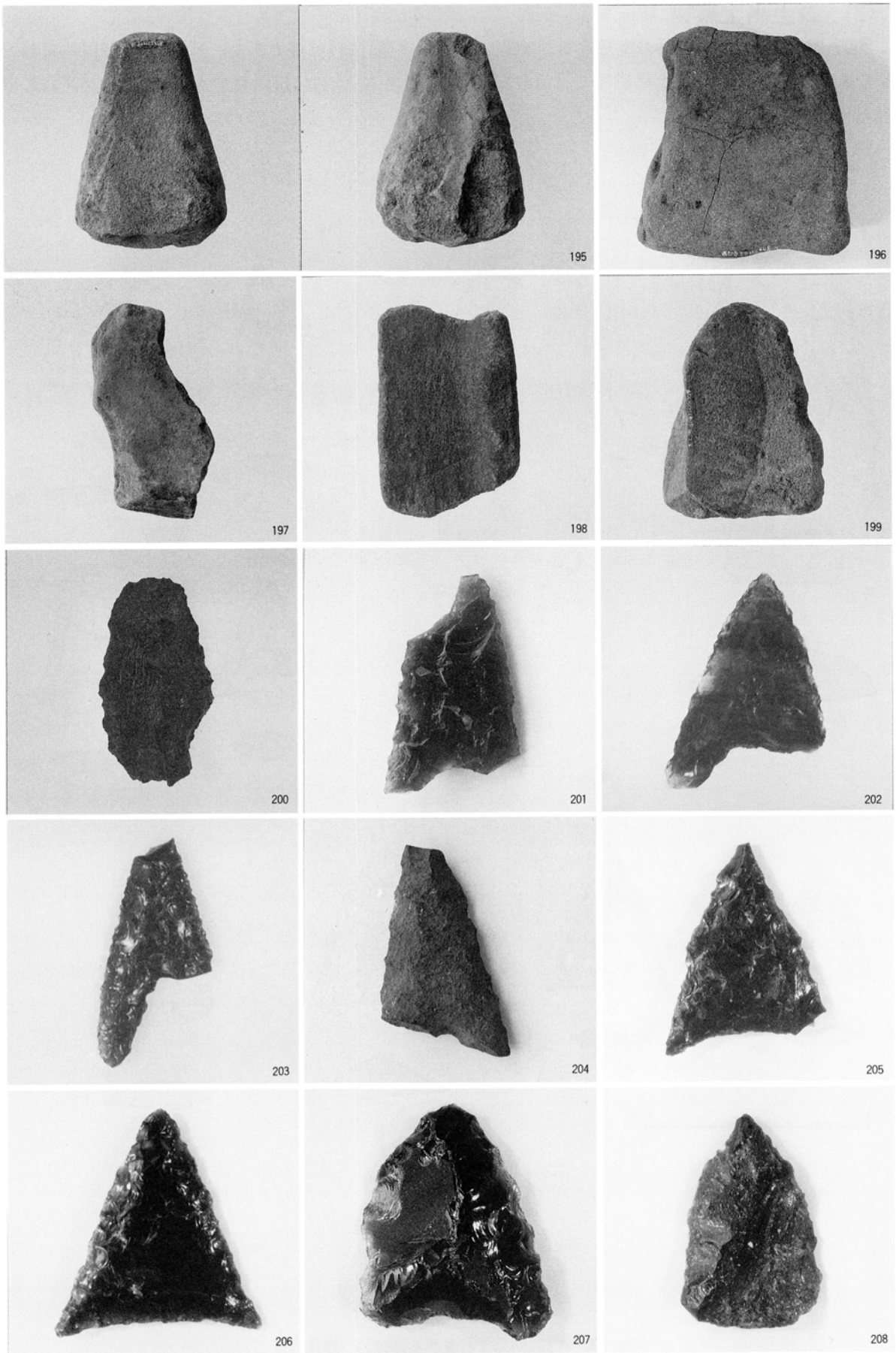


Fig. 22　溝 SD 04出土石製品実測図②（縮尺1/3）



溝 SD04出土遺物③

※数字は実測図の番号に一致する

(2) 表土出土遺物 (Fig. 24)

209～211は縄文晩期土器の底部片で、209は鉢、210は甕、211は蓋である。213は中国製白磁碗のⅣ類である。212・214は国産陶磁器で、214は伊万里焼である。212は唐津焼である。215は玄武岩製の敲石である。

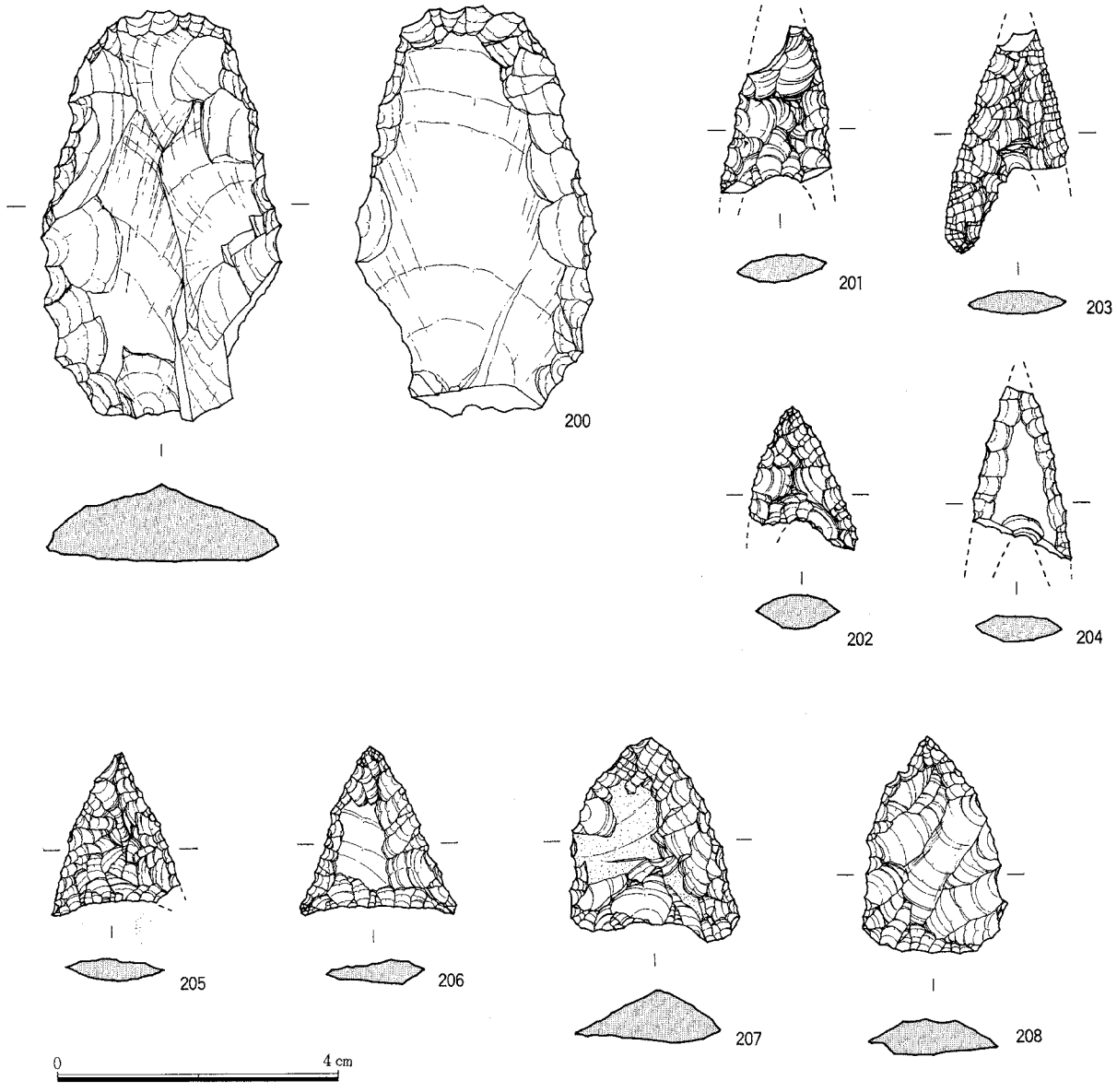


Fig. 23 溝 SD 04出土石製品実測図③ (縮尺1/1)

4．まとめ

調査では縄文時代晩期から江戸時代までの遺構・遺物を得た。しかし、遺構の主体を占めるものは溝のみであり、他にはわずかに柱穴が存在するだけで、主たる遺構は発見できなかった。溝は縄文時代の溝１条、弥生時代前期の溝１条、戦国時代の溝１条、江戸時代の溝１条である。弥生時代前期の溝SD 04からは溝まで削られていた部分において弥生後期の土器も出土しており、後世に大きな影響を受けていると思われる。

近世の溝SD 01は、南北方向から東西方向に矩形に曲がる溝で、南側は削られて消滅しているが、北側は、徐々に深くなる傾向をもち、東西方向に横長の庫裏建物の下に連続する。現在の本堂、庫裏は鉄筋コンクリート造りの一連の建物になっているが、創建以降の建物配置は今日とは充分違っていたと考えられる。出土遺物は、中世遺物を若干含むものの伊万里焼の陶磁器を主体としている。９の伊万里焼皿は、体部の内外面に草花文を呉須で施し、内外底面にコンニャク版をスタンプしていることから、1700～1750年代の時期が比定される。又、「筑前国續風土記拾遺」によれば、荒平山西応寺は博多万行寺の末寺で、浄土真宗西本願寺派に属しており、開基は恵正と云われる。「早良郡志」によると、この恵正は天正７年に落城した荒平城主小田部鎮元の家臣小林の末裔で、創建は寛永年間（1624～1644）と云われる。時期的なズレはあるが、このSD 01の溝の配置からみて、当時の建物の外周に付設された雨落ち溝と考える方が妥当である。

中世溝のSD 02は南北方向の溝であるが、規模は不明である。恐らく、従来の例からみて溝幅は３～４ｍ、深さ２ｍに達するものと思われる。この溝は２度に亘って埋立てられている。最初の埋立ては深さ50～60㎝まで行い、この上面に拳大の礫を投げ入れて、填圧している。礫中からは、唐津焼の碗・摺鉢を含んでおり、この埋戻しに際して填圧した礫群が17世紀以降の所産であることを示している。有田遺跡では第90次調査でも同様な例があり、切通し道の機能を推定したが、当該地のSD02も濠の廃絶後は切通し道として利用されたものと考えられる。礫群下層から出土した土師器の坏は全て糸切り底で、底径と口径の比が大きく、16世紀代に比定できる。

旧地形図をみれば、調査区の東側に東西方向の長さ約55ｍをはかる規模の大きな土塁が存在しており、この濠（SD 02）と土塁の関係は強い。又、従来の調査で検出した有田１丁目付近を中心とする濠の一群、或いは、第74次調査の濠、第68次調査のホカヤネ跡、そして、現存する土塁は全て小田部城に関するものと考えられ、その復原の資料となり得る。又、伝承にある「堀ノ内城」と「小田辺城」

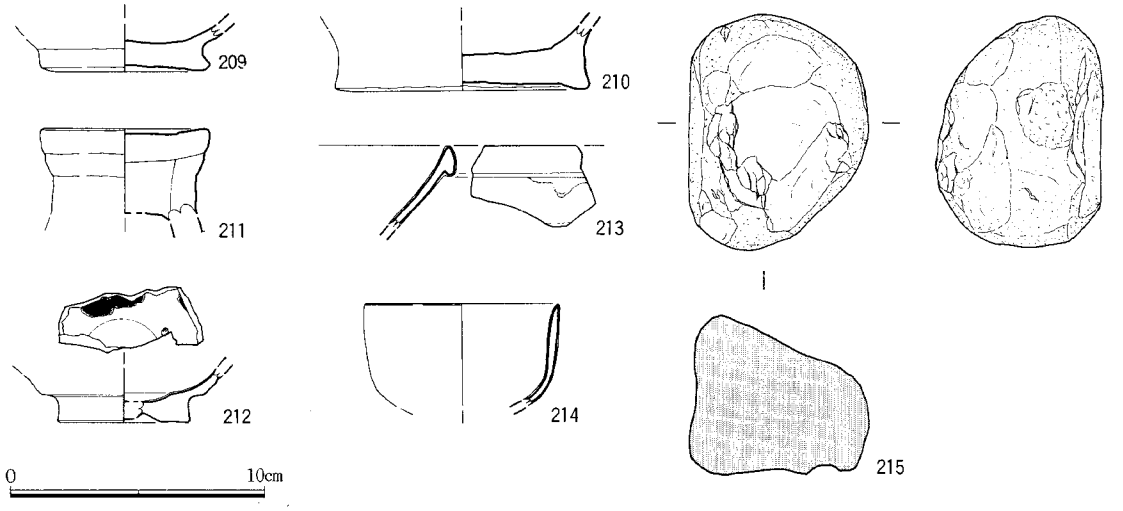


Fig. 24　表土出土遺物実測図（縮尺1/3）

が同一城をさすものか、別の城なのか、文献においても明らかではないが、「早良郡志」では「堀ノ内城」を小田部氏の里城としている。Fig. 31によれば有田１丁目の第86次調査から、南側の有田宝満宮までの範囲において検出した濠の埋没時は、ほぼ近世初頭の時期を示しており、又、濠の構造も同一であることから現在の「小田辺城」の推定地も含めて、全て一連の構造物と考えたい。築城時期が明らかではないが、恐らくは城名については小田部氏が木上某を討って入城した時を境に城名の呼称が変わったものであろう。

溝 SD 03・04については、従来の調査によって、環濠を形成する溝として認識されている。関連する調査は九州大学第１・２次（第９街区）調査、福岡市第18次・第45次・第54次・第56次・第95次・第101次調査がある。九州大学の第29街区のトレンチ調査では、夜臼式土器と板付Ⅰ式土器を共伴する弥生時代初頭のＶ字溝として報告されている。文章を引用すると「遺物の出土状態は、地表下40～50cmには、夜臼、板付Ⅰ式土器を主体に、板付Ⅱ式、弥生時代中～後期の土器、古墳時代の土師器、須恵器を混入しているが、その下層より溝底までは、夜臼式と板付Ⅰ式の共伴層である。」

今回の調査では、SD 03においては第１層に遺物が集中していたが、板付Ⅰ式土器と共伴している。又、第87次・第95次調査においても数の上では少ないものの、同様に上層から板付Ⅰ式土器が出土している。第87次調査では古墳時代の住居跡とＶ字溝が切合うことで、Ｖ字溝上層から古墳時代の土器が出土していることが判明した。よって、29街区調査においてＶ字溝内の深さ40～50cmの間から弥生時代中期～古墳時代の遺物が混入していた状態をこうした住居跡との切合いが影響したものとみなした。しかし溝 SD 04は第３層までは弥生時代後期の土器が混入しており、第29街区の遺物出土状況に合っている。

第77次調査では未報告ではあるが、上層では従来の調査例の如く夜臼式、板付Ⅰ式土器の共伴をみるが、下層・中層においては突帯文土器の甕の完形品が２個体出土しており、板付Ⅰ式土器は伴っていない。溝については第95次調査で述べた通り、東西径約200ｍ、南北径約300ｍを測る楕円形状の環濠を形成するものと推定した。今日の調査を含めて、時期的には一致しており、環濠形状はほぼ間違いないものと考えられる。溝の埋没時期は一律ではなく、上記の如く例により部分的には古墳時代まで完全に埋没せず遺存した区域があったことも考慮しなければならない。掘削時期は従来の調査において遺物の出土状況をきちんと把握できていない上、更に発掘調査も進んでいないので、従来の調査結果に頼らざるを得ないが、第77次調査の結果が大きく左右するであろう。

一方、Ｖ字溝の断面形状については、第87次調査において箱薬研堀形としたことに対して、一部の方から「掲載された土層断面図を見ると溝底には達していないもののＶ字溝状の掘り込みが認められる。」としてご批判いただいたが、溝底に達していたことは担当者２名が現認していることで、事実を確認しないまま作為的に資料操作をすることは考古学の方法論を無視することに等しい。箱薬研堀という中世から近世における濠について用いられる形状をあてたため誤解を招いたが、考古学上の概念であるＶ字溝を否定するものではなく、互いに九牛の一毛とならぬよう自責したい。但し、厳密に云えば溝底がＶ字形か、箱薬研堀状であるかは溝の機能や出入口の問題を含んでおり、溝底のレベル関係を再検討する必要がある。環濠が南西方向に開析した谷を囲むことは述べたが、溝のレベルの状況は南西側に低くなっており、一面では排水溝の役目も負っていたのではないかと考える。

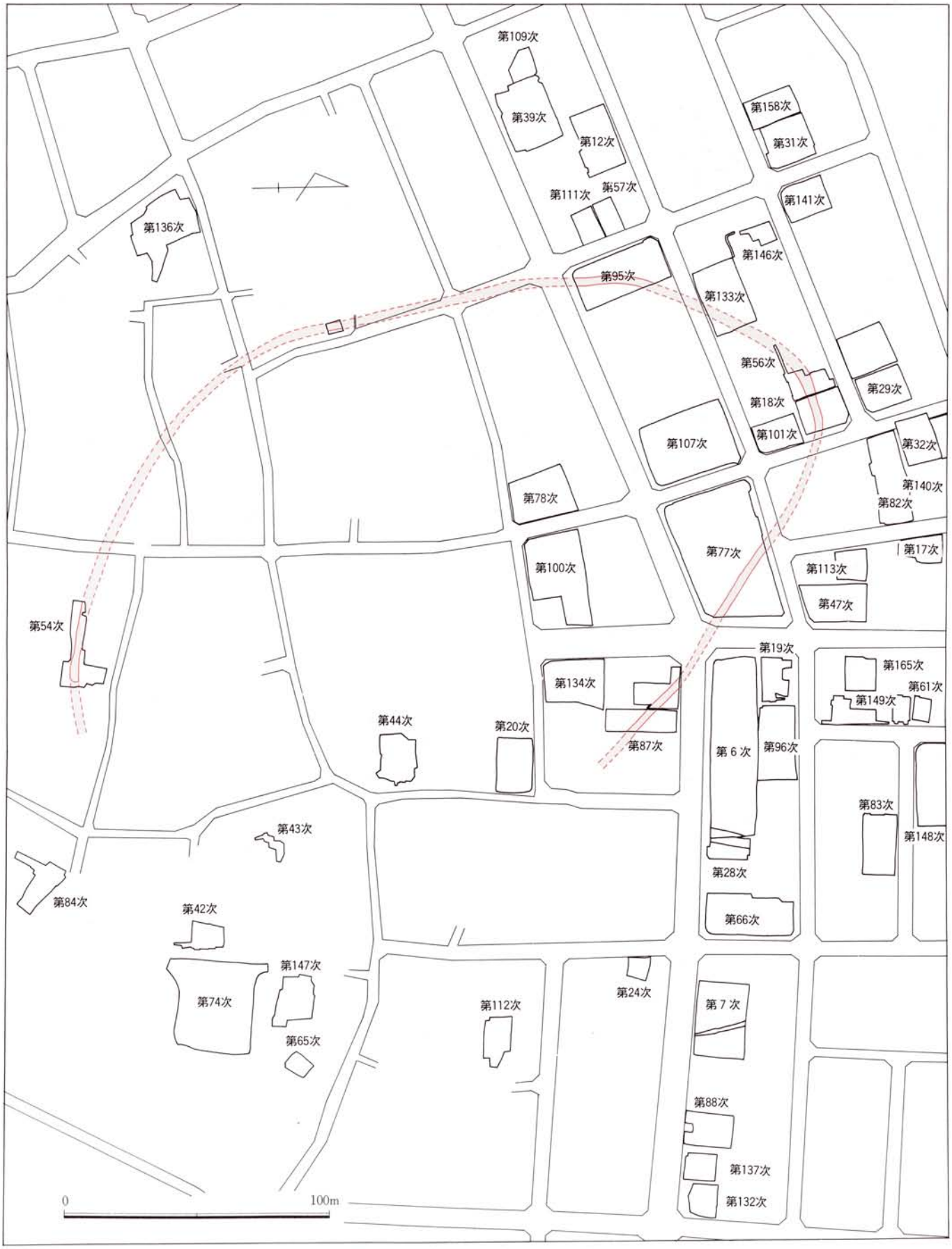


Fig. 25　環濠配置図（縮尺1/2,000）

Tab. 2　第54次調査遺物一覧表　　（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径（高台径）	器高（現存高）	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
11	1	SD 01	夜臼式土器	甕	–	–	(4.1)	刻目突帯A。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。暗褐色。	
11	2	SD 01	夜臼式土器	甕	–	–	(2.7)	刻目突帯A。大きな刻目を施す。内外面はナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を含む。焼成良好。外面は暗褐色、内面は淡褐色。	
11	3	SD 01	夜臼式土器	甕	–	–	(1.9)	刻目突帯A。大きな刻目を施す。内面はナデ調整。外面は条痕の後ナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。暗褐色。	
11	4	SD 01	弥生土器	甕	–	7.6	(2.6)	平底。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡褐色。	
11	5	SD 01	弥生土器	壺	–	5.6	(2.2)	立上がりは丸みをもつ。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。外面は茶褐色、内面は黒褐色。	
11	6	SD 01	瓦質土器	摺鉢	–	–	(6.2)	外面はヨコ方向のナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。灰色～灰褐色。	内面磨滅
11	7	SD 01	須恵器	甕	–	–	(8.0)	内面は青海波叩き痕。外面は平行叩き痕。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成良好。青灰色	
11	8	SD 01	染付	Ⅲ	13.0	(7.5)	(3.9)	高台は低い。内外面に呉須文様。見込に2条、高台脇に4条の圏線。見込にコンニャク判。	素地は白灰色。焼成良好。透明釉、淡青灰色。	伊万里焼 18C
11	9	SD 01	青磁	碗	–	(4.7)	(3.0)	底部片。底部厚い。見込に片切彫文。	素地は淡白茶色。焼成良好。淡青色の透明釉、青灰色。	中国製 龍泉窯系
11	10	SD 01	青磁	香炉	10.6	–	(3.0)	口縁部は内傾。内面に稜をもつ。	素地は淡灰茶色。焼成良好。乳白色の半透明釉、白灰色。	国産
11	11	SD 01	白磁	足付坏	–	4.0	(2.85)	脚部片。坏部を欠く。上げ底。	素地は白色。焼成良好。透明釉、白色。	伊万里焼
12	16	SD 02	夜臼式土器	鉢	–	7.2	(2.8)	平底。内外面はナデ調整。底部は削り。	胎土に1～5㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡褐色。	
12	17	SD 02 礫下層	夜臼式土器	鉢	–	5.6	(2.9)	平底。底部端を外に引き出す。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は淡茶色、内面は黒灰色。	
12	18	SD 02 礫下層	夜臼式土器	鉢	–	8.2	(3.0)	上げ底。底部は薄い。内外面はナデ調整。	胎土に1～5㎜の砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
12	19	SD 02 礫下層	夜臼式土器	鉢	–	7.8	(3.8)	平底。底部端を外に引き出す。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。黒褐色。	
12	20	SD 02 礫中層	夜臼式土器	蓋	–	–	(3.6)	つまみ部。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	外面磨滅
12	21	SD 02 礫下層	夜臼式土器	蓋	–	5.4	(4.0)	つまみ部。内面は粗いナデ調整。外面はナデ調整。上部は左回りのヘラケズリ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好、堅い。淡茶褐色。	
12	22	SD 02 上層	土師器	高坏	–	–	(2.8)	坏部・裾部を欠く。脚部は大きく開く。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成良好、明茶褐色。	外面磨滅
12	23	SD 02	土師器	高坏	–	–	(7.0)	脚部片。坏部・裾部を欠く。外面はナデ調整。内面に絞り痕。	胎土は精緻。焼成良好。明茶褐色。	外面磨滅
12	24	SD 02	土師器	坏	10.3	7.7	(2.1)	糸切り底。体部は大きく開く。内底見込に同心円状の凸部をもつ。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成やや軟。明赤褐色。	
12	25	SD 02	土師器	坏	10.4	7.0	2.2	糸切り底。体部は大きく開く。口縁部尖る。見込に同心円状の凸部をもつ。	胎土は精緻。焼成良好。茶褐色。	
12	26	SD 02	土師器	坏	11.1	7.6	2.1	糸切り底。体部は内弯気味に開く。口縁部は尖る。内底見込に同心円状の凸部をもつ。	胎土は精緻。焼成良好。明茶褐色。	
12	27	SD 02	土師器	坏	11.5	7.7	2.4	糸切り底。体部は内弯気味に開く。口縁部は尖る。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成やや軟。外面は淡褐色、内面は褐色。	
12	28	SD 02	土師器	坏	11.8	8.0	2.1	糸切り底。体部は大きく開く。内底見込に同心円状の凸部をもつ。	胎土は精緻。焼成良好。淡茶褐色。	
12	29	SD 02 礫下層	土師器	坏	11.1	7.2	2.2～2.5	糸切り底。体部は大きく開く。内底見込に同心円状の凸部をもつ。	胎土は精緻。焼成良好。明茶褐色。	
12	30	SD 02 礫下層	土師器	坏	11.5	7.8	2.4	糸切り底。体部は大きく開く。内底見込に同心円状の凸部をもつ。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成良好。明茶褐色。	
12	31	SD 02	土師器	坏	11.1	7.0	2.3	糸切り底。体部は大きく開き、中位で屈曲する。見込に同心円状の凸部をもつ。	胎土は精緻。焼成良好。淡茶褐色。	
12	32	SD 02 礫下層	土師器	坏	11.2	8.8	2.0～2.4	糸切り底。体部は大きく開く。内底見込に同心円状の凸部をもつ。	1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。明茶褐色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径（高台径）	器高（現存高）	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
12	33	SD02 礫下層	瓦器	皿	－	8.3	(1.8)	糸切り底。体部は大きく開くが、丸味をもつ。	胎土は精緻。焼成良好。明茶褐色～淡灰色。	
12	34	SD02 礫上層	陶器	碗	－	(4.8)	(2.9)	削り高台。高台は外に張り、端部ははね上がる。	素地は淡茶褐色。焼成良好。灰緑色釉、施釉部は緑灰色、露胎部は淡茶褐色。	唐津焼
12	35	SD02 礫中層	陶器	甕	－	－	(6.0)	口縁片。直立する口縁端を外に折り曲げて、丸い帯状突帯状に玉縁に作る。	素地は１～５㎜の砂を多く含む。焼成良好。茶褐色～淡茶褐色。	備前焼Ⅳ期 15C
12	36	SD02 礫上層	陶器	摺鉢	－	－	(6.1)	下し目の幅1.3㎝で、単位は７本である。糸切り底。内底は使用により磨滅している。	素地は大粒の砂を少し含む。焼成良好。明赤褐色。	唐津焼
12	37	SD02 礫上層	陶器	甕	－	－	(4.9)	平底。体部はやや内弯気味に立上がる。内面に６本単位の下し目がある。使用による磨滅。	素地は細かい砂を含む。焼成良好。褐色釉、胎土は茶褐色。	中国製
12	38	SD02 礫中層	瓦質土器	火舎	－	－	(4.5)	口縁片。内面はヨコハケ調整。外面に２条の突帯を貼り付ける。	胎土に砂粒を含まない。焼成良好。灰色。	
13	39	SD02 礫下層	瓦質土器	湯釜	－	－	(15.0)	体部中位に三角突帯。頸部に２条の沈線がある。肩部に釘抜文のスタンプと２ヶ所の耳を貼り付ける。内面はヨコハケ調整。	胎土は精緻。焼成良好。外面は暗褐色～茶褐色、内面は褐色。	二次的に火を受ける。
13	40	SD02 礫下層	瓦質土器	湯釜	14.0	－	(13.5)	体部中位に三角突帯。頸部に１条の沈線。肩部上位に花文のスタンプを施し、２ヶ所に耳を貼り付ける。内面はヨコハケ調整。	胎土に砂粒を殆ど含まない。焼成良好。淡茶褐色～褐色。	二次的に火を受ける。
13	41	SD02 礫下層	瓦質土器	鍋	－	－	(9.5)	体部は丸味をもつ。口縁部は外反し、端部を内側につまみ出す。体部外面下位は格子目叩き痕。外面に煤が付着。	胎土に砂粒を少し含む。焼成良好。灰色。	内外面磨滅
13	42	SD02 礫下層	瓦質土器	鍋	－	－	(5.8)	口縁部は外反し、端部を内側へつまみ出す。内外面はナデ調整。	胎土に大粒の砂を含む。焼成軟。黒灰色。	内外面磨滅
13	43	SD02 礫中層	瓦質土器	鍋	－	－	(7.8)	口縁部は外反し、端部を内側へつまみ出す。外面に煤が付着。	胎土に１～３㎜の砂を少し含む。焼成良好。灰褐色。	
13	44	SD02 礫上層	土師質土器	摺鉢	－	－	(7.0)	口縁端部を肥厚させる。内面の下し目は４本。内面はヨコハケ調整、外面はタテハケ調整。	胎土に１～３㎜の砂を含む。焼成良好。淡褐色。	
13	45	SD02 礫中層	瓦質土器	摺鉢	－	14.4	(4.1)	体部は丸みをもち、大きく開く。外面はタテハケ調整。	胎土に１～４㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	内面磨滅
13	46	SD02 礫下層	瓦質土器	摺鉢	－	－	(7.1)	口縁部はやや内弯気味で、端部を肥厚させて平坦にする。内面に下し目。	胎土に砂を少し含む。焼成良好。淡茶色。	磨滅
13	47	SD02 礫中層	瓦質土器	鉢	－	－	(5.6)	口縁部は若干内弯し、端部を平坦にする。内面はヨコハケ調整。外面ナデ調整。	胎土に１～３㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡茶色～褐色。	
13	48	SD02 礫中層	土師質土器	土鍋	－	－	(6.4)	体部は内弯気味で、端部は細く尖り気味。内面はヨコハケ調整。	胎土に１～２㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
13	49	SD02 礫下層	土師質土器	鉢	－	－	(4.8)	口縁部はやや外反する。端部は細く丸くなる。内面はヨコハケ調整。	胎土に１～３㎜の砂を含む。焼成良好。茶褐色～黒褐色。	
16	61	SD03 第２層	夜臼式土器	甕	－	－	(3.3)	刻目突帯Ａ。外面は貝殻条痕。内面はナデ調整。	胎土に１～３㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は褐色、内面は茶褐色。	
16	62	SD03 第２層	夜臼式土器	甕	－	－	(3.7)	刻目突帯Ａ。突帯断面は三角形。刻目は深い。外面は貝殻条痕。外面はナデ調整。	胎土に１～２㎜の砂を含む。焼成良好。褐色。	
16	63	SD03 第３層	夜臼式土器	甕	－	－	(6.2)	刻目突帯Ａ。刻目は深い。外面は貝殻条痕の後、削り状のナデ調整。内面は条痕の後、ナデ調整。	胎土に１～２㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は暗褐色、内面は淡茶褐色。	
16	64	SD03 第１層	夜臼式土器	甕	－	－	(4.6)	刻目突帯Ａ。外面は板状のものによるナデ調整。内面はナデ調整。	胎土に１～３㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は暗褐色、内面は褐色。	
16	65	SD03 第２層	夜臼式土器	甕	－	－	(4.0)	刻目突帯Ａ。外面は貝殻条痕。内面はナデ調整。	胎土に１～２㎜の砂を多く含む。焼成良好。褐色。	
16	66	SD03 第１層	夜臼式土器	甕	－	－	(4.0)	刻目突帯Ａ。外面は貝殻条痕。内面はナデ調整。	胎土に１～３㎜の砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
16	67	SD03 底	夜臼式土器	甕	－	－	(7.3)	刻目突帯Ａ。外面はヨコ方向の粗いナデ調整。内面はナデ調整。	胎土に１～２㎜の砂を多く含む。焼成良好。褐色。	
16	68	SD03 第２層	夜臼式土器	甕	－	－	(3.4)	刻目突帯Ａ。内外面はナデ調整。小さな突帯。	胎土に１～２㎜の砂を含む。焼成良好。外面は褐色、内面は淡茶褐色。	
16	69	SD03 第１層	夜臼式土器	甕	－	－	(5.8)	刻目突帯Ａ。外面は貝殻条痕。内面はナデ調整。	胎土に１～２㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は褐色、内面は淡茶色～黒色。	
16	70	SD03 第１層	夜臼式土器	甕	－	－	(4.4)	刻目突帯Ａ。外面は貝殻条痕。内面はナデ調整。	胎土に１～３㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。外面は褐色、内面は淡茶褐色。	
16	71	SD03 第２層下	夜臼式土器	甕	－	－	(5.2)	刻目突帯Ａ。外面は粗いナデ調整。内面はナデ調整。	胎土に１～３㎜の砂を多く含む。焼成不良。褐色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
16	72	SD03 第1層	夜臼式土器	甕	−	−	(4.6)	刻目突帯C。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成不良。淡茶褐色。	外面磨滅
16	73	SD03 第2層	夜臼式土器	浅鉢	−	−	(3.7)	口縁端部はやや外反する。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。外面は淡茶色、内面は黒色。	
16	74	SD03 第1層	夜臼式土器	壺	−	−	(3.6)	口縁端部は外反する。外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。暗褐色。	内面磨滅
16	75	SD03 第1層	縄文土器	鉢	14.6	−	(4.3)	体部は直線的に延び、端部は外につまみ出す。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。黄褐色。	
16	76	SD03 第2層	夜臼式土器	甕	−	6.2	(2.5)	上げ底。内外面はナデ調整。外底部は削り調整の後ナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。褐色～茶褐色。	
16	77	SD03 第2層	夜臼式土器	甕	−	7.0	(1.9)	やや上げ底。底部に木の葉痕。内面はヘラ状のものによるナデ調整。外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
16	78	SD03 第2層	夜臼式土器	甕	−	6.8	(3.9)	上げ底。内面はヘラ状のものによるナデ調整。外面は条痕。外底部は削り調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は茶褐色～褐色、内面は褐色。	
16	79	SD03 第1層	夜臼式土器	甕	−	8.0	(2.95)	平底。内外面ナデ調整。底部の器壁は薄い。底部端部を外に引き出す。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや軟。淡褐色。	
16	80	SD03 第1層	夜臼式土器	甕	−	6.5	(2.6)	やや上げ底。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成不良。外面は暗褐色、内面は黄褐色。	
16	81	SD03 第1層	夜臼式土器	甕	−	8.6	(3.8)	上げ底。内外面はナデ調整。外底部は削り調整。	胎土に1～5㎜の砂を多く含む。焼成良好。褐色。	
16	82	SD03 第3層	夜臼式土器	壺	−	12.4	(1.9)	平底。外面は条痕の後ナデ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は褐色、内面は黒褐色。	
17	85	SD04 第1層	夜臼式土器	甕	−	−	(6.4)	口縁部の刻目突帯は小さい。胴部屈曲部の突帯を欠く。外面ハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は褐色、内面は淡茶褐色。	
17	86	SD04 第1層	夜臼式土器	甕	−	−	(4.0)	刻目突帯A。深い刻目を施す。外面は貝殻条痕。内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。外面は暗褐色、内面は黒色。	
17	87	SD04 第1層	夜臼式土器	甕	−	−	(7.4)	口縁部と胴部の屈曲部に刻目突帯をもつ。刻目突帯A。外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。淡褐色。	内面磨滅
17	88	SD04 第1層	夜臼式土器	浅鉢	−	−	(3.5)	口縁部はくの字形に外反する。内外面は細かい研磨を施す。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は黒灰色～茶褐色。	
17	89	SD04 第1層	弥生土器	甕	−	−	(8.4)	如意形口縁部。口縁端部に刻目を施す。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は褐色、内面は淡茶褐色。	板付Ⅱ式
17	90	SD04 第1層	弥生土器	壺	−	−	(9.2)	口縁部は外反し、外面に粘土を貼り付け肥厚させる。外面に段をもつ。外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。外面は褐色、内面は淡茶褐色。	板付Ⅰ式内面磨滅
17	91	SD04 第1層	夜臼式土器	甕	−	5.9	(4.6)	やや上げ底。体部は内弯気味に立上がる。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成やや不良。明茶褐色。	
17	92	SD04 第1層	夜臼式土器	甕	−	6.4	(3.3)	上げ底。底部は厚い。外底部は削り調整。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
17	93	SD04 第1層	夜臼式土器	甕	−	6.8	(2.7)	やや上げ底。外面に貝殻条痕。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。茶褐色	
17	94	SD04 第1層	夜臼式土器	甕	−	7.0	(3.2)	上げ底。端部を外へ引き出す。内面はナデ調整。外面は条痕。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。淡褐色。	
17	95	SD04 第1層	夜臼式土器	甕	−	7.0	(3.5)	やや上げ底。内面はナデ調整。外面に貝殻条痕。外底部は削り調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。茶褐色	
17	96	SD04 第1層	夜臼式土器	甕	−	7.4	(3.6)	上げ底。端部を外へ引き出す。外底部に木の葉痕が残る。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を非常に多く含む。焼成良好。淡茶褐色～褐色。	
17	97	SD04 第1層	夜臼式土器	甕	−	8.0	(3.0)	上げ底。端部を外に引き出す。外底部は削り調整。底部は薄い。	胎土に1～4㎜の砂を非常に多く含む。焼成良好。茶褐色。	内面磨滅
17	98	SD04 第1層	夜臼式土器	甑	−	7.6	(4.5)	上げ底。底部に径1㎝の穿孔を焼成後に外底から施す。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。外面は淡茶褐色、内面は褐色。	外面磨滅
17	99	SD04 第1層	夜臼式土器	壺	−	8.4	(2.8)	平底。内面は板状のものによるナデ調整。外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
17	100	SD04 第1層	弥生土器	甕	−	6.0	(3.5)	上げ底。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成やや不良。淡茶褐色。	
17	101	SD04 第1層	弥生土器	甕	−	6.8	(3.9)	やや上げ底。外面は板状のものによるナデ調整。底部は薄い。外底部は削り調整の後ナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
17	102	SD04 第1層	弥生土器	甕	−	8.6	(3.5)	平底。外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。暗茶褐色。	内面磨滅
17	103	SD04 第1層	弥生土器	甕	−	8.6	(6.3)	やや上げ底。外反する体部は直線的に立上がる。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は淡茶褐色、内面は淡褐色。	内外面磨滅
17	104	SD04 第1層	弥生土器	壺	−	11.0	(4.8)	やや上げ底。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成やや不良。淡茶褐色。	
17	105	SD04 第1層	弥生土器	壺	−	13.6	(3.8)	平底。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～5㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。黒褐色。	
17	106	SD04 第1層	弥生土器	壺	−	13.0	(4.0)	平底。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～5㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	
17	107	SD04 第1層	弥生土器	甕	−	7.8	(10.0)	平底。内面はナデ調整。体部は直線的に立上がる。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。赤褐色。	外面磨滅
17	108	SD04 第1層	弥生土器	壺	−	9.5	(5.8)	平底。体部は内弯気味に立上がる。外面はヨコ方向のヘラ研磨。内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
18	109	SD04 第2層	夜臼式土器	甕	−	−	(8.3)	刻目突帯A。外面は貝殻条痕。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。外面は暗褐色、内面は褐色。	
18	110	SD04 第2層	夜臼式土器	甕	−	−	(5.2)	刻目突帯A。外面は貝殻条痕。内面はナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を多く含む。焼成良好。茶褐色～褐色。	
18	111	SD04 第2層	夜臼式土器	浅鉢	−	−	(3.4)	口縁部は外反する。外面は丹塗り。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成やや軟。外面は淡褐色、内面は黒灰色。	
18	112	SD04 第2層	夜臼式土器	壺	−	−	(3.9)	口縁部は外反する。内面はヨコ方向のヘラ研磨。外面はヨコ方向のヘラ研磨。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。外面は黒色、内面は暗褐色。	
18	113	SD04 第2層	弥生土器	甕	−	−	(3.4)	如意形口縁。口縁端部に刻目を施す。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成やや軟。淡褐色。	板付Ⅰ式
18	114	SD04 第2層	弥生土器	甕	−	−	(5.3)	如意形口縁。口縁端部に刻目。外面はタテハケ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。淡茶褐色。	板付Ⅱ式 内面磨滅
18	115	SD04 第2層	弥生土器	甕	−	−	(4.2)	如意形口縁。口縁端部に刻目。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	板付Ⅰ式
18	116	SD04 第2層	弥生土器	小壺	−	4.4	(8.2)	口縁部を欠く。最大胴部径は下位にある。底部は厚く、上げ底。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。茶褐色。	外面磨滅
18	117	SD04 第2層	夜臼式土器	壺	−	−	(6.2)	口縁部は外反する。内外面はヘラミガキ。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。明茶褐色。	
18	118	SD04 第2層	弥生土器	壺	−	−	(6.3)	口縁部は外反し、外面に粘土を貼り付けて肥厚させ、段を形成する。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	弥生時代前期
18	119	SD04 第2層	夜臼式土器	甕	−	6.8	(2.4)	やや上げ底。内外面はナデ調整。底端部を外に引き出す。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。淡褐色。	
18	120	SD04 第2層	夜臼式土器	甕	−	6.0	(2.7)	上げ底。外面はナデ調整。外底部は削り調整の後ナデ調整。底端部を外に引き出す。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	内面磨滅
18	121	SD04 第2層	夜臼式土器	鉢	−	6.8	(2.4)	平底。立上がりは低い。内外面はナデ調整。底部は薄い。底端部を外に引き出す。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成良好。外面は黒色～黒褐色、内面は黒色。	
18	122	SD04 第2層	夜臼式土器	甕	−	8.0	(2.1)	やや上げ底。外底部に木の葉痕。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。外面は暗茶褐色、内面は黒褐色。	
18	123	SD04 第2層	夜臼式土器	鉢	−	6.5	(2.1)	上げ底。内外面はナデ調整。底端部を外に引き出す。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡茶色。	
18	124	SD04 第2層	夜臼式土器	鉢	−	7.0	(2.5)	平底。内外面はナデ調整。外底部は削り調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
18	125	SD04 第2層	夜臼式土器	甕	−	7.2	(2.8)	上げ底。内外面はナデ調整。外底部は削り調整の後、ナデ調整。底端部を外に引き出す。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡褐色。	
18	126	SD04 第2層	夜臼式土器	甕	−	8.8	(4.0)	上げ底。内外面はナデ調整。底端部を外に引き出す。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色～黒灰色。	
18	127	SD04 第2層	弥生土器	壺	−	4.5	(2.2)	小型壺の平底で、内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。淡褐色。	
18	128	SD04 第2層	夜臼式土器	壺	−	8.0	(3.0)	やや上げ底。外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。淡茶色～褐色。	内面磨滅
18	129	SD04 第2層	弥生土器	壺	−	6.0	(2.0)	平底。体部はゆるやかに立上がる。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成やや不良。明茶褐色。	内外面磨滅

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径（高台径）	器高（現存高）	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
18	130	SD04 第2層	弥生土器	甕	－	10.0	(4.3)	平底。底部は薄い。外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は淡赤褐色、内面は淡茶色。	内面磨滅
18	131	SD04 第2層	弥生土器	甕	－	7.0	(6.0)	平底。体部は内弯気味に立上がる。内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成やや不良。外面は茶褐色、内面は褐色。	外面磨滅
18	132	SD04 第2層	弥生土器	甕	－	8.2	(5.5)	平底。外底部に圧痕。体部は外反する。外面はタテハケ調整、下位はヘラケズリで稜がつく。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡褐色。	
18	133	SD04 第2層	弥生土器	甕	－	7.4	(5.9)	平底。内弯気味に立上がる。外面は板状のものによる強いナデ調整で、稜がつく。内面はナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を含む。焼成は堅緻。外面は明茶褐色、内面は淡褐色。	
18	134	SD04 第2層	弥生土器	甕	－	7.6	(8.3)	平底。体部はやや内弯気味に外反する。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は明茶褐色、内面は淡褐色。	
18	135	SD04 第2層	弥生土器	甕	－	10.4	(6.0)	平底。器壁は薄く、体部は内弯気味。内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。外面は淡褐色、内面は茶褐色。	外面磨滅
18	136	SD04 第2層	弥生土器	甕	－	8.0	(8.0)	平底。体部は内弯気味。外面はタテハケ調整で、外部はヘラ状の削り。内面はナデ調整。	胎土に1～5㎜の砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
18	137	SD04 第2層	弥生土器	壺	－	11.2	(8.3)	上げ底。体部は外反し、大きく開く。外面はタテハケ調整、外面下部は板状のものによる強いナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	
19	138	SD04 第2層	弥生土器	壺	－	11.0	(9.0)	平底。体部は直線的に延びる。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成やや不良。淡褐色。	外面磨滅
19	139	SD04 第2層	弥生土器	蓋	－	－	(7.4)	天上部は上げ底。外面はタテ方向の強いナデ調整で、稜がつく。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。外面は淡茶褐色、内面は黒色。	
19	140	SD04 第2層	弥生土器	高坏	－	－	(11.0)	口縁部・裾部を欠く。坏部と脚部の境に三角突帯を貼り付ける。	胎土に1～5㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。淡茶褐色。	外面磨滅
19	141	SD04 第2層	弥生土器	高坏	－	－	(9.5)	坏部・裾部を欠く。坏部と脚部の境に三角突帯を貼り付ける。	胎土に1～4㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。明茶褐色。	外面磨滅
19	142	SD04 第2層	弥生土器	鉢	15.6	－	8.9	体部は丸味をもつ。口縁端部は尖る。外面中位にヨコハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。淡茶褐色。	弥生時代終末
19	143	SD04 第3層	夜臼式土器	甕	－	－	(6.9)	刻目突帯B。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。外面は暗褐色、内面は茶褐色。	
19	144	SD04 第3層	夜臼式土器	甕	－	－	(6.0)	刻目突帯A。突帯は低く丸い。外面に貝殻条痕。内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。褐色。	
19	145	SD04 第3層	弥生土器	甕	－	－	(5.7)	如意形口縁。口縁端部に刻目。内面はヨコハケ調整。外面はタテハケ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	板付Ⅰ式
19	146	SD04 第3層	弥生土器	甕	－	－	(4.6)	口縁部はゆるく外反。端部に刻目。内面はヨコハケ調整。外面はタテハケ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成やや軟。外面は茶褐色、内面は褐色。	板付Ⅰ式内面磨滅
19	147	SD04 第3層	弥生土器	甕	－	－	(6.6)	如意形口縁。逆L字形を呈する。外面はタテハケ調整。	胎土に1～4㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	弥生時代中期内面～口縁部は磨滅。
19	148	SD04 第3層	夜臼式土器	甕	－	7.2	(3.3)	上げ底。底部端を外に引き出す。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや軟。外面は暗茶褐色、内面は褐色。	
19	149	SD04 第3層	夜臼式土器	甕	－	7.6	(3.6)	上げ底。底部端を外に引き出す。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成不良。外面は淡茶褐色、内面は淡褐色。	
19	150	SD04 第3層	夜臼式土器	甕	－	7.0	(3.5)	やや上げ底。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
19	151	SD04 第3層	夜臼式土器	甕	－	6.8	(2.3)	上げ底。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。黒色。	
19	152	SD04 第3層	夜臼式土器	甕	－	5.8	(4.1)	やや上げ底。器壁は厚い。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は黒褐色、内面は茶褐色。	
19	153	SD04 第3層	弥生土器	甕	－	6.6	(3.2)	平底。体部は内弯気味に立上がる。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。外面は黒灰色～褐色、内面は黒灰色。	
19	154	SD04 第3層	弥生土器	甕	－	8.0	(6.5)	平底。底端部に段がある。体部は直線的に立上がる。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は黒褐色。	
19	155	SD04 第3層	弥生土器	甕	－	5.4	(8.4)	上げ底。体部はやや内弯気味に外反する。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は褐色。	
19	156	SD04 第3層	弥生土器	甕	－	7.4	(7.5)	平底。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。茶褐色。	内外面磨滅
19	157	SD04 第3層	弥生土器	甕	－	8.2	(9.4)	平底。体部は直線的に立上がる。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	内外面磨滅

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
19	158	SD04 第3層	弥生土器	甕	－	8.8	(8.8)	平底。体部は直線的に立上がる。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成は堅緻。外面は明茶褐色、内面は褐色。	内外面磨滅
20	159	SD04 第3層	弥生土器	甕	－	6.8	(10.3)	平底。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～5㎜の砂を少し含む。焼成は堅緻。茶褐色。	
20	160	SD04 第3層	弥生土器	甕	－	6.8	(12.3)	平底。体部の立上がりは丸味をもち、内弯気味である。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。茶褐色。	弥生時代後期
20	161	SD04 第3層	弥生土器	壺	－	6.8	(12.4)	平底。体部は球形を呈する。内面はナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を含む。焼成やや軟。外面は淡茶褐色、内面は黒灰色。	外面磨滅
20	162	SD04 第3層	弥生土器	壺	－	－	(5.6)	口縁部は外反し、外側に粘土を貼り付けて肥厚させ、段を形成する。内外面はヘラ研磨調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	板付Ⅰ式
20	163	SD04 第3層	夜臼式土器or弥生土器	小壺	－	4.0	(3.7)	平底。体部が丸味をもつ。外底部は削り調整の後、ナデ調整。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。外面は淡茶褐色、内面は灰褐色。	
20	164	SD04 第3層	弥生土器	壺	－	5.4	(3.3)	平底。体部はやや外反する。外面はヨコ方向の研磨を施す。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。外面は褐色、内面は茶褐色。	内面磨滅
20	165	SD04 第3層	弥生土器	壺	－	7.0	(4.9)	平底。体部は丸味をもつ。内面はナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は淡褐色。	外面磨滅
20	166	SD04 第3層	弥生土器	壺	－	－	(2.5)	肩部に各2条の沈線を施し、その間に複線山形文を施す。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	
20	167	SD04 第3層	弥生土器	壺	－	－	(5.9)	肩部に2条の沈線を施し、下部に重弧文を施す。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。外面は淡褐色、内面は褐色。	
20	168	SD04 第3層	弥生土器	壺	－	－	－	肩部に各2条の沈線を施し、その間に複線山形文を施す。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。明茶褐色。	
20	169	SD04 第3層	弥生土器	壺	－	11.0	(5.0)	やや上げ底。体部は内弯気味に開く。	胎土に1～4㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。外面は茶褐色、内面は褐色。	
20	170	SD04 第3層	弥生土器	壺	－	9.4	(4.6)	平底。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
20	171	SD04 第3層	弥生土器	蓋	－	－	(3.9)	つまみ部。天上面は上げ底。内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	外面磨滅
20	172	SD04 第3層	弥生土器	蓋	－	－	(5.6)	天上面はくぼむ。外面はタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。褐色。	
20	173	SD04 第3層	朝鮮系土器	把手	－	－	－	丁寧なナデ調整。	胎土に1㎜前後の砂を少し含み、精緻。焼成良好。褐色。	朝鮮系
20	174	SD04 第4層	夜臼式土器	甕	－	－	(3.3)	刻目突帯A。内外面はナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を含む。焼成良好。茶褐色～褐色。	
20	175	SD04 第4層	夜臼式土器	浅鉢	－	－	(3.0)	口縁部は外反する。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡褐色。	
20	176	SD04 第4層	夜臼式土器	甕	－	6.6	(3.6)	上げ底。底部端を外に引き出す。内面は板状の工具によるナデ調整。外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。茶褐色。	
20	177	SD04 第4層	夜臼式土器	甕	－	7.8	(3.6)	上げ底。底部は厚い。内外面はナデ調整。外底部は削り調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
20	178	SD04 第4層	夜臼式土器	甕	－	8.0	(2.7)	上げ底。内面はヘラ状の工具によるナデ調整。外面はナデ調整。外底部削り調整の後、ナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は赤褐色、内面は褐色。	
20	179	SD04 第4層	夜臼式土器	鉢	－	6.2	(2.3)	上げ底。底部は薄い。内外面はナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を多く含む。焼成やや軟。茶褐色。	
20	180	SD04 第4層	弥生土器	壺	－	9.4	(5.8)	平底。体部はやや内弯気味に立上がる。	胎土に1～4㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。淡茶褐色。	内外面磨滅
20	181	SD04 第4層	弥生土器	壺	－	－	(4.2)	如意形口縁。内面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	外面磨滅
24	209	表土	夜臼式土器	鉢	－	6.0	(1.9)	やや上げ底。底部端を外に引き出す。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
24	210	表土	夜臼式土器	甕	－	9.9	(2.6)	やや上げ底。外底部は削り調整の後、ナデ調整。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は淡茶褐色。	
24	211	表土	夜臼式土器	蓋	－	9.9	(3.4)	つまみ部。天上部は円盤状で、上げ底。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。明茶褐色。	
24	212	表土	陶　器	碗	－	(5.2)	(2.2)	蛇ノ目高台。鉄釉陶器で、内面見込に鉄絵を描く。	素地は灰色。焼成良好。透明釉、白灰色。	唐津焼

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径（高台径）	器高（現存高）	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
24	213	表土	白　磁	碗	－	－	(3.3)	玉縁口縁。釉は厚い。	素地は白灰色でやや粗い。焼成良好。透明釉、白灰色。	中国製 大宰府Ⅳ類
24	214	表土	白　磁	碗	－	7.6	(4.2)	体部は直線的に延び、口縁端部は尖る。	素地は白色で精緻。焼成良好。透明釉、白色。	国産

Tab. 3　第54次調査青銅製品及び鉄製品一覧表　（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	長（現存長）	幅（現存幅）	厚（現存厚）	特　　徴
11	12	SD 01	鉄製品	釘	(4.8)	(0.4)	(0.4)	
11	13	SD 01	貨幣	寛永通寶	外径2.4	－	外縁厚0.1	初鋳年1636年（寛永13年）。江戸時代
13	50	SD 02礫下層	鉄製品	鍋	(6.4)	－	－	外面に条線が施される。鋳造製である。
13	51	SD 02上層	鉄製品	刀子	(3.5)	(3.4)	(0.3)	工具と考えられる。関は背・刃部に段をもつ。

Tab. 4　第54次調査石製品一覧表　（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	器　種	高（現存高）	幅（現存幅）	厚（現存厚）	重量（g）	石　材	色　調	特　　徴
11	14	SD 01 底	石臼 (上臼)	(径) 17.6	－	9.6	－	凝灰岩	暗赤紫色	芯棒孔径1.8cm、側面孔は1辺1.7cmの方形で、深さ3.2cm。側面孔の菱形飾りを欠く。側辺に鑿痕を残す。分割線は8分割（推定）で、主溝7本、副溝6本を逆時計回りに配す。
14	52	SD 02 礫中層	石斧	(10.4)	8.8	4.9	705	玄武岩	灰青色	刃部・基部を欠き、基部と裏面を再加工途中。全体的に風化によるため表面が剝離している。
14	53	SD 02 礫群	石錘	11.0	5.5	2.5	－	玄武岩	灰色	楕円形の自然石の両端を打ち欠いて抉りを入れる。
14	54	SD 02 礫群	砥石	(7.3)	(6.9)	(5.8)	－	砂岩	褐色	不整形に分離した角礫のA面を砥面として利用。
14	55	SD 02 礫中層	砥石	(10.5)	12.0	10.0	－	砂岩	灰褐色	海岸における浸食をうけた自然石を利用。多面体の4面を砥面として利用。二次火を受ける。
14	56	SD 02 礫群	砥石	(6.9)	(13.2)	8.0	－	砂岩	灰褐色	不整長方形体の4面（A面・B面・左側面・上小口面）を砥面として利用。二次火を受け、表面剝離している。
14	57	SD 02 礫群	凹み石	11.8	12.9	8.2	－	砂岩	暗灰褐色	不整形の長方形体を呈し、上面に径5.0cmの窪みを設ける。側辺は面取りするが、2辺は風化・破損している。二次火を受ける。
14	58	SD 02 礫群	砥石	16.5	10.2	9.0	－	砂岩	灰色	長方形状の立方体であるが、1側辺とB面は自然面を残し、3側辺は面取りしている。A面を主に砥面として利用。
14	59	SD 02 礫群	一石五輪塔 (砥石)	18.5	13.3	－	－	細粒砂岩	淡褐色	二次火を受ける。水・地輪を欠き、さらに縦半分を欠損する。全体に鑿痕がある。
15	60	SD 02 礫群	板碑 (砥石)	(16.9)	19.4	9.2	－	砂岩	褐色	頭部三角形の額部のみ残存。2条の薬研彫りの沈線。背面に鑿の成形痕。二次火を受ける。
16	83	SD 03 第3層	石鎌	(8.5)	5.2	0.7	－	粘板岩	暗灰色	磨製石鎌で、基部と先端部を欠く。両刃で、背部は丸みをもつ。風化著しい。

挿図番号	遺物番号	出土遺構	器　種	高 (現存高)	幅 (現存幅)	厚 (現存厚)	重量(g)	石　材	色　調	特　　徴
21	182	SD04 第1層下	磨製石斧	24.5	8.4	3.6	1115	玄武岩	暗灰青色	扁平大型石斧。全体を研磨。表面は風化が著しい。刃部は両刃で、一部を欠く。
21	183	SD04 第2層	磨製石斧	14.7	7.9	3.55	700	玄武岩	暗灰色	刃部・基部及び縦半分を欠く。全体を研磨。表面は風化している。
21	184	SD04 第2層	磨製石斧	14.5	7.3	3.6	580	玄武岩	暗灰青色	刃部を欠く。側辺に敲打痕を残す。全体の研磨は丁寧ではない。風化している。
21	185	SD04 第1層	磨製石斧	11.4	5.7	4.0	210	玄武岩	灰色	刃部と縦半分を欠く。基部の一部を欠損。側辺に敲打痕と剝離痕を残す。
21	186	SD04 第2層	磨製石斧	3.6	5.6	2.7	52	玄武岩	暗灰色	小型石斧の刃部片。研磨。
21	187	SD04 第1層	磨製石斧	(7.8)	6.5	1.5	−	玄武岩	灰色	石斧の剝片を利用。一側辺に調整痕がみられる。
21	188	SD04 第3層	石錘	9.8	4.9	1.5	−	砂岩	淡茶色	半分に分離している。自然石の側辺を加工。両小口と側辺に抉りを入れる。
21	189	SD04 第3層	石錘	8.7	7.6	1.7	−	玄武岩	灰青色	扁平な自然石の縁辺を加工。紐掛けの抉りを2ヶ所に入れる。
21	190	SD04 第4層	敲石 (磨石)	(9.7)	8.2	5.3	−	玄武岩	暗灰色	A面と側面3ヶ所に敲打部分がある。全体は研磨されている。
21	191	SD04 第3層	磨石 (敲石)	6.6	6.6	6.1	−	玄武岩	灰色	叩き石を利用した。やや角をもった不整円球で、部分的に剝離痕がある。
21	192	SD04 第1層	円盤	5.5	5.7	0.6	−	粘板岩	灰色	不整円形に面取りしている。風化して脆い。
21	193	SD04 第2層	石包丁	(6.8)	4.8	0.9	−	蛇紋岩	灰緑色	気泡が多い石材。約1/2を欠く。片刃で、紐穴は両方から穿孔。
21	194	SD04 第1層	砥石	(6.4)	4.5	1.0	−	細粒砂岩	暗灰色	下小口は欠損。A・B両面2面を砥面として利用。側辺は研磨面取りしている。
22	195	SD04 第3層	砥石	12.1	8.5	(6.6)	−	砂岩	淡茶灰色	截頭の長方錘状に敲打成形している。A・B両面、左右両側面を砥面として利用。
22	196	SD04 第4層	砥石	15.6	15.1	6.2	−	砂岩	淡茶灰色	海岸自然扁平礫を利用。両小口を面取り。A面の一部を砥面として利用しているが、使い込んでいない。
22	197	SD04 第3層	砥石	9.5	(5.2)	3.7	−	細粒砂岩	淡茶灰色	方柱状に粗い面取り。A・B面を砥面として利用。
22	198	SD04 第3層	砥石	8.9	7.0	5.5	−	砂岩	淡茶灰色	長方柱状に面取り。側辺の一部を欠く。A・B両面、左右両側面を使用。主として左側面を使用。
22	199	SD04 第1層	砥石	8.3	6.4	5.7	−	砂岩	暗淡茶灰色	多面体に面取り。4面を砥面として利用。
23	200	SD04 第3層	削器	5.9	3.4	1.4	−	頁岩	黒色	縦長の剝片を利用。側辺に刃部をつける。
23	201	SD04 第2層	石鏃	2.4	1.6	0.4	3	黒曜石	黒灰色	先端と一方のかえりを欠く。抉りは深い。
23	202	SD04 第2層	石鏃	2.1	1.6	0.5	2.5	黒曜石	黒色	基部の抉りは深く、剝離調整は丁寧である。

挿図番号	遺物番号	出土遺構	器種	高 (現存高)	幅 (現存幅)	厚 (現存厚)	重量(g)	石材	色調	特徴
23	203	SD04 第2層	石鏃	3.2	1.7	0.35	4	黒曜石	黒色	先端と一方のかえりを欠く。縁辺の調整は細かい。
23	204	SD04 第2層下	石鏃	2.5	1.4	0.35	3	サヌカイト?	灰黒色	表面は風化。先端と一方のかえりを欠く。B面は一部研磨か。
23	205	SD04 第1層	石鏃	2.4	1.8	0.35	5	黒曜石	黒色	いわゆる三角鏃で、かえりの一方を欠く。
23	206	SD04 第3層	石鏃	2.4	2.2	0.35	2.5	黒曜石	黒色	横長の剝片を利用。三角鏃で、両面共に剝離痕を残している。
23	207	SD04 第3層	石鏃	3.0	2.4	0.7	6	黒曜石	黒色	縦長の剝片を利用。一方の側辺と抉り部の加工途中。
23	208	SD04 第1層	石鏃 (未製品)	3.15	2.0	0.55	7.5	黒曜石	漆黒色	細かい気泡が多い。縁辺の加工で形を整えている。抉りはまだない。
24	215	表土 (攪乱)	敲石 (磨石)	9.3	6.5	−	−	玄武岩	灰色	角礫を利用。高さ7.9cm。A面を叩き面として使用。全体に剝離痕が残る。敲打具として利用後、磨石として利用。

第４章　第68次調査 (調査番号8209)

１．地形と概要

(1) 立 地

当該地は福岡市早良区有田２丁目17-42に所在し、発掘調査面積76㎡である。発掘調査は昭和56年６月８日～６月15日の期間中実施した。

調査地点は、有田・小田部台地の南側にあって、尖頭状に突き出た台地の西側縁辺に位置する。当該地周辺は、中世後半期に存在したと伝えられる「小田辺城」の伝承地域で、旧有田村の西側に在った濠と考えられるホカヤネの存在や、馬場等の地名が通称として遺存している。周辺の聞き取りでは当該地が濠の埋立地であることが判明していたので、今回の発掘調査では、このホカヤネの規模を確認することに重点をおいた。「早良郡志」によれば、このホカヤネの規模は濠幅１間（２ｍ）、長さ90間（160ｍ）を測ると云われていた。

(2) 概 要

試掘調査によって、遺構面までの深さが1.8ｍに達することが予想されていたため、先ず厚さ1.4ｍの客土を重機で取り除き、更に人力で深さ40㎝まで掘り下げた。残土処理は調査地内では処理ができないため、地区外へ搬出した。遺構面は暗灰青色の粘質土である。この面において土壙５基を検出した。又、濠は調査区の北隅で一部を検出したにすぎない。

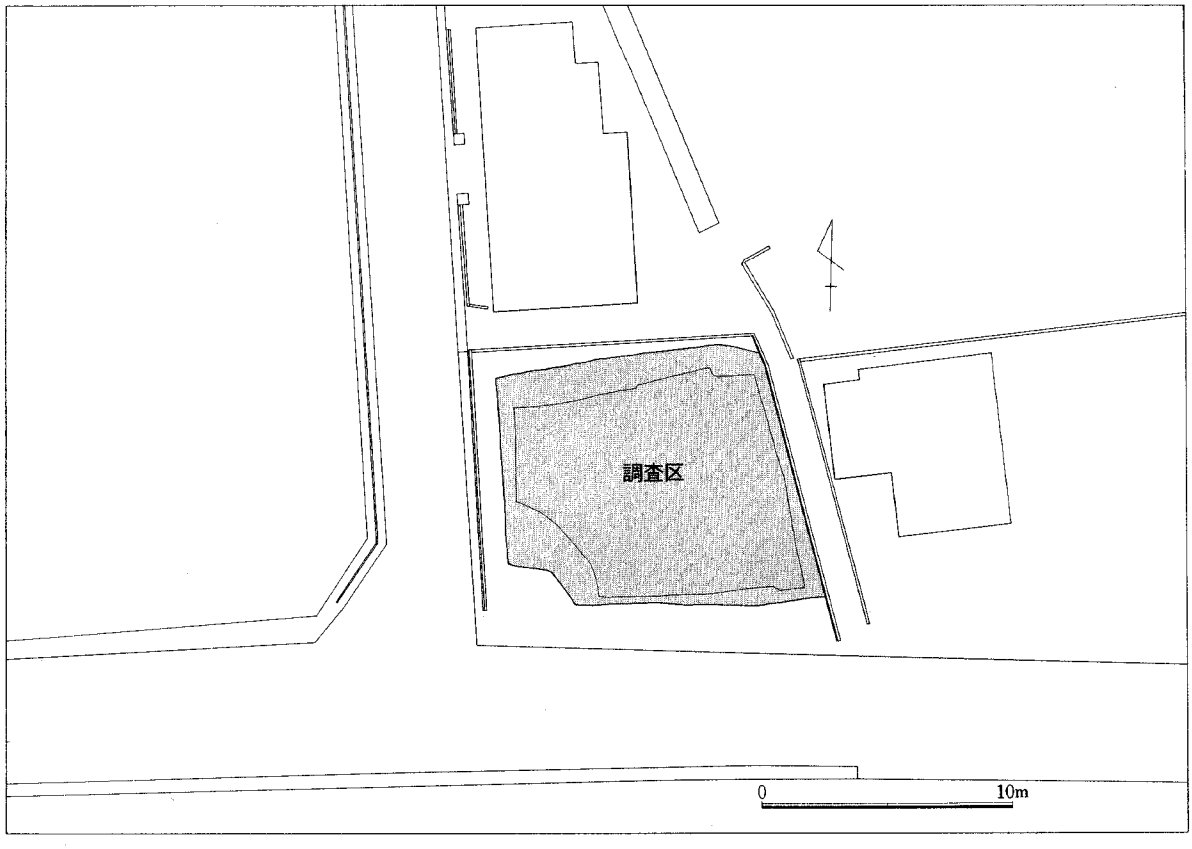


Fig. 26　第68次調査地点位置図（縮尺1/300）

旧地目は水田であり、水田の耕作土・床土を除去した後に部分的に残土処理として瓦礫等を埋め込んで客土としている。客土の深さは140cmまである。土層は第1・2層が客土のマサ土で、瓦礫等を含んでいる。耕作土を取り除いた後に充填している。第3層以下はほぼ水平堆積しており、第3層は礫混じりの暗褐色粘質土層、第4層は茶褐色～黒色粘質土層、第5層は灰白色～青灰色細砂層、第7層は青灰色砂層、第9層は暗茶褐色砂質土層、第10層は暗褐色粘質土、第11層は淡黄褐色粘質土である。その下の第13層の暗灰青色粘質土が基盤となるので、遺構はいずれもこの面で検出できる。但し、遺構の遺存状態や湧水の浸み出し状況から、この基盤面自体は当時の生活面とは考え難い。

2. 遺構説明

(1) 土壙 (SK)

土壙5基を検出した。遺物が出土していないため、いずれの土壙も時期が不明であるが、いずれも暗灰青色粘質土層上面から掘り込んでいる。遺存状態は悪い。

SK 01 (Fig. 29)　上面は削平と撹乱を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形状である。現存長80cm、底面の長さ72cm、幅52cm、深さ11cmを測る。覆土は黒色粘質土と灰色粘質土を主体としている。出土遺物はない。

SK 02 (Fig. 29)　上面は削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形であるが、底は浅いレンズ状を呈する。長さ85cm、底面の長さ73cm、幅60cm、深さ16cmを測る。覆土は黒色粘質土と灰青色粘質土を主体としている。出土遺物はない。

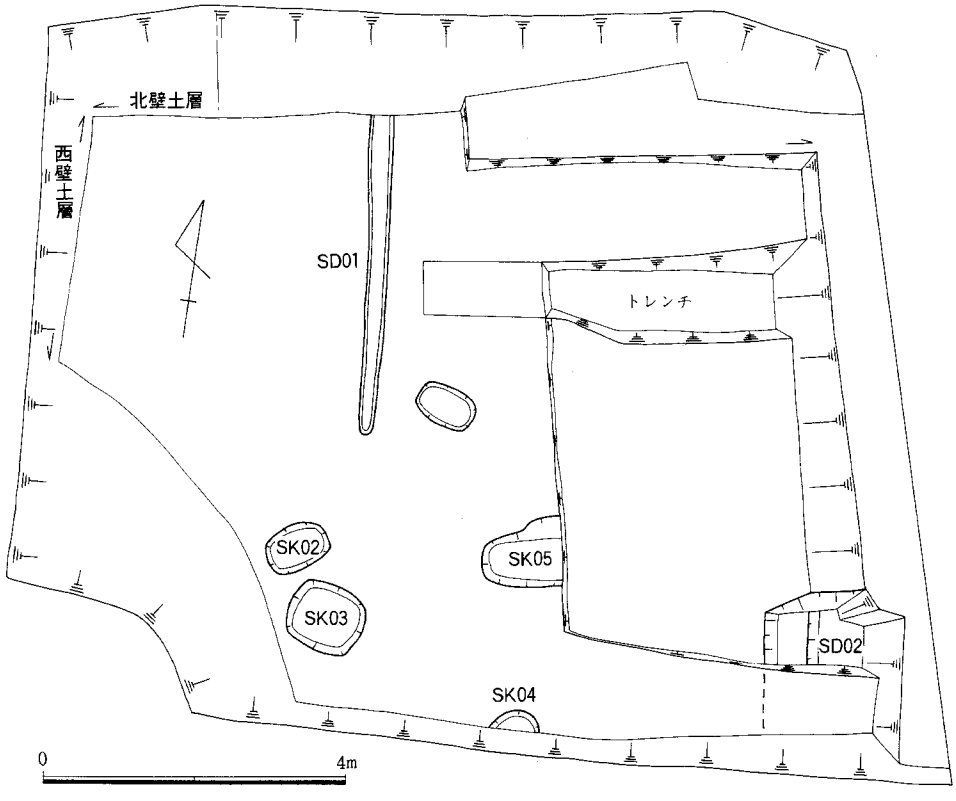
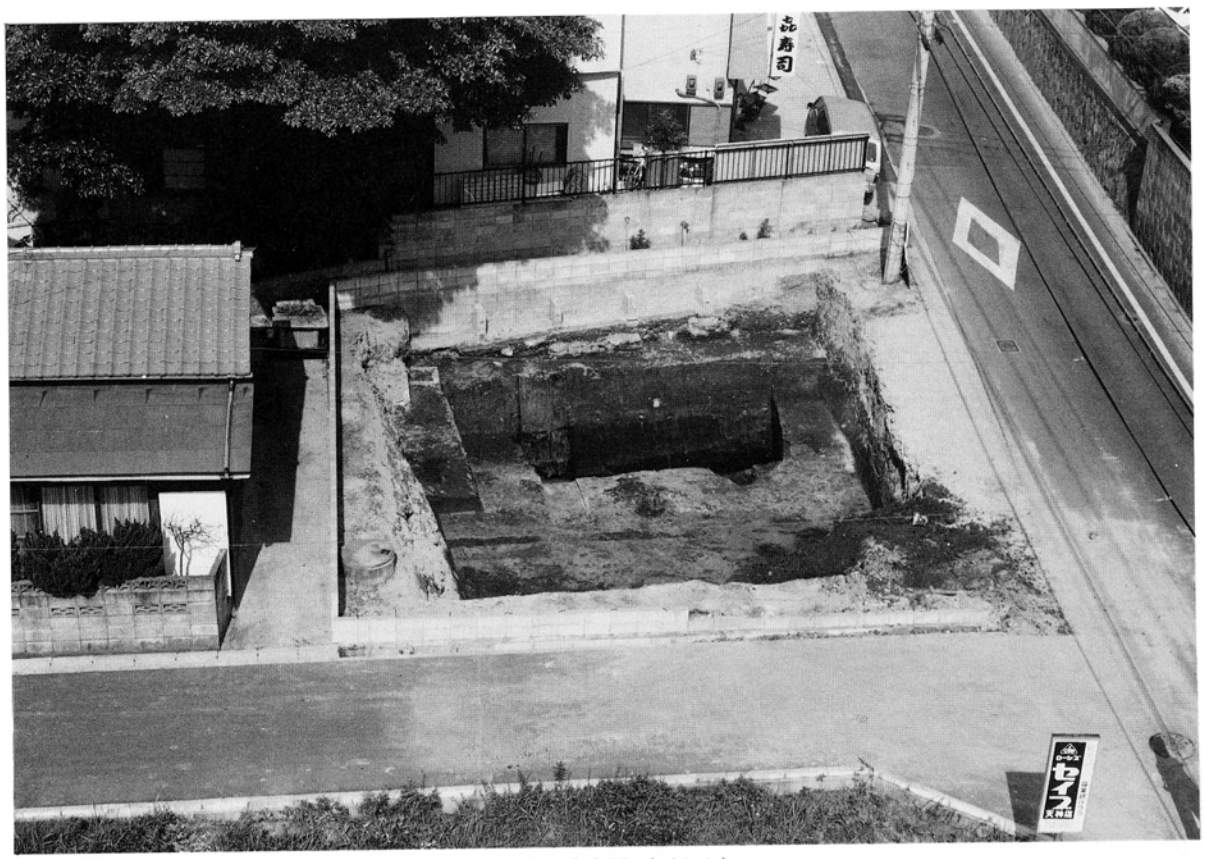
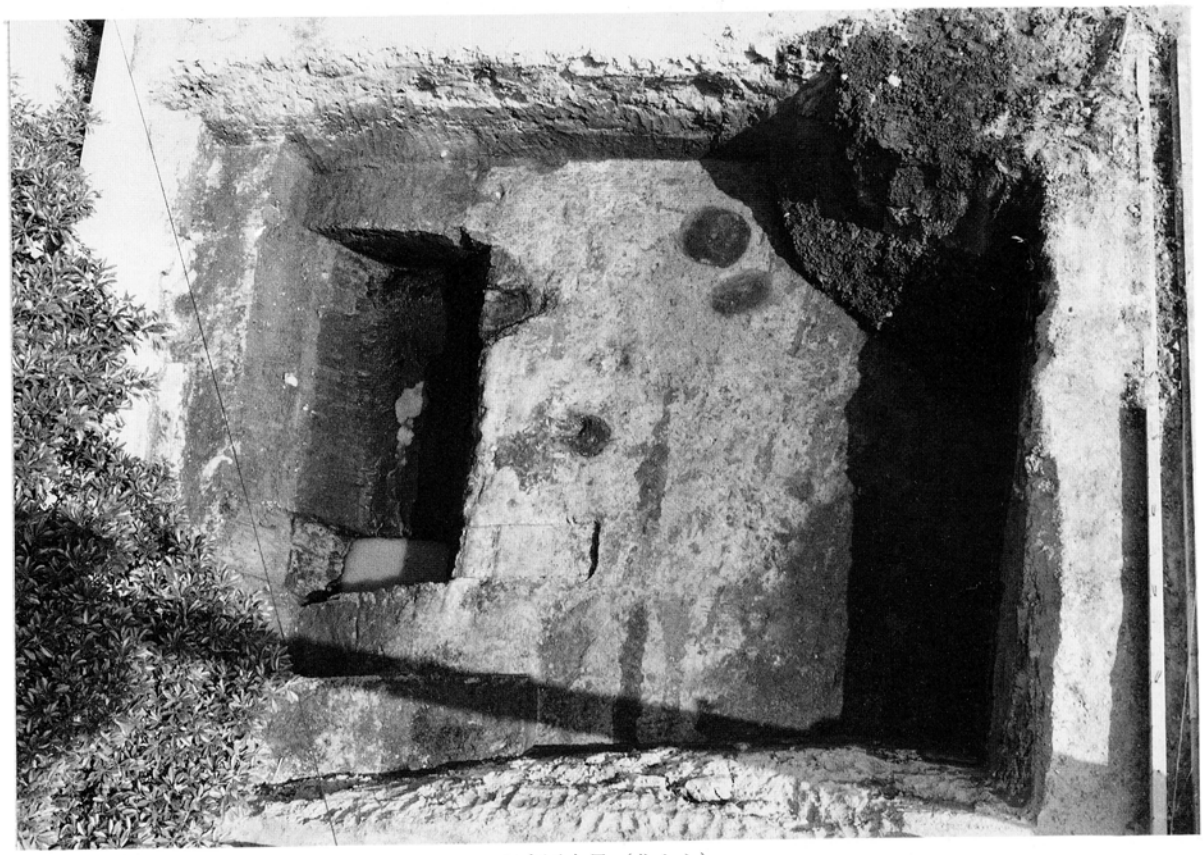


Fig. 27　第68次調査遺構配置図（縮尺1/100）



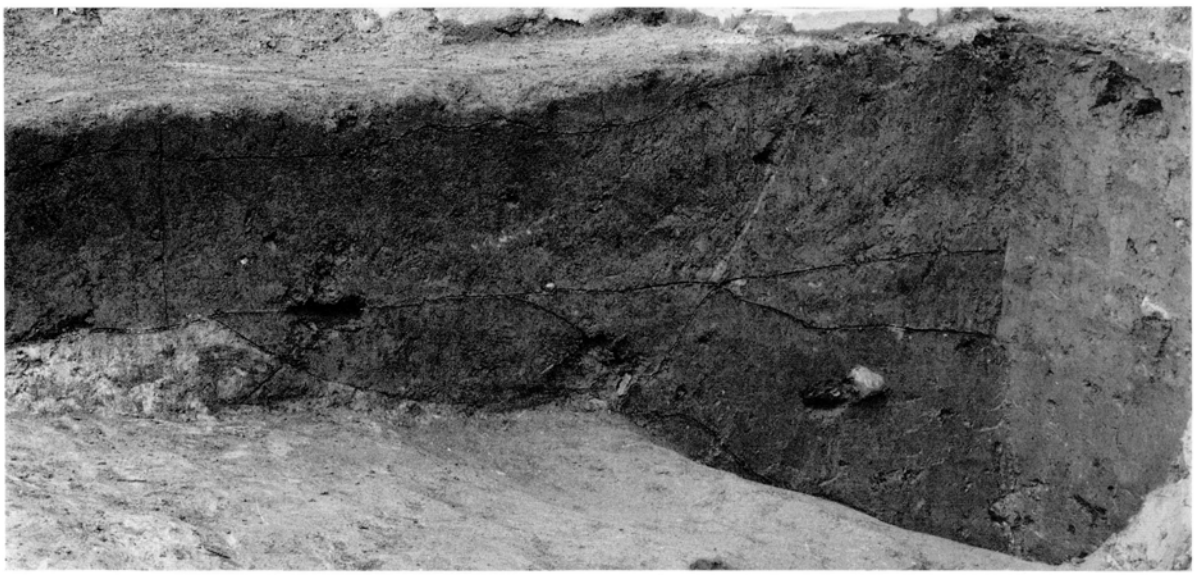
第68次調査全景（西から）



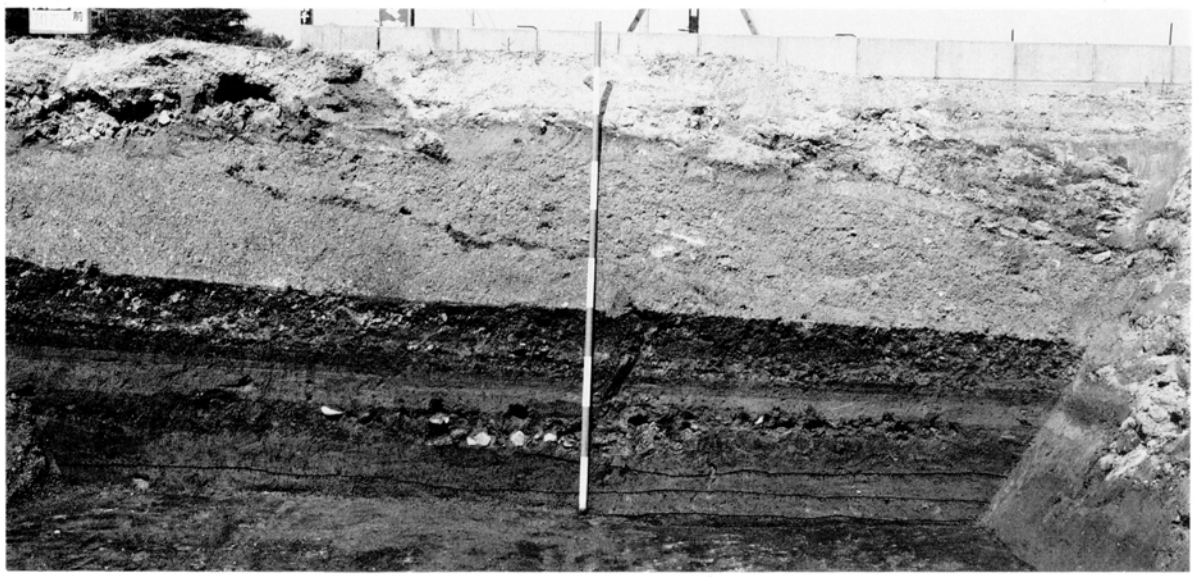
調査区全景（北から）

Tab. 5　第68次調査遺構一覧表　　（単位：cm）

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形態		長	幅	深	出土遺物	時期	備考
			平面形	断面形						
SK01	D 1	土壙	隅丸長方形	逆梯形	80	52	11	なし	不明	
SK02	D 2	土壙	隅丸長方形	逆梯形	85	60	16	なし	不明	
SK03	D 3	土壙	隅丸長方形	逆梯形	104	89	18	なし	不明	
SK04	D 4	土壙	不整円形	逆梯形	63$^{+\alpha}$	26$^{+\alpha}$	18	なし	不明	
SK05		土壙	隅丸長方形	逆梯形	110$^{+\alpha}$	91$^{+\alpha}$	34	なし	不明	
SD01		溝状遺構	－	逆梯形	440$^{+\alpha}$	32	5	弥生土器、土師器、磨石	不明	
SD02		溝	－	－	240$^{+\alpha}$	－	110＋$^{\alpha}$	弥生土器甕棺、土師器皿・坏、須恵器、土師質土器、瓦質土器鍋？、中国陶器碗、白磁碗、平瓦・丸瓦、石鍋・石鏃	中世	ホカヤネ



調査区北壁の土層状態（南から）



調査区西壁の土層状態（南から）

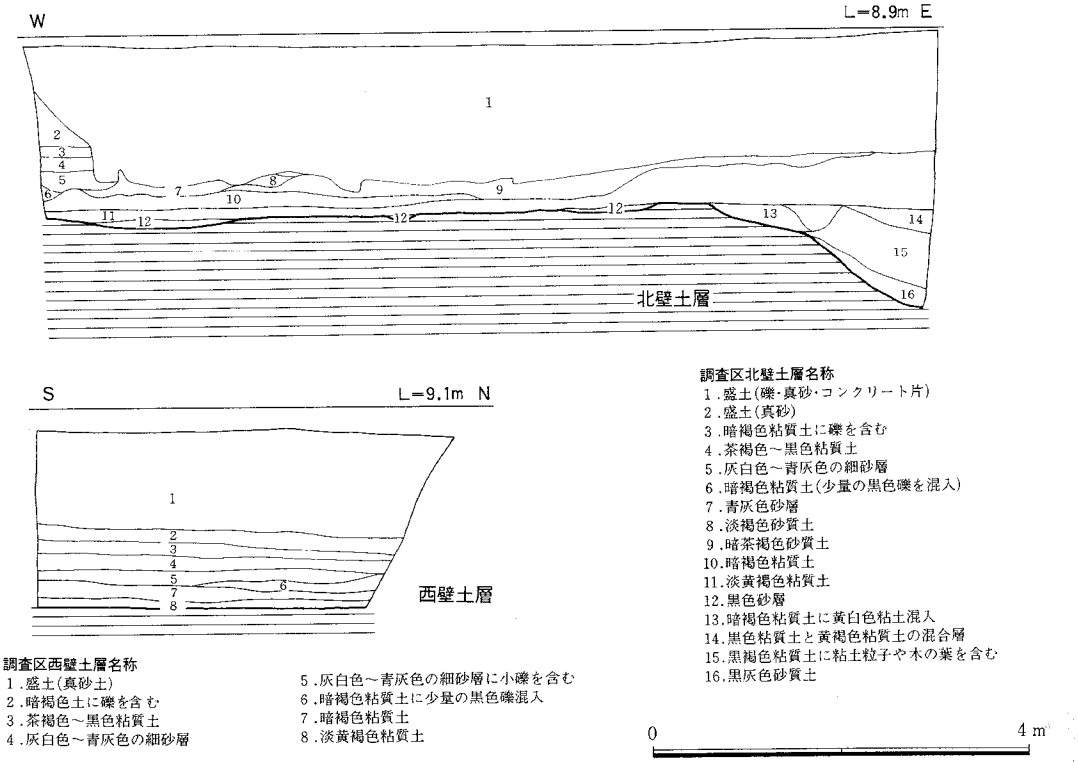


Fig. 28　第68次調査区周壁土層実測図（縮尺1/80）

SK 03（Fig. 29）　上面は削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形状であるが、底は浅いレンズ状を呈する。長さ104cm、底面の長さ90cm、幅89cm、深さ18cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。遺物の出土はない。

SK 04（Fig. 29）　南側境界地に位置し、全体形は不明である。上面は削平を受けており、平面形は不整円形を呈し、断面形は逆梯形である。現存長63cm、底面の長さ55cm、最大幅26cm、深さ18cmを測る。覆土は黒色粘質土と黒灰色粘質土を主体としている。遺物の出土はない。

SK 05（Fig. 29）　上面は削平を受けており、且つ、トレンチにより土壙の東側を削られている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。現存長110cm、底面の現存長104cm、最大幅91cm、深さ52cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。出土遺物はない。

(2)　溝（SD）

調査区の東側において、南北方向の濠の一部を検出した。又、調査区の中央では南北方向の浅い溝状遺構を１条検出した。いずれも谷の主軸に沿っており、SD 01は排水的役目を、SD 02は排水及び、中世城の濠としての機能をもったものと考えられる。

SD 01（Fig. 27）　調査区の中央で、北側の境界に位置しているため4.4ｍまでの長さを確認するにとどまった。大略南北方向の溝で、断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は32cm、底面の幅は20cmを測る。覆土は暗灰黄色粘質土を主体としている。中世後半以降の遺構と考えられる。

SD 02（Fig. 27）　調査区の東側境界に位置しているため、濠の全体規模を確認できなかった。昭和40年代まではホカヤネとして濠が遺存していたと云われており、SD 02が相当するものと考えられる。現状では長さ７ｍを確認するにとどまった。大略南北方向の溝で、断面形はＶ字形を呈するものと考えられる。溝上面の幅は現状で52cm以上を測り、深さは不明である。覆土はヘドロ状の黒色粘質土を

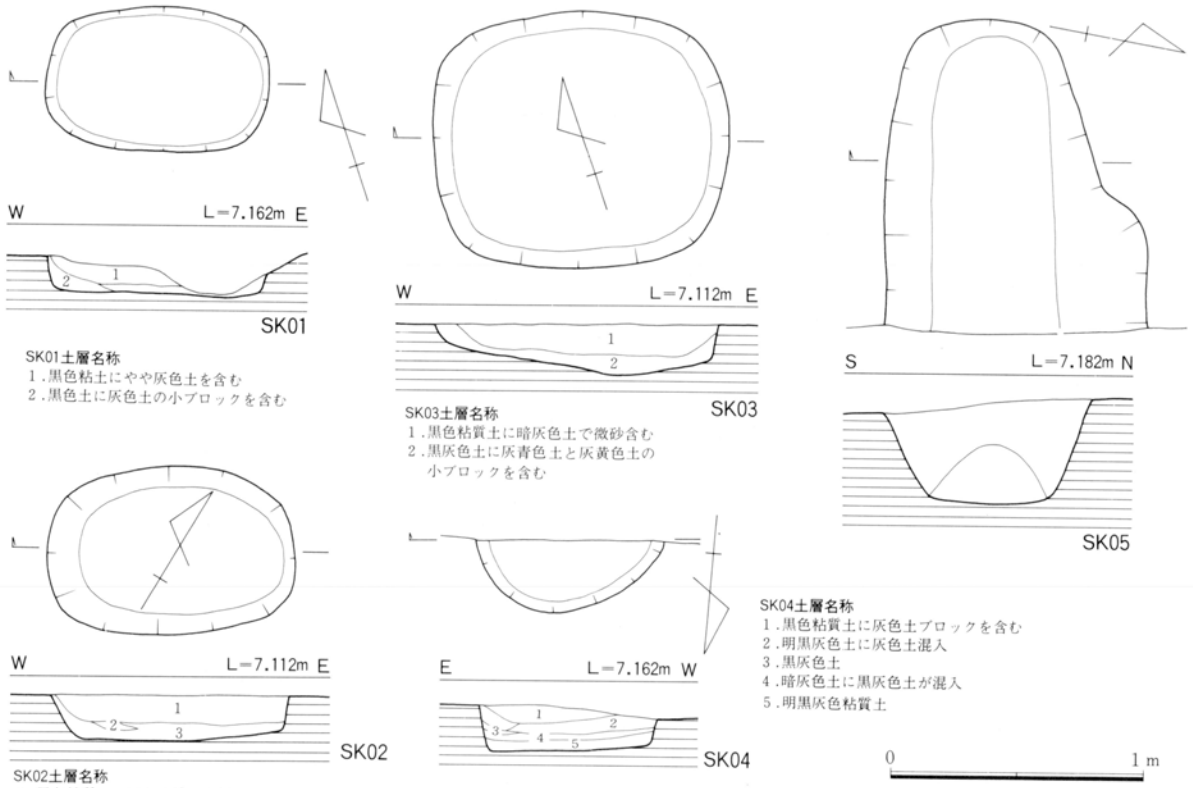
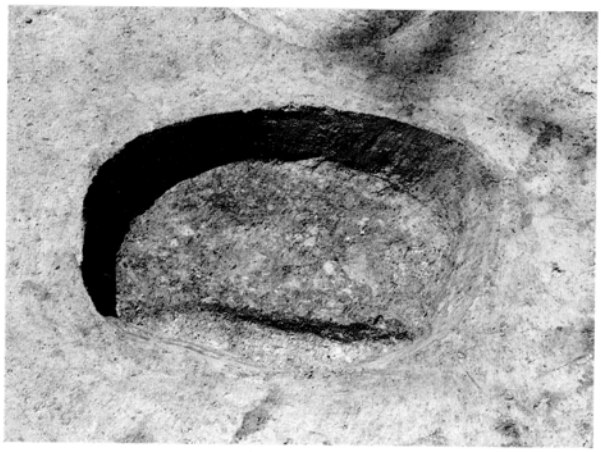


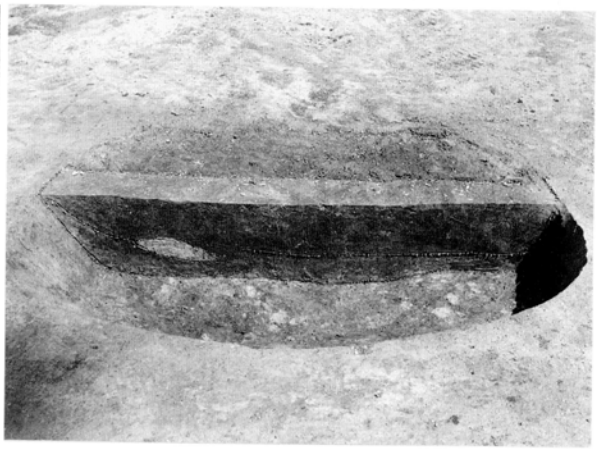
Fig. 29　土壙 SK 01～05実測図（縮尺1/30）

土壙 SK 01（南から）

土壙 SK 03（東から）



土壙 SK 02（北から）



土壙 SK 02土層状態（南から）

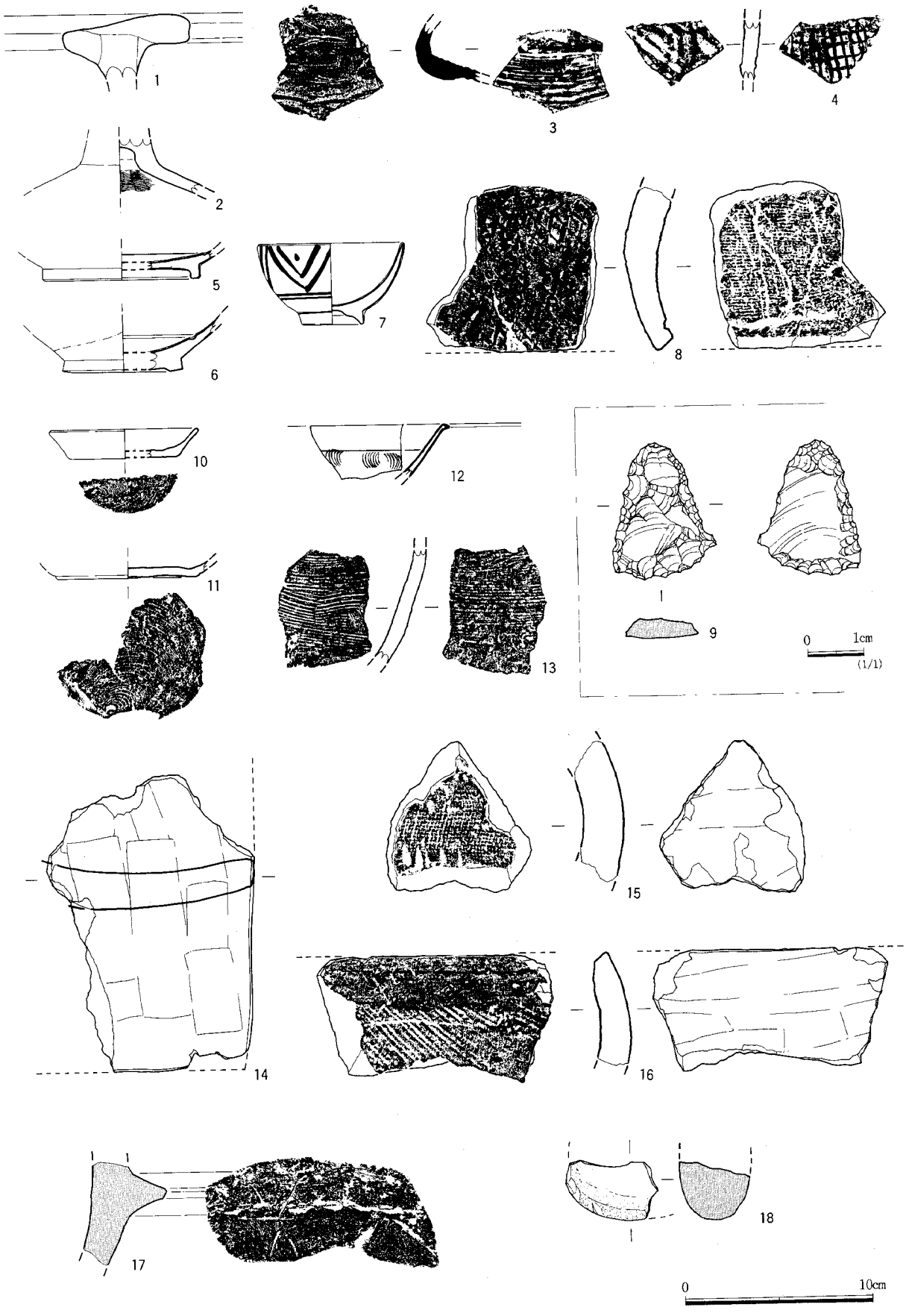
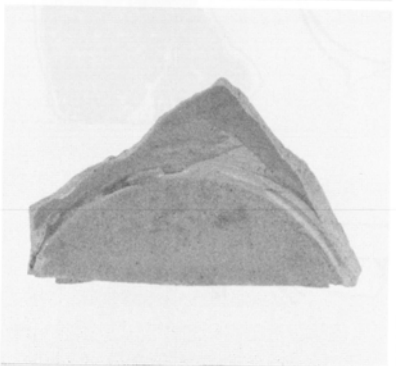


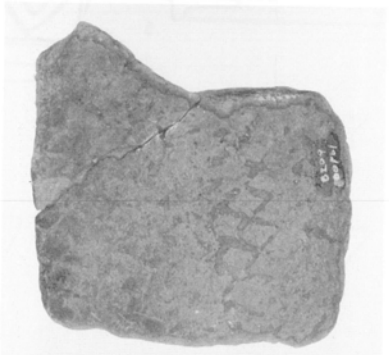
Fig. 30　各遺構出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）

2

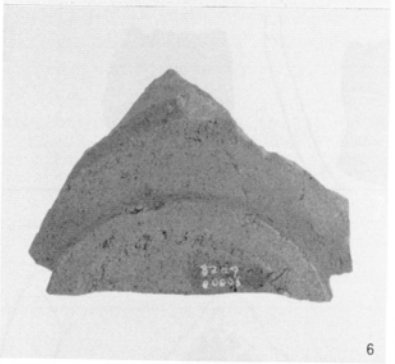
7

9

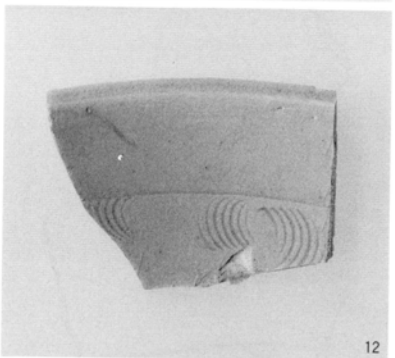


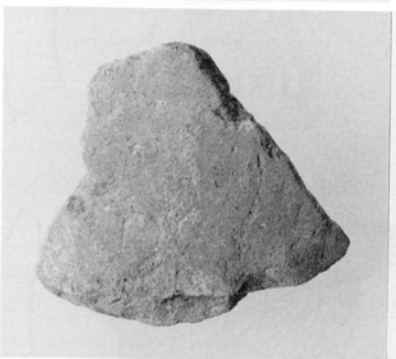


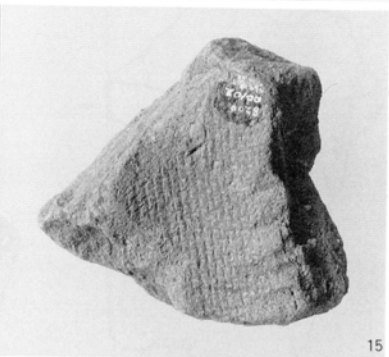
5


6

8


12




15

16

17

18

第68次調査出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する

主体にしており、下層は黒灰色砂質土が堆積している。糸切り底の土師器・瓦質土器・平瓦・丸瓦等が出土した。中世後半期の遺構と考えられる。

3．遺物説明

(1) 包含層・表土出土遺物 (Fig. 30)

1・5・8は包含層出土、他は表土内より採集した。1は弥生土器で甕棺の口縁部片、2は土師器高坏の脚部である。5は緑釉陶器の碗片で、畿内又は近江産であろう。6は中国製白磁碗Ⅳ類、3・4は須恵器で、4の外面は格子目叩き、内面は青海波の当て具痕がある。赤焼けしている。3は外面に平行叩きを施す。8は丸瓦片で、谷部は布目痕、背部は斜格子目の叩きがある。7は国産の染付碗である。

(2) 溝出土遺物 (Fig. 30)

SD 01出土遺物 (Fig. 18)　18は玄武岩質の円礫であるが、表面が丸くなっており、一部に打撃痕があることから、磨石とした。

SD 02出土遺物 (Fig. 10～17)　10・11は糸切り底の土師器で、10は皿、11は坏である。12は中国製白磁碗のⅥ-1類、13は瓦質土器の湯釜片である。14～16は瓦片で、14は平瓦、15・16は丸瓦である。15の谷部には布目痕が、16の谷部には糸切り痕がある。背部はヘラナデがみられる。14の谷部も同様にヘラナデがあり、周縁はヘラによる面取り調整される。17は滑石製石鍋片で、突帯は三角状を呈している。外面のケズリはタテ方向のノミ痕が残るが粗い。

4．まとめ

今回の調査地点は戦国時代に存在したと云われる「小田部城」の濠、通称ホカヤネの所在地に位置している。「筑前国續風土記拾遺」によれば、小田部氏の里城とされているが、詳細は不明である。又、一方では有田に「堀ノ内城」があって、これも「鎮西要録」によれば小田部氏の里城とされているが、これらの「小田辺城」と「堀ノ内城」が同一の城を示すのかは不明である。

有田地区では、第77次調査を中心とする27ケ所の発掘調査によって、薬研掘りの濠跡を多数検出しており、これらの濠跡がどのように構成されるのか検討することによって城の規模をはかることができる。第54次調査においても16C～17C初頭の濠を検出している。この濠は「小田部城」の中心と思われる地域に所在し、且つ、有田1丁目の交差点を中心とする周辺の調査において検出した濠とは規模・構造も一致することから第54次調査SD02はこれらの濠に関連の深い濠と見做せる。「小田部城」の中心は現在の西福岡高校敷地とも云われているところから、台地内部にV字形の濠と土塁を巡らし、且つ、台地の西側にホカヤネを、東側に鬼丸ホゲ等の濠を設けていたものと考えられる。

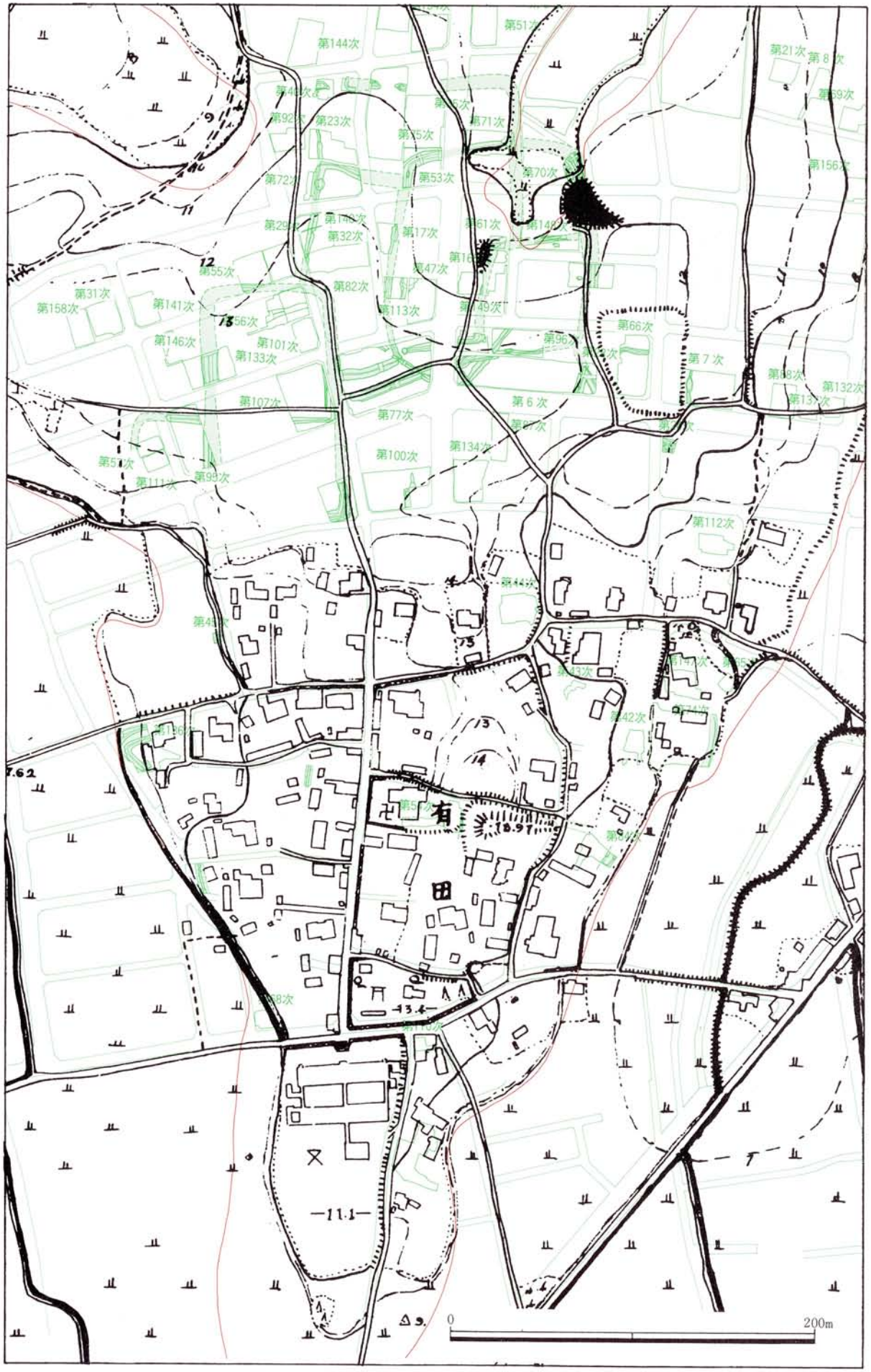


Fig. 31　調査地点及び中世溝配置図（縮尺1/3,000）

Tab. 6　第68次調査遺物一覧表

（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径（高台径）	器高（現存高）	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
30	1	包含層	弥生土器	甕	－	－	(3.4)	口縁部はT字型口縁（甕棺）	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡褐色。	弥生時代中期
30	2	表土	土師器	高坏	－	－	(3.0)	脚部片。内面は9本単位のヨコハケ調整。	胎土は精緻。焼成良好。黄茶色。	古墳時代
30	3	表土	須恵器	甕	－	－	－	体部外面は平行叩き、口縁部内外面はヨコナデ調整。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成良好。濃灰色。	
30	4	表土	須恵器	甕	－	－	－	外面は格子目叩き、内面は青海波叩き。	胎土に砂粒を少し含む。焼成良好。外面は黒灰色、内面は明茶褐色。	赤焼け土器か
30	5	包含層	緑釉陶器	碗	－	(8.2)	(1.5)	断面コの字形高台	素地は濃灰色で精緻。焼成良好。緑色釉。露胎部は濃灰色。	京都か近江産？
30	6	表土	白磁	碗	－	(5.0)	(3.1)	高台部削り出し	素地は灰色で精緻。焼成良好。透明釉。	中国白磁 大宰府Ⅳ類
30	7	表土	染付	碗	7.8	(3.2)	4.4	体部は半球体	素地は白色で精緻。焼成良好。淡緑色の透明釉、淡緑白色。	伊万里焼？
30	10	SD 02	土師器	皿	7.8	5.6	1.6	糸切り底。体部外反。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。褐色。	中世
30	11	SD 02	土師器	坏	－	7.4	(0.9)	糸切り底。体部外反。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	中世
30	12	SD 02	白磁	碗	－	－	(2.9)	口縁部端反り。内面に櫛描文。	素地は白灰色で精緻。焼成良好。透明釉、白灰色。	中国白磁 大宰府Ⅵ-1類
30	13	SD02	瓦質土器	湯釜	－	－	－	内外面はヨコハケ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好、淡茶褐色。	

Tab. 7　第68次調査丸瓦計測表

（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	長さ		幅		高さ	弧深	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
			玉縁部	筒部	前端部	後端部							
30	8	包含層	－	－	－	－	－	－	灰色	1～3㎜の砂を含む。	やや軟	背部は斜格子文の叩き痕。谷部はやや粗い布目痕が残る。	
30	15	SD 02 濠内	－	－	－	－	－	－	灰色	1～3㎜の砂を含む。	良好	背部は板状のものによるナデ、谷部は布目痕。	
30	16	SD 02	－	－	－	－	－	－	黒灰色	1～3㎜の砂を少し含む。	良好	背部は板状のものによるタテ方向のナデ、谷部は細かい布目痕と斜方向の紐状の痕跡が残る。全体に燻しが施される。	

Tab. 8　第68次調査平瓦計測表

（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	長さ（現存長）	厚さ（現存厚）	幅		弧深	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
					前端部	後端部						
30	14	SD 02 濠内	(15.9)	(2.0)	－	－	－	背部は淡褐色、谷部は黒灰色。	1～3㎜の砂を含む。	良好	背部はナデ。谷部は幅約2.6cmの板状のものによるタテ方向のナデ。	

Tab. 9　第68次調査石製品一覧表

（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	器種	長（現存長）	幅（現存幅）	厚（現存厚）	重量（g）	石材	色調	備考
30	9	遺構面	石錐	2.4	1.8	0.4	－	黒曜石	黒色	錐先端を欠く。
30	17	SD 02濠内	石鍋	(5.5)	(12.9)	－	－	滑石	緑灰色	高さ4.1cm残存。
30	18	SD 01	磨石？	(4.9)	(3.1)	3.8	－	玄武岩	淡灰褐色	破片。

第５章　第69次調査 (調査番号8210)

１．地形と概要

(1)　立　地

当該地は福岡市早良区有田１丁目13-10に所在し、発掘調査面積は202㎡である。

有田地区の最高所の平坦地は標高約15ｍを測る。当該地は平坦地から北東方向に伸びる舌状尾根のほぼ中央に位置している。周辺では第８・21・81次調査が実施されており、弥生時代から中世までの遺構が発見されている。

今回の発掘調査は個人専用住宅建設に伴うもので、敷地内には既設の建物等が存在しているため調査中の残土処理や騒音等が問題となった。

(2)　概　要

台地の傾斜面に位置するため遺構面は２回に亘って整地が行われている。約20～40㎝の表土を除去した後に検出した黒色粘質土の上面を第１面とした。この黒色粘質土は整地層で、弥生時代から平安時代までの土器を含んでいる。第２面は厚さ15～18㎝の黒色粘質土の包含層を除去した後に検出する面で、シルト質の軟弱な地質である。特に雨に弱く、表面が流出する傾向がある。遺構は第１面では溝・井戸・土壙、第２面では掘立柱建物等を検出した。

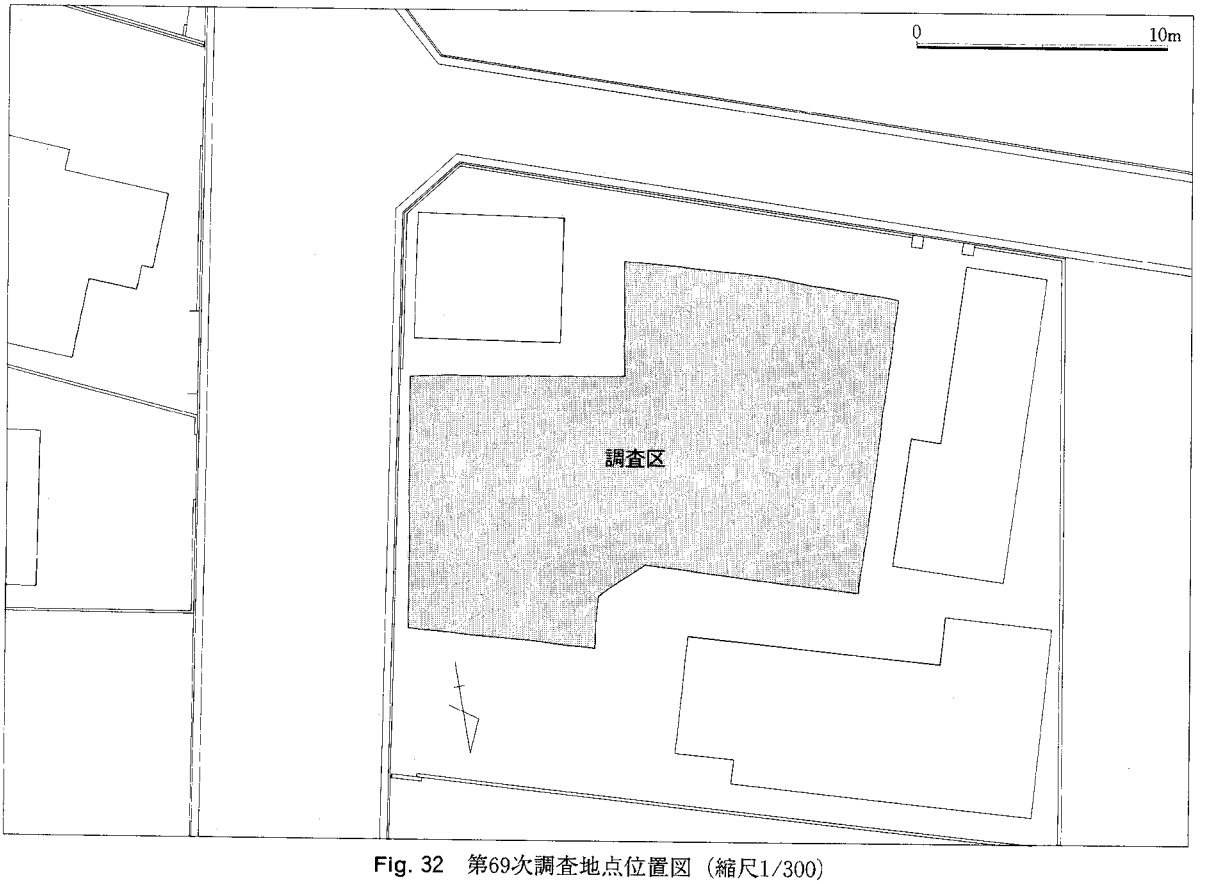


Fig. 32　第69次調査地点位置図（縮尺1/300）

第69次調査第１面　全景（東から）

調査区第２面 全景（東から）

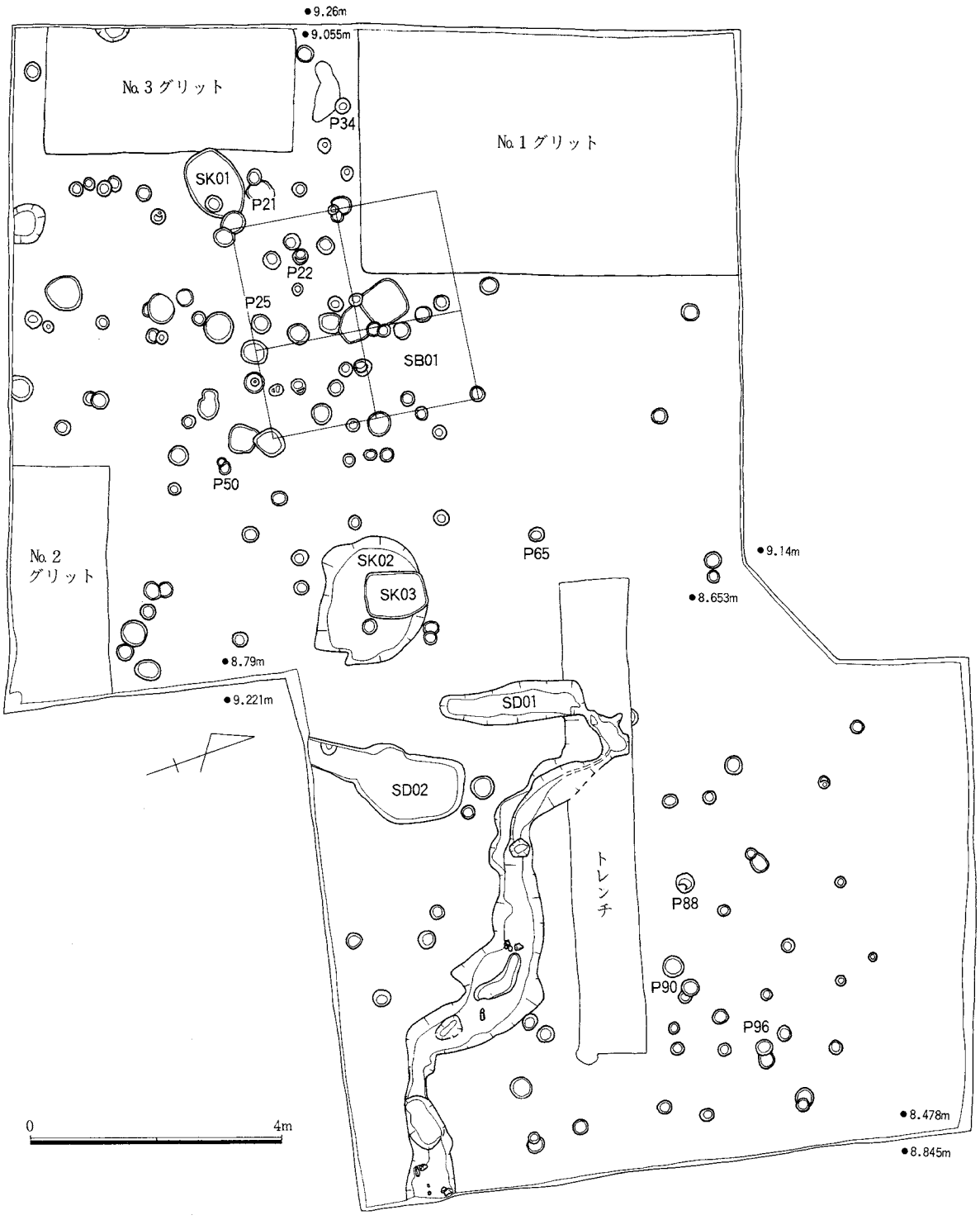


Fig. 33　第69次調査第1面遺構配置図（縮尺1/100）

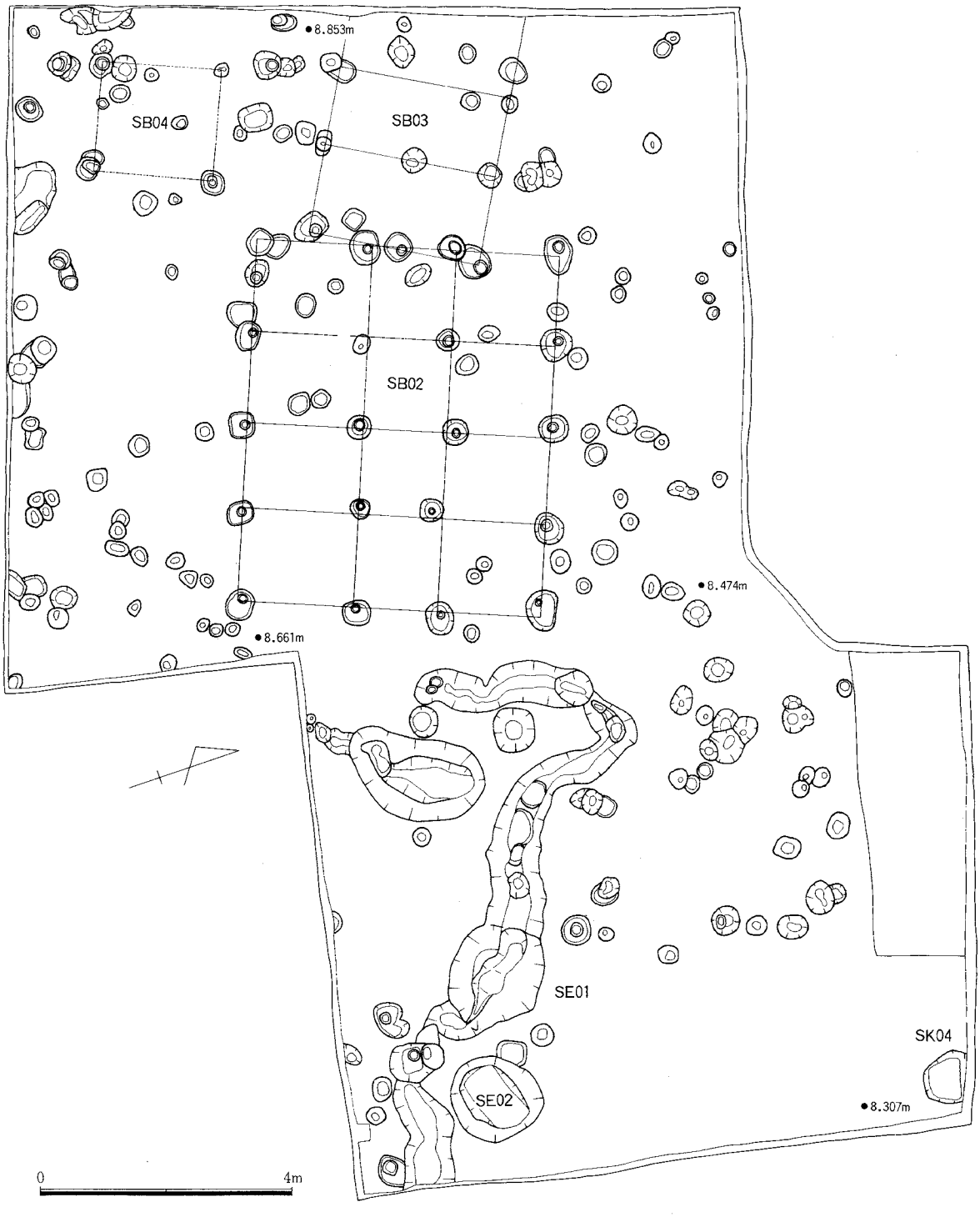


Fig. 34　第69次調査第２面遺構配置図（縮尺1/100）

2．遺構説明

(1) 土　壙 (SK)

形状が不整形な土壙4基を検出した。SK01～03は第1面の黒色粘質土層の上面から掘り込まれており、SK04は第2面の黄灰色シルト土層に掘り込まれている。

SK 01（Fig. 35）　第1面で検出した。土壙の上面は削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆悌形である。長さ120cm、底面の長さ105cm、幅85cm、深さ22cmを測る。覆土は暗茶色粘質土と黒褐色粘質土を主体としている。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、瓦器がある。

SK 02（Fig. 35）　第1面で検出した。上面は削平を受け、土壙SK 03に切られている。平面形は不整形を呈し、断面形は逆悌形である。最大長210cm、底面の長さ180cm、幅175cm、深さ13cmを測る。覆土は暗茶色粘質土と黒褐色粘質土を主体としている。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器がある。

SK 03（Fig. 35）　第1面で検出した。土壙の上面は削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆悌形である。長さ100cm、底面の長さ95cm、幅75cm、深さ25cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。遺物の出土はない。

SK 04（Fig. 35）　第2面で検出した。土壙の上面は削平を受けている。平面形は不整円形を呈し、断面形は箱形である。現存長67cm、底面の現存長50cm、幅85cm、深さ91cmを測る。覆土は暗茶色粘質土と黒褐色粘質土を主体としている。井戸とも考えられる。出土遺物はない。

(2) 井　戸 (SE)

第2面において2基検出した。井戸SE 01は出土遺物の内容が中世遺物を主体にしていることから第1面から掘り込まれていた可能性が強い。

SE 01（Fig. 35）　調査区の東側に位置している。溝SD 01と切り合い、形状が著しく変形している。素掘りの井戸で、井戸上面の平面形は不整楕円形を、断面形は逆悌形を呈している。井戸上面での最大径は1.7m、深さは1.06mを測る。井戸底部は浅い摺鉢状の掘り込みを有している。井戸の覆土は黒褐色粘質土を主体としており、井戸覆土から土師器、須恵器、中国白磁、陶器等が出土している。

SE 02（Fig. 35）　調査区の東側のSE 01の東隣りに位置している。素掘りの井戸で、井戸上面の平面形は不整円形を、底部は隅丸長方形で、断面形は袋状を呈している。井戸上面での最大径は1.4m、深さは0.98mを測る。井戸の中程の壁は袋部を作っている。井戸の覆土は黒色粘質土を主体としている。貯蔵穴もしくは落し穴の可能性を残している。

(3) 掘立柱建物 (SB)

第1面では、調査区の東側と西側にPitの集中地域があり、西側においてSB 01を検出した。第2面では全体にPitが多く、SB 02～04の3棟の建物を検出した。第1面は先述したように黒色粘質土の上面を遺構面とするためPitの検出は困難を極めた。掘立柱建物の検出については疎漏が多いものと考えられる。

SB 01（Fig. 36）　第1面で検出した。No. 1のグリットを設定したため一部の柱穴を削平し、全形は不明である。中央に束柱が存在するので梁行2間、桁行2間の規模をもった総柱の掘立柱建物である。主軸方位をN82° Wに置き、柱間は梁間5. 7尺、桁間5. 8尺を測る。掘方径36～54cm、深さ12～38cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器等が出土している。

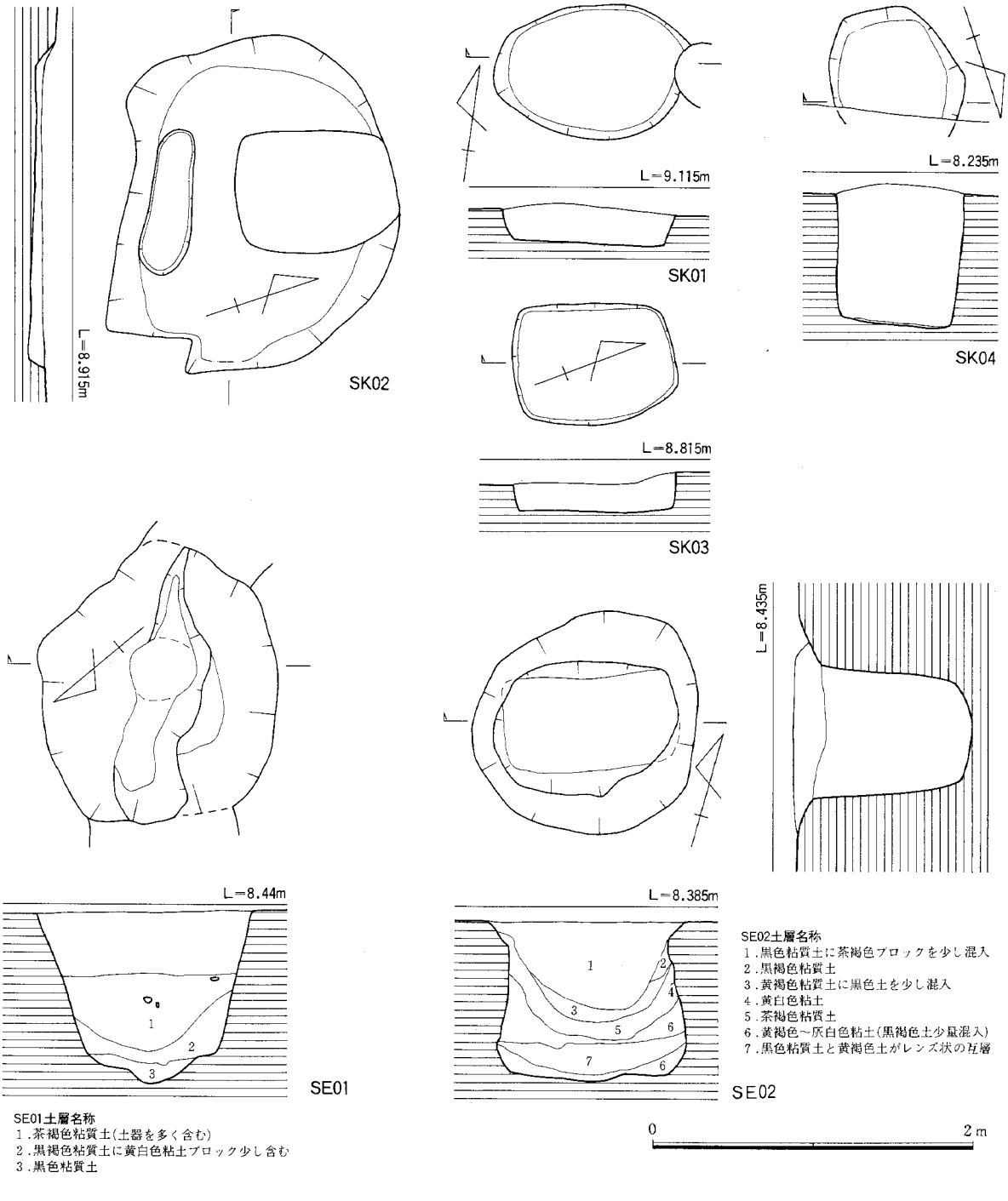


Fig. 35　土壙SK 01～04、井戸SE01・02実測図（縮尺1/40）

SB 02（Fig. 36）　SB 03より後出する。梁行3間、桁行4間の規模をもった総柱の掘立柱建物である。主軸方位をN30° Wに置き、柱間は梁間5．3尺、桁間4．9尺を測る。掘方径30～66cm、深さ28～50cmを測る。

SB 03（Fig. 36）　SB 02から柱穴が切られており、SB 02に先行する。西側境界地に位置するため全体形は不明である。梁行2間、桁行2間以上の規模をもった掘立柱建物が考えられる。主軸方位をN67° Wに置き、柱間は梁間4．5尺、桁間4．5尺を測る。掘方径40～57cm、深さ13～23cmを測る。

土壙SK04（北から）

井戸SE01（東から）

井戸SE02完掘状態（西から）

井戸SE02土層状態（南から）

Tab. 10　掘立柱建物一覧表　　1尺＝30.3cm

	規模	桁行(cm)		梁行(cm)		方位	床面積	柱穴状態					出土遺物	備考
		実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)		(m²)	Pit数	深さ	長径	短径	柱根径		
SB 01	2×2	355(11.7)	155(5.1) 200(6.6)	345(11.4)	180(5.9) 170(5.6)	N82° W	12.24	7	12～38	36～54	35～52		弥生土器壺・甕、土師器高坏・甕、須恵器、サヌカイト、頁岩	
SB 02	3×4	595(19.6)	155(5.1) 145(4.8) 145(4.8) 150(5.0)	485(16)	185(6.1) 130(4.3) 170(5.6)	N67° W	28.85	20	28～50	30～66	30～52		なし	
SB 03	2×2	270(8.9)	145(4.8) 125(4.1)	280(9.2)	155(5.1) 120(3.9)	N30° E	7.56	8	13～23	40～57	35～48		土師器	
SB 04	1×1	195(6.4)	195(6.4)	175(5.8)	175(5.8)	N65° W	3.41	4	14～23	38～40	35～37		なし	

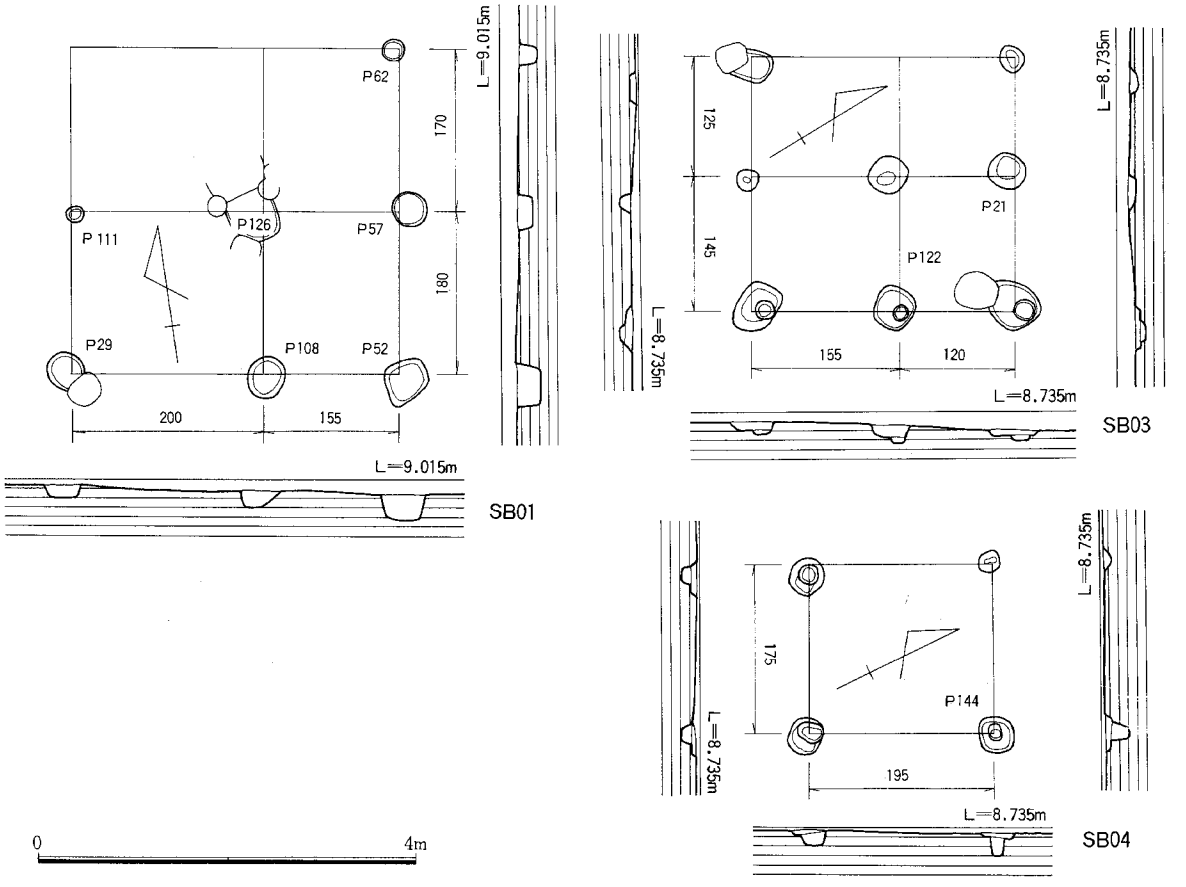


Fig. 36　掘立柱建物 SB 01・03・04実測図（縮尺1/80）

SB 04 (Fig. 36)　梁行１間、桁行１間の規模をもった掘立柱建物である。主軸方位をN65° Wに置き、柱間は梁間5．8尺、桁間6．4尺を測る。掘方径38～40cm、深さ14～23cmを測る。

(4)　溝（SD)

調査区の第１面において南北方向、及び東西方向に蛇行する溝を２条検出した。SD 01は東側の斜面方向に主軸をおいており、自然排水的な役目をもっていたものと考えられる。

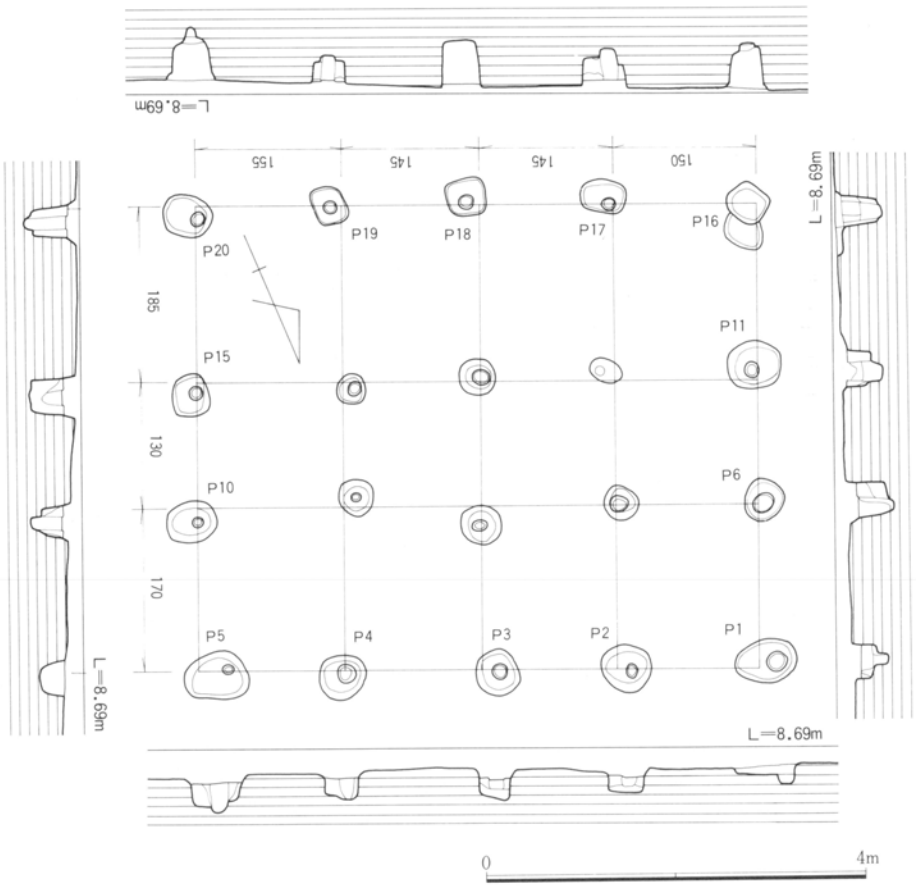
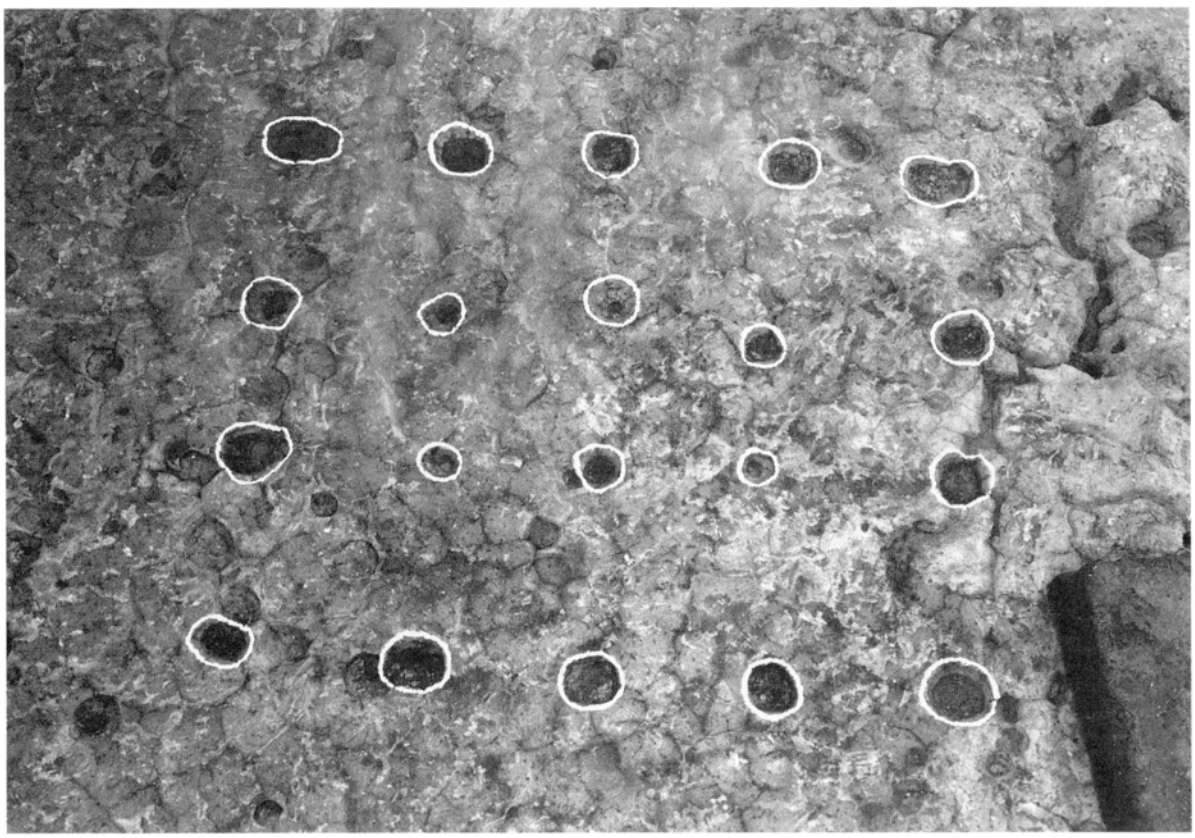


Fig. 37　掘立柱建物 SB 02実測図（縮尺1/80）



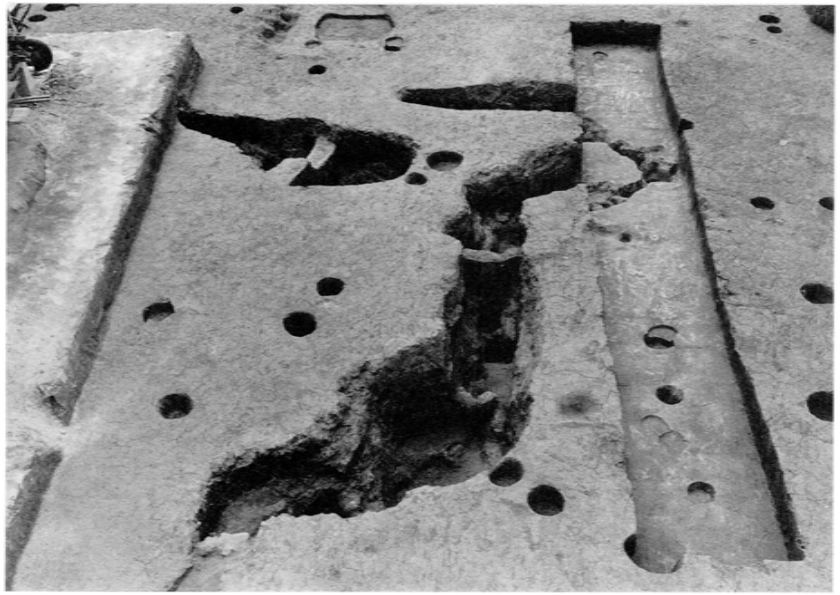
掘立柱建物 SB 02（南から）

掘立柱建物SB02－3の状態（西から）

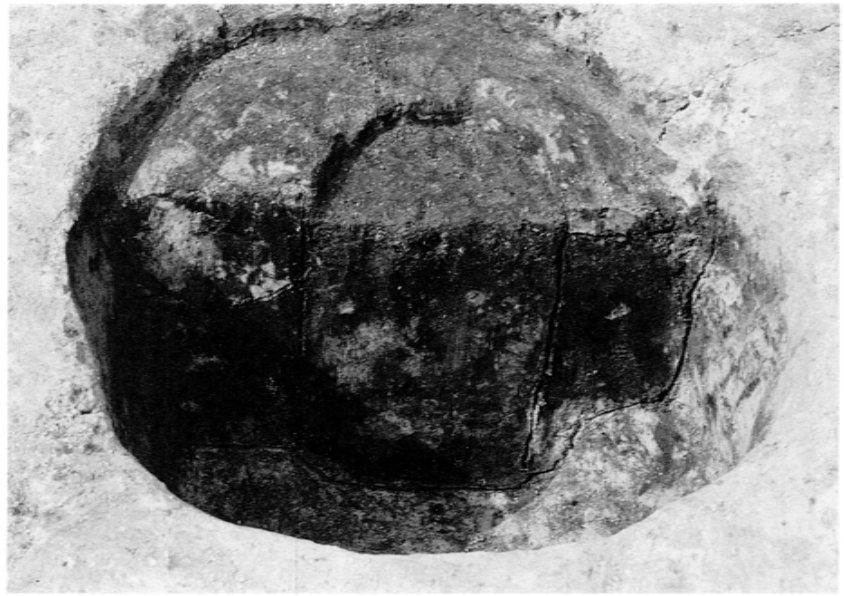
掘立柱建物SB02－2の状態（西から）

掘立柱建物SB02－4の状態（北から）

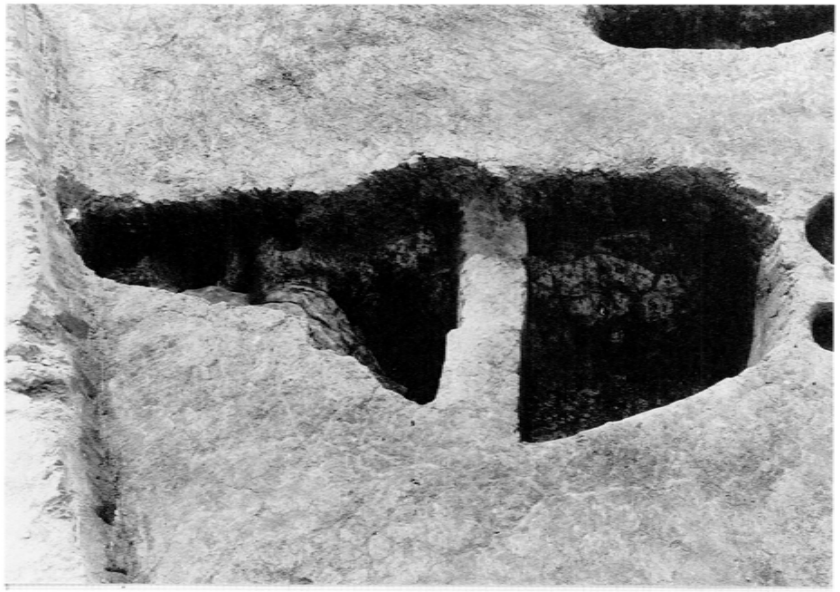
掘立柱建物SB02－6の状態（西から）



溝ＳＤ０１・０２（東から）

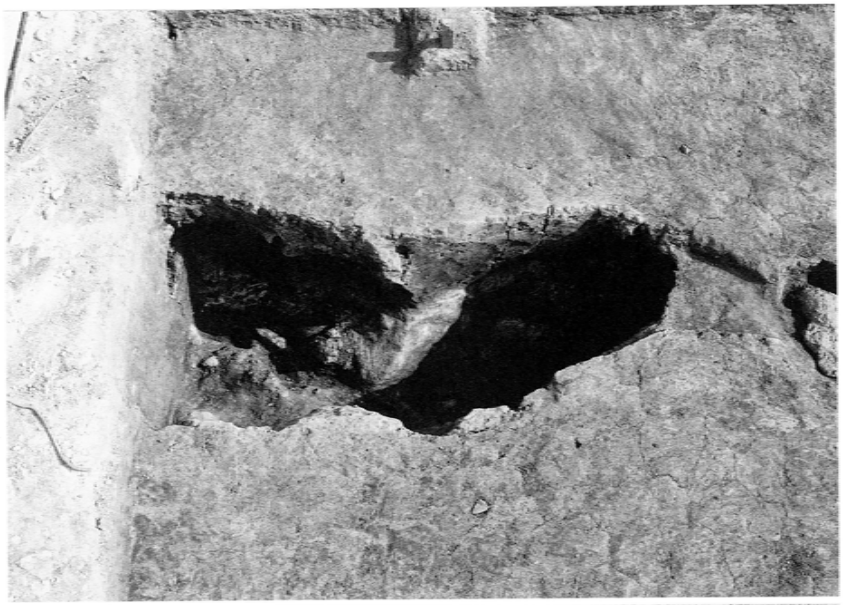


掘立柱建物ＳＢ０２－２１の状態（西から）



溝ＳＤ０２（東から）

掘立柱建物ＳＢ０２－１０の状態（東から）



溝SD01（北から）

溝SD01鉄滓出土状態（南から）

溝SD01土層状態（西から）

溝SD01東側の状態（西から）

SD 01（Fig. 33）　調査区の東側に位置しており、先端は境界外にある。井戸 SE 01と切り合っている。長さは約12.5ｍを確認するにとどまった。東側に蛇行しながら流下する溝で、溝の断面形は不整形で一定していない。溝上面の幅は最大で150㎝、最狭部で22㎝、深さ90㎝を測る。覆土は黒色粘質土、又は茶褐色粘質土を主体としている。中世の遺構であるが、遺物には鉄滓及び、製鉄関連の土製品が出土しており、製鉄関係遺構とも考えられる。

SD 02（Fig. 33）　調査区の南側境界に位置しているため全体形、全長は不明である。現存長３ｍを測る。大略南北方向の溝で、断面形は逆梯形を呈する。溝上面の最大幅は250㎝、深さ90㎝を測る。覆土は黒色粘質土、又は茶褐色粘質土を主体としており、中世の遺構と考えられる。

3．遺 物 説 明

(1)　井戸出土遺物（Fig. 38）

SE 01出土遺物（１・２）　１は中国製の玉縁白磁碗Ⅱ類である。２は土師器の二重口縁壺片である。

(2)　掘立柱建物出土遺物（Fig. 38）

SB 01出土遺物（３～５）　３・４はＰ５、５はＰ１出土である。４・５は古墳時代の土師器で、４は甕、５は高坏の脚部片である。４は内弯する口縁部で、５世紀代に比定できる。

(3)　溝出土遺物（Fig. 38）

SD 01出土遺物（6～22）　６は弥生時代終末期の甕、７は古墳時代土師器の高坏、８～13は須恵器で、８・９は坏蓋、10・12は皿、11・13は甕である。15は中国製青磁碗、14は中国製の玉縁白磁碗、16は明の染付碗、17は土師質土器の捏鉢、18は糸切り痕をもつ平瓦、19は製鉄関係遺物の土製品、20は自然石を利用した石錘、21・22は砥石である。

SD 02出土遺物（23～28）　23は古墳時代の土師器甕、24は弥生土器の甕、27は弥生時代終末期の壺である。25・26・28は須恵器で、25は坏蓋、26は壺、28は甕である。

(4)　Pit 出土遺物（Fig. 39）

29は SP50、30は SP65、31は SP90、32は SP12、33は SP88、34は SP22、35は SP25、36は SP134、37は SP96出土である。

29は弥生時代の高坏、又は壺口縁部片である。30～33は古墳時代の土師器で、30は二重口縁壺、31は長頸壺、32は器台である。33は高坏である。34・35は須恵器甕片、36は越州窯系青磁碗、37は中国製の白磁皿である。

(5)　包含層出土遺物（Fig. 40・41）

38～45は弥生土器で、38～41は甕、42は器台、43・44は壺、45は終末期の甕である。46～51は古墳時代の土師器で、46～50は高坏、51は器台である。52～60は須恵器で、52・53は古墳時代の坏身、54は坏蓋、56・57は坏、55・58は高坏で、59・60は甕である。61・62は土師器の甑の把手であるが、61の内面は細めの青海波状の当て具痕がある。63は移動式カマドの鍔にあたる。64は古代の土師器坏、65は中国製青磁皿、66は中国製白磁碗のⅣ類である。石器は67が磨石、68が扁平片刃石斧である。

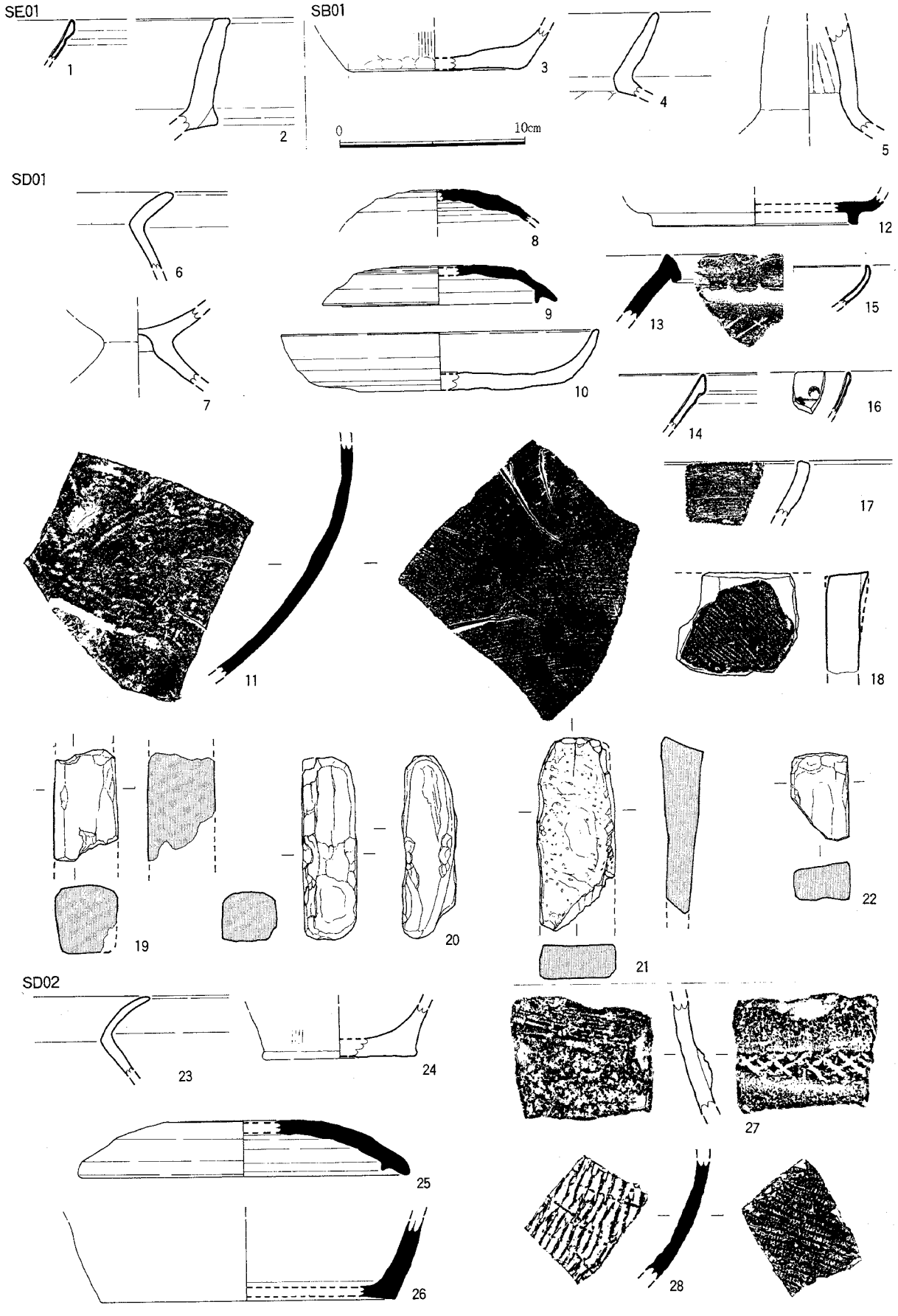
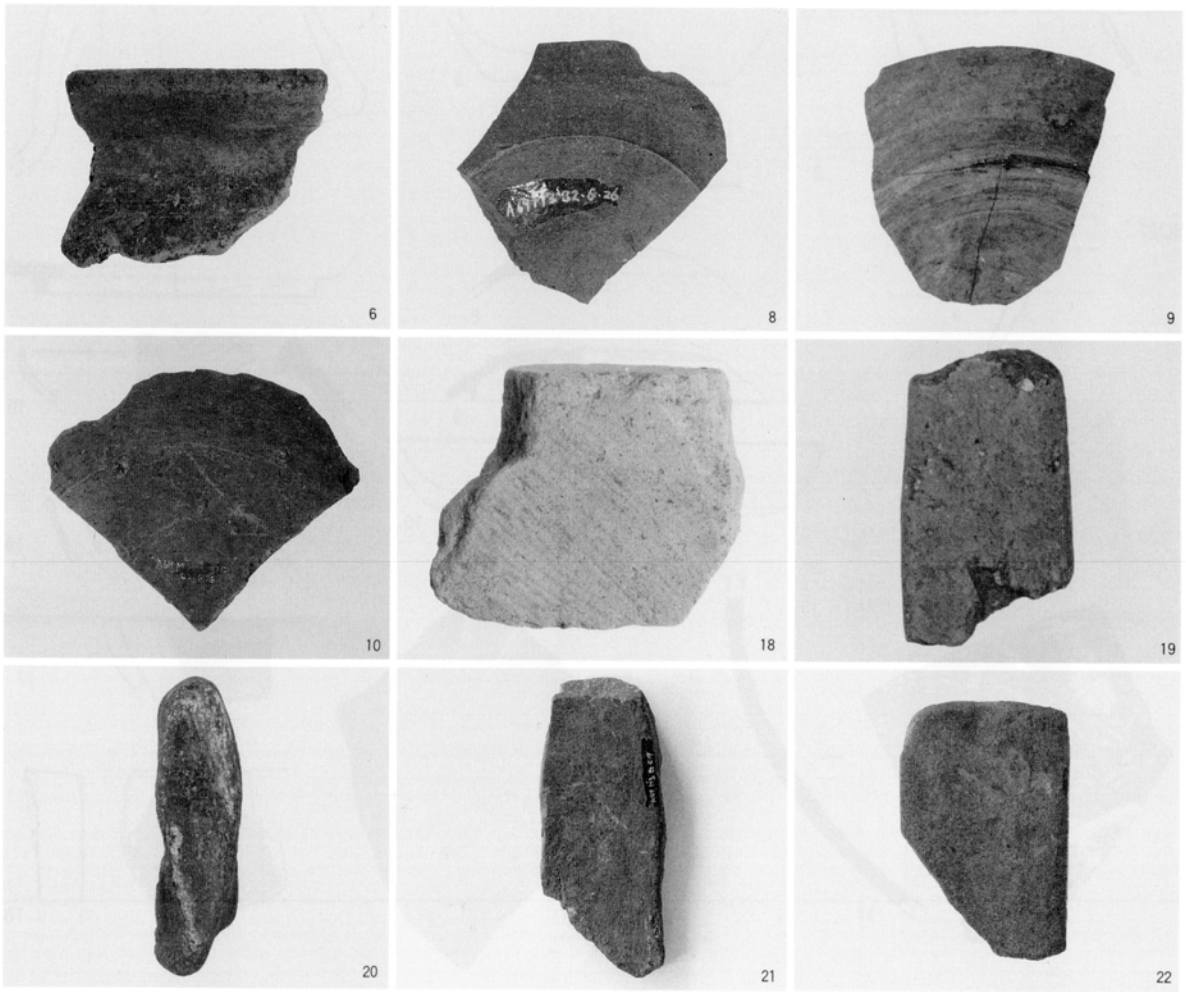


Fig. 38　各遺構出土遺物実測図（縮尺1/3）



溝 SD01出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する

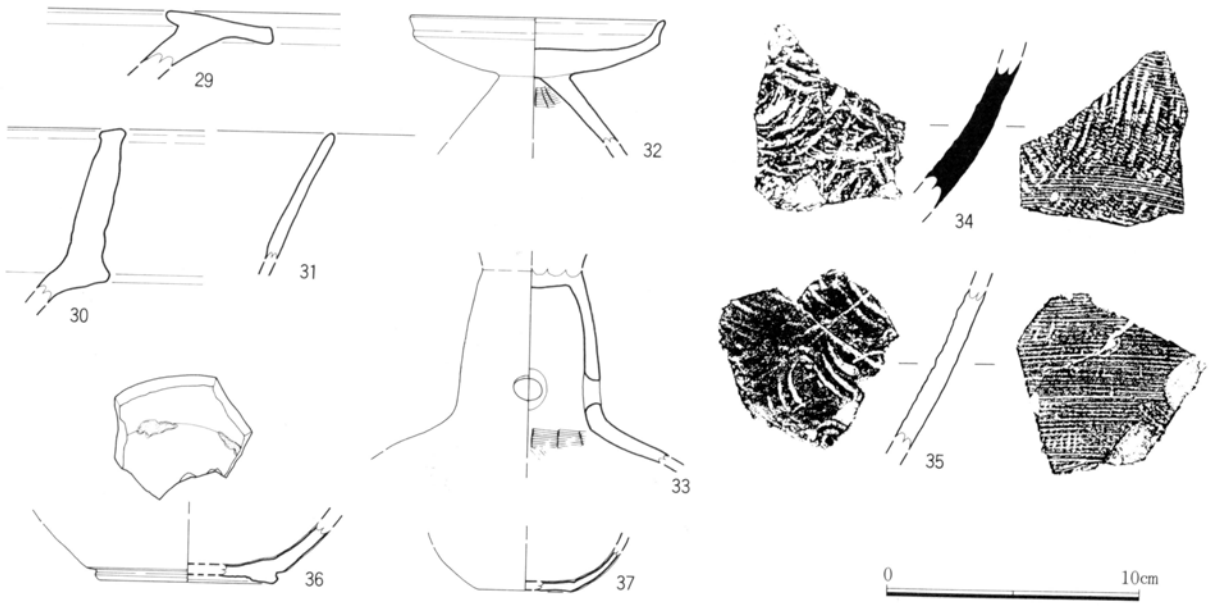


Fig. 39　Pit 出土遺物実測図（縮尺1/3）

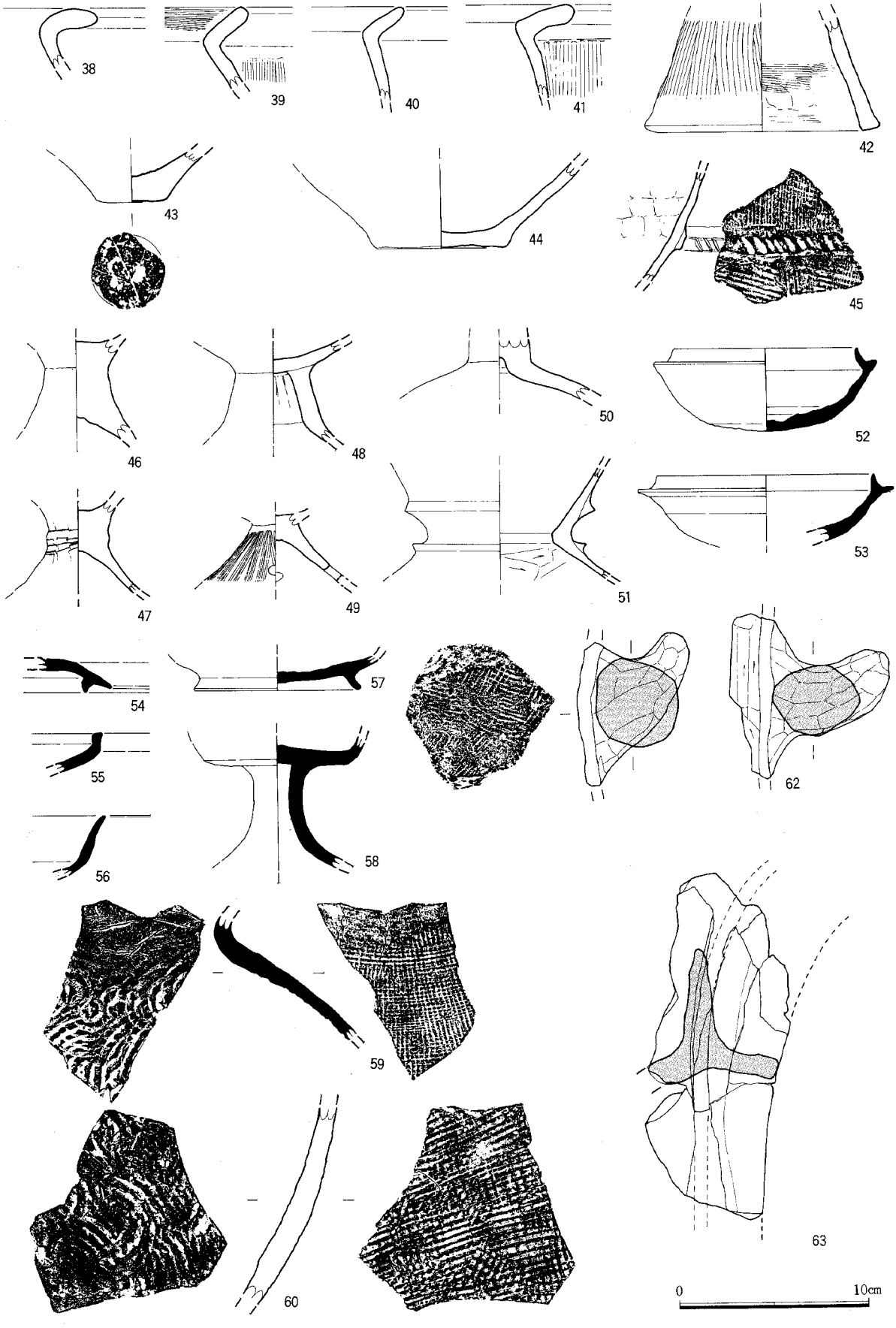


Fig. 40　包含層出土遺物実測図①（縮尺1/3）

(6) グリット出土遺物 (Fig. 42・43)

黒色粘質土の包含層（整地層）であることから遺構面の確認が困難であったため、土層観察のためにグリットを３ヶ所設定した。これらのグリットから出土した遺物である。

No. 1 グリット出土遺物 (69～97)　黒色粘質土の包含層は１～３層に大略分けられることができるため遺物を黒色土第①～③層に分けて取り揚げた。

黒色土第①層出土遺物には69～72が含まれる。69は８世紀中頃の須恵器坏、70は土師器ヘラ切り底の皿、71は須恵器坏、72は須恵器甕である。

黒色土第②層出土遺物には73～86が含まれる。73は弥生土器の甕、74～84は古墳時代の土師器である。81・82は二重口縁壺で、頸部外面にヘラ描き、又は貝殻腹縁の羽状文を施している。83・84は甕で、84の胴部外面にはヨコ方向のハケ調整がある。74は小型丸底壺、75は鉢、76は脚付鉢、77・78は鉢、又は椀、79は器台、80は高坏である。80の脚部には、径1.1cmの穿孔が３個あけられる。85は須恵器坏で、脚足は高い。86は玄武岩製石斧の未製品であるが表面は風化している。

黒色土第③層出土遺物には87～97が含まれる。87～94は古墳時代の土師器である。87・88は壺、89は高坏、90～92は甕で、胴部内面はヘラケズリ調整である。93は二重口縁壺、94は脚付の鉢である。95は須恵器の坏蓋で、外面天井部にヘラ記号を付けている。96は弥生時代終りの器台、97は弥生時代中期初めの甕である。

No. 2 グリット出土遺物 (98～100)　調査では黒色土上層出土として遺物を取り揚げたが、これらはグリット No. 1 の黒色土第①層に相当する層から出土したものと考えたい。

遺物は98～100を含み、99は８～９世紀代の須恵器坏、98は土師器脚付椀、100は古墳時代の土師器甕で、直立した口縁部は内弯している。

No. 3 グリット出土遺物 (101)　黒色土第③層から出土した。101は弥生時代中期の甕形土器である。

(7) 遺構面出土遺物 (Fig.44)

102～104は古墳時代の土師器で、102は器台、103は高坏、104は壺である。105～109・113は須恵器で、105は擬宝珠形のつまみをつけた蓋、106・107は坏身、108・109は坏で、113は甕である。109は赤焼け土器で、高台は底部と体部の境に貼付けている。110は黒色土器の椀、111は土師器の高台付椀、112は甑の把手である。114は背面に斜格子叩きをもった平瓦である。

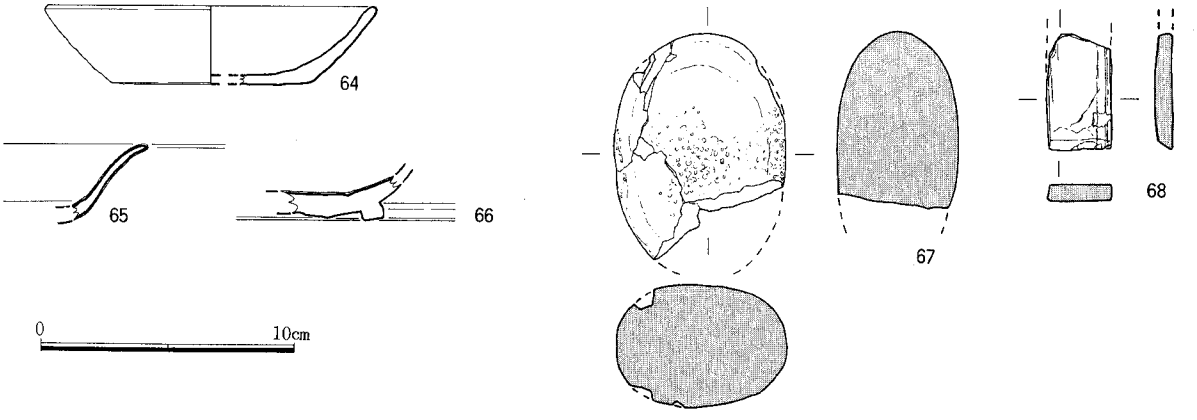
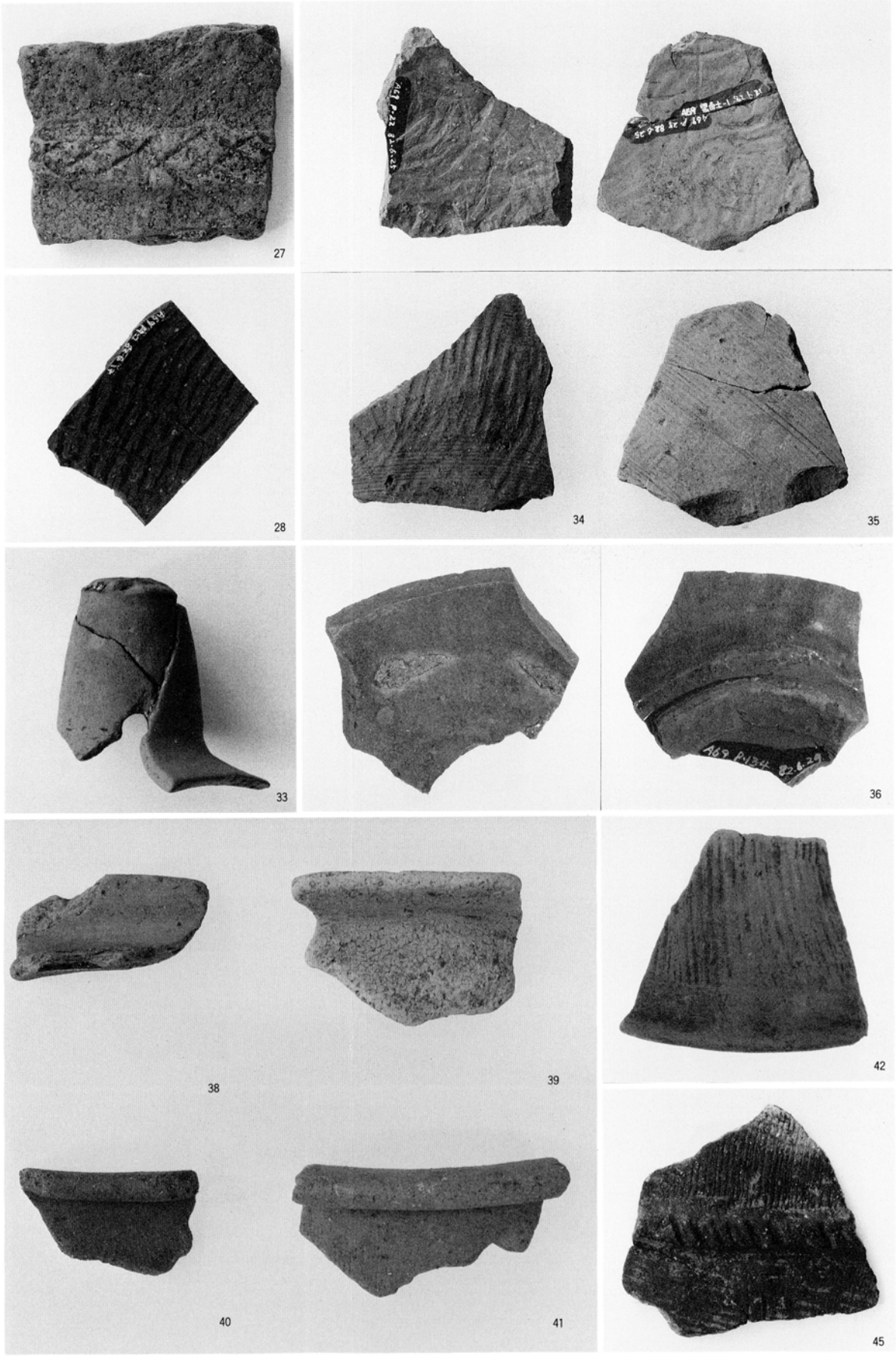
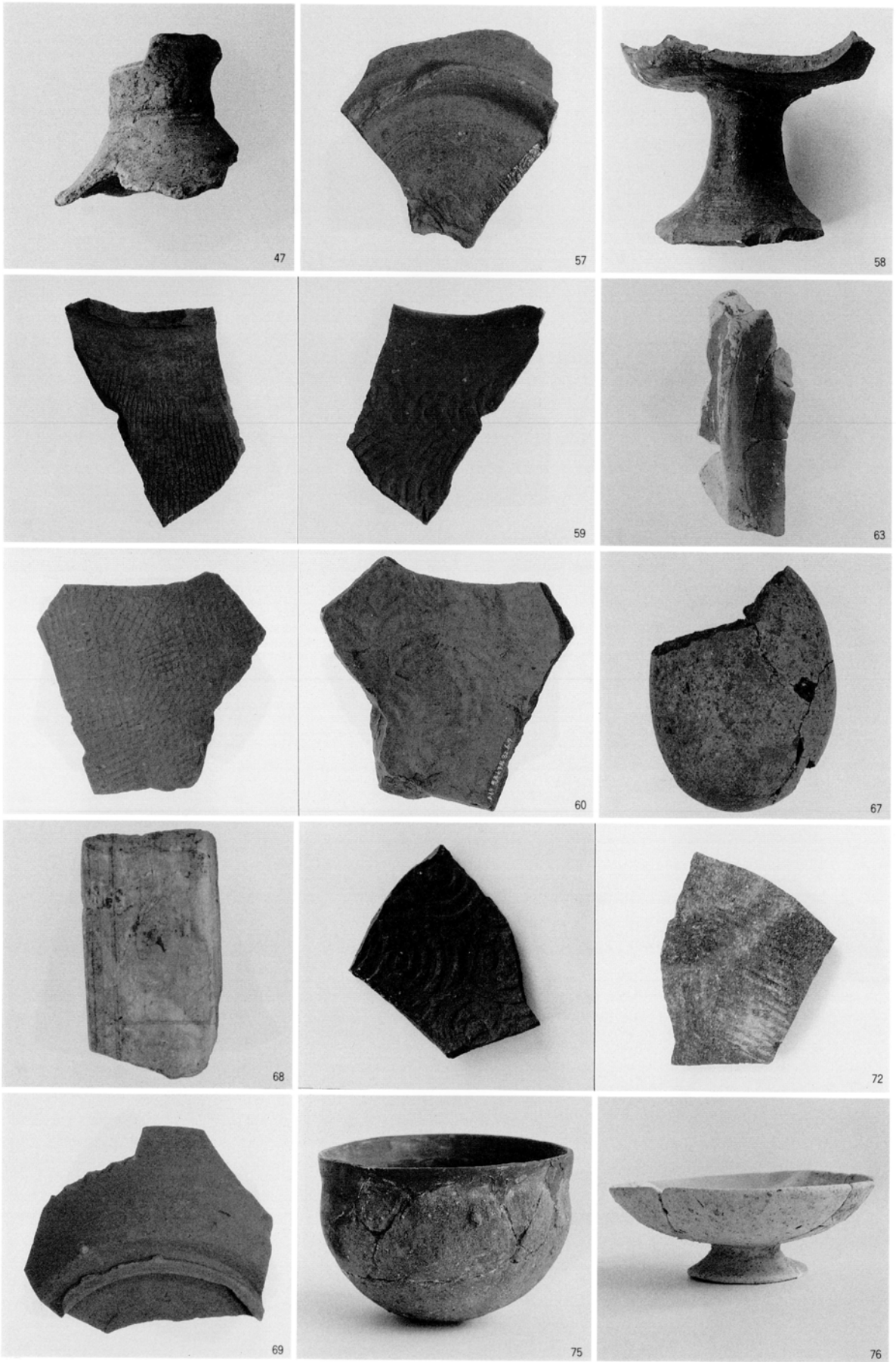


Fig. 41　包含層出土遺物実測図②（縮尺1/3）



溝 SD02、Pit. 包含層出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する



包含層、NO.1グリット出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する

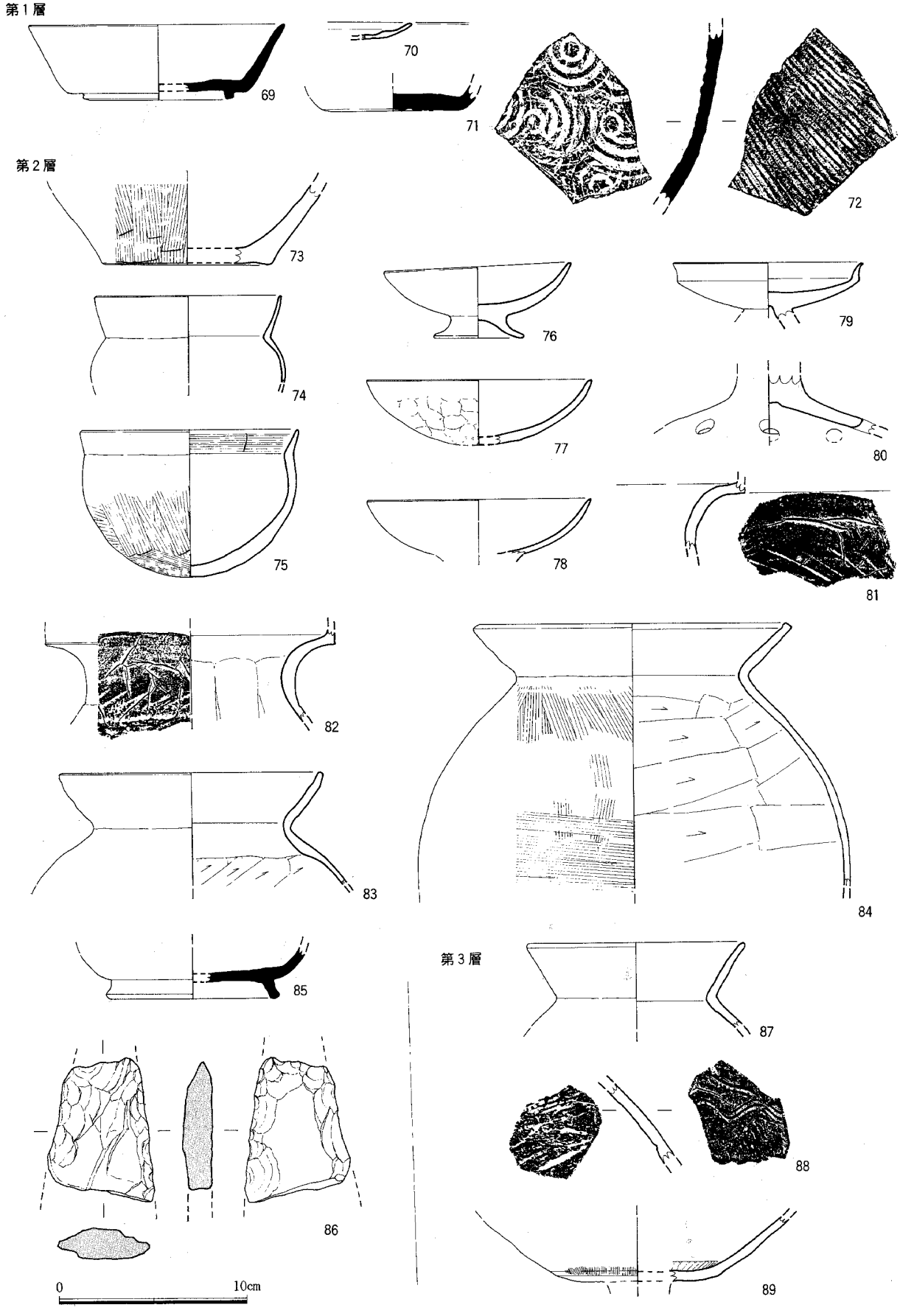
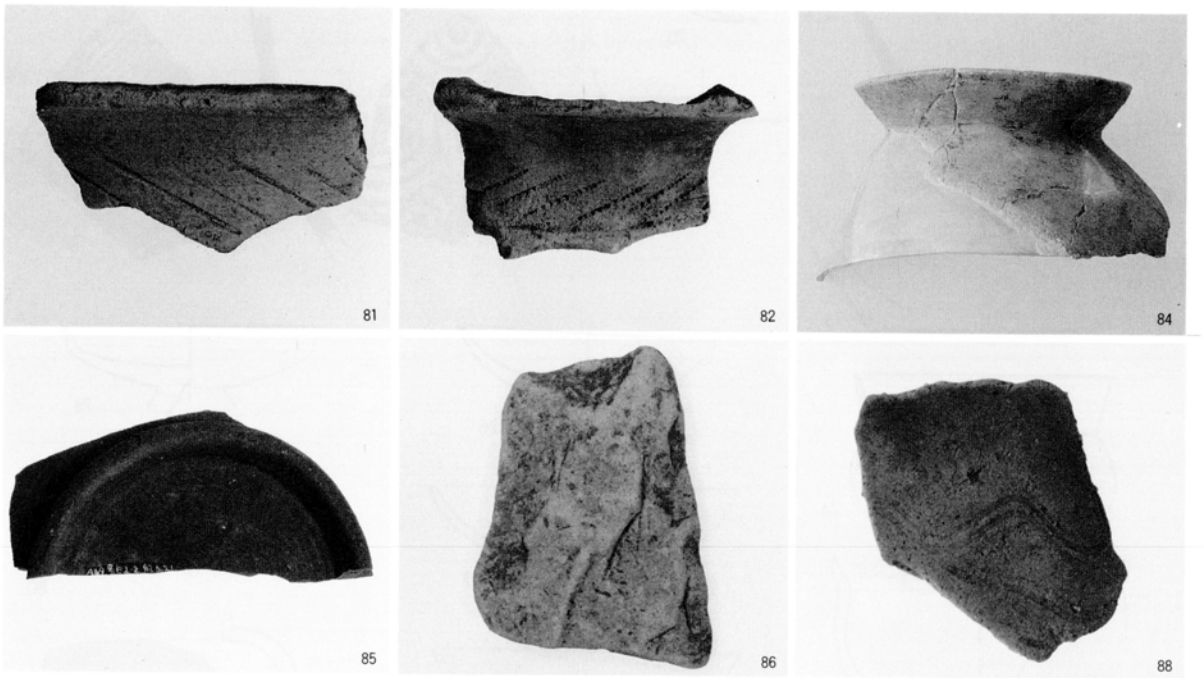


Fig. 42　No. 1グリット出土遺物実測図（縮尺1/3）



NO.1グリット出土遺物　　※数字は実測図の番号に一致する

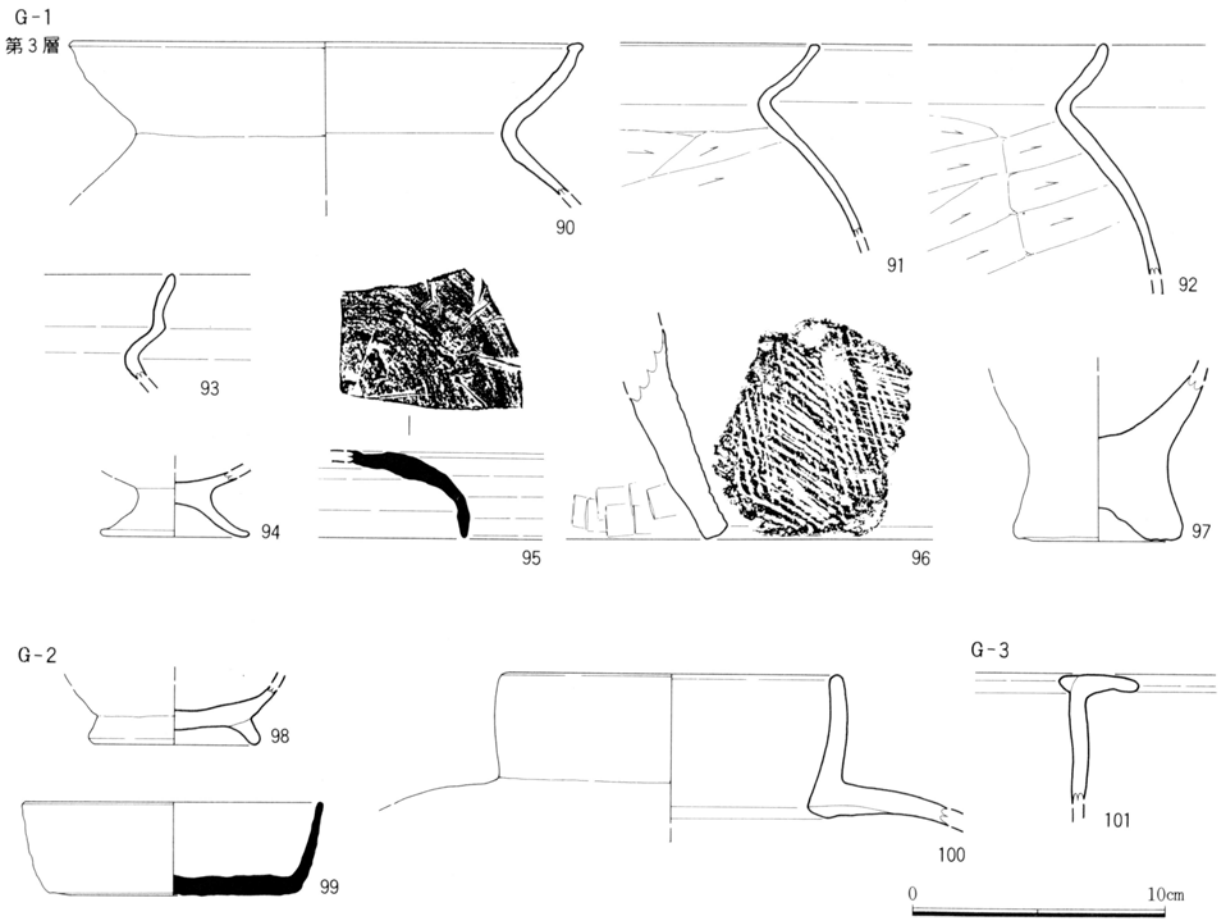


Fig. 43　No. 1 ～ 3グリット出土遺物実測図（縮尺1/3）

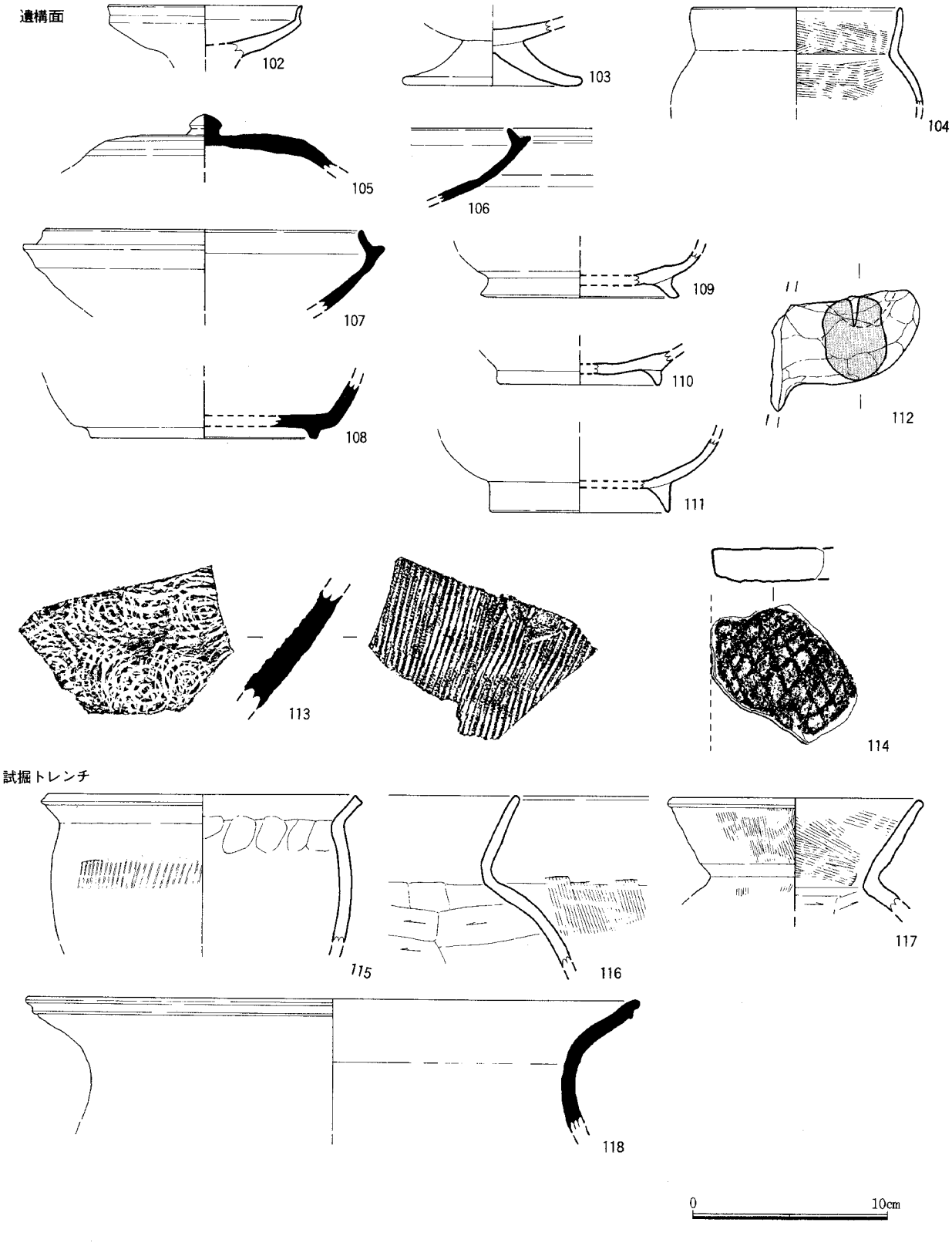
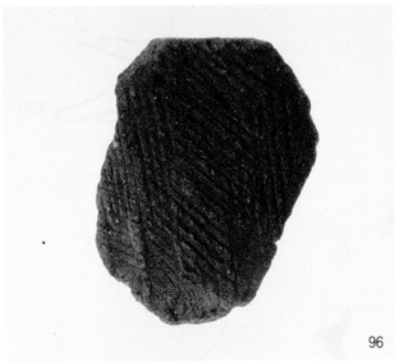
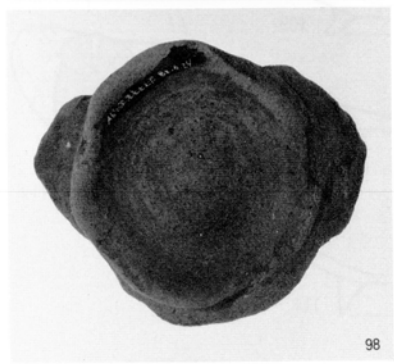


Fig. 44　遺構面出土遺物実測図（縮尺1/3）

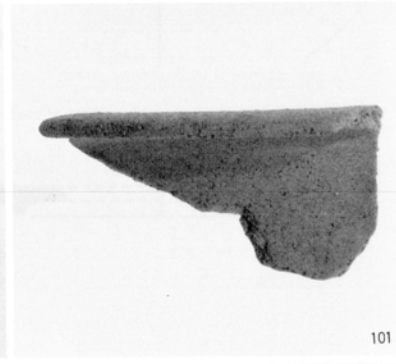
95


96

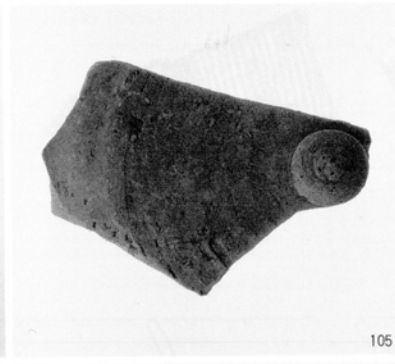
97

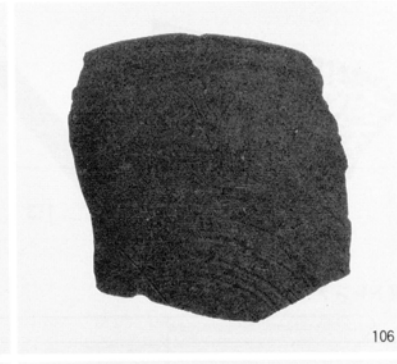

98

99


101

103

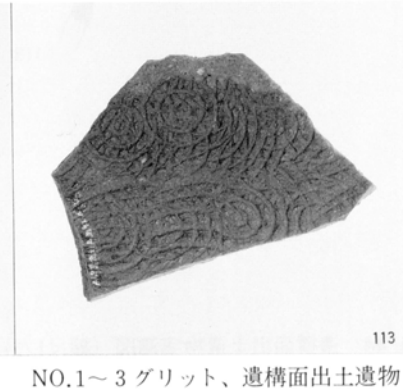

105


106

108

110

112


113

114

NO.1～3グリット、遺構面出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する

(8) 試掘調査出土遺物 (Fig.44)

115は弥生土器の甕、116・117は古墳時代の土師器の甕と壺、118は須恵器の口縁部で、古式の様相をもっている。

4．まとめ

今回の調査では、遺構面が2回に亘って形成されていることが判明した。又、当該地が台地の緩斜面に相当するため黒色土の整地層がみられた。又、当該地では湧水がみられるため基盤がシルト質の軟弱な地盤であることから、固く締った黒色土をもってして整地を行い、地盤の安定をはかったことが考えられる。第1面の黒色粘質土の上面では遺構を確認することは困難を極めており、上面での遺構の検出数は少ない。よって下層の第2面で検出した遺構群の内には第1面から掘り込まれていた遺構の存在も考えなければならない。第2面検出の井戸SE 01がその例である。又、黒色粘質土層内から出土した土器群を時代毎に分けると、弥生時代から平安時代までの土器を含んでおり、特に古墳時代の土師器がその量を占めている。これは台地上に古墳時代の住居跡が集中して存在していることから、これらの地域より土を搬入したためと考えられる。台地中央部の削平の著しさをみても肯首できる。須恵器坏の38・52・62・91、高坏の89が7世紀後半から8世紀後半代に比定される資料であることから黒色粘質土層の整地時期を8世紀後半以降と考えることもできる。又、上層から中国製の青磁や白磁が出土しているが、数量的には僅少であることから、これらは柱穴等に伴うものとして整地層形成以降の産物と考えられる。井戸SE 01は第2面からの検出ではあるが白磁碗を伴っており、11世紀以降の時期を考えたい。

以上により、第1面の遺構は8世紀後半から12世紀代までの時期範囲が考えられ、第2面の遺構は基盤のシルト層が軟弱であり、整地層の存在なしには掘立柱建物等の建築が不可能であることを考えれば、整地事業終了後間もない時期に作られたものと考えたい。

第1面、第2面を貫いているSD 01は、形状や規模からみて湧水、もしくは地下水の流路と考えた方が良いであろう。

Fig. 45　第8・21・69・156次遺構配置図（縮尺1/400）

Tab. 11　第69次調査遺構一覧表　　(単位：cm)

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形態		現存長	現存幅	深	出土遺物	時期	備考
			平面形	断面形						
SK01	D1	土壙	不整円形	逆梯形	120	85	22	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、鉄滓	中世	
SK02	D2	土壙	不整円形	逆梯形	210	175	13	弥生土器甕、土師器、須恵器坏		
SK03		土壙	隅丸長方形	逆梯形	100	75	25	なし		
SK04		土壙	不整隅丸長方形	逆梯形	67	85	91	なし		
SE01	1号井戸	井戸	不整円形	逆梯形	170	150	106	土師器椀・壺・甕、須恵器坏・甕、須恵器赤焼け甕、中国白磁碗、中国陶器、鉄滓		
SE02	2号井戸	井戸	不整円形	袋状	140	135	98	なし		
SD01	M1・3・4	溝状遺構		V字形	1150	最大150	最大98	弥生土器壺・甕、土師器皿・坏・古墳時代土師器高坏・椀・壺・甕・器台、土師質土器摺鉢・土鍋、須恵器坏・高坏・坏蓋・鉢・甕、瓦質土器鍋、中国白磁皿・碗・小碗、中国陶器、国産青磁碗・皿、国産陶器摺鉢、染付碗、平瓦、土製品、鉄釘、鉄滓、石鍋・砥石・石錘、滑石、黒曜石	中世	当初は溝M1・M3・M4に分けていた。
SD02	M2	溝状遺構		逆梯形	250	120	90	弥生土器甕・壺、土師器皿・古墳時代土師器甕、須恵器坏・高坏・坏蓋・壺・甕、瓦器椀、中国白磁、鉄滓	中世	
SP12		柱穴	不整円形	逆梯形	40	35	3	土師器甕・器台		
SP22		柱穴	円形	逆梯形	23	23	10	土師器、須恵器甕		
SP25		柱穴	楕円形	逆梯形	30	27	15	弥生土器、土師器、須恵器甕		
SP50		柱穴	不整円形	逆梯形	22	18	14	弥生土器高坏		
SP65		柱穴	楕円形	逆梯形	25	20	12	土師器壺		
SP88		柱穴	不整円形	逆梯形	28	28	16	土師器高坏		
SP90		柱穴	円形	逆梯形	33	33	19	土師器小型丸底壺		
SP96		柱穴	楕円形	逆梯形	26	24	26	弥生土器、土師器、中国白磁皿		

Tab. 12　第69次調査遺物一覧表　　（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種　類	器　種	口径	底径（高台径）	器高（現存高）	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
38	1	SE 01	白磁	碗	－	－	(2.2)	薄い玉縁口縁を形成	素地は白灰色。焼成良好。透明釉、白灰色。	大宰府Ⅱ類
38	2	SE 01	土師器	壺	－	－	(6.1)	二重口縁壺。折り返し部分は強く張り出す。内外面ヨコナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色～褐色。	
38	3	SB 01-5	弥生土器	壺？	－	9.2	(2.2)	平底。体部は開く。外面にタテハケ後ナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
38	4	SB 01-5	土師器	甕	－	－	(4.5)	口縁部は内弯する。胴部内面はヘラケズリ。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡褐色。	5C
38	5	SB 01-1	土師器	高坏	－	－	(5.9)	脚部・裾部を欠く。内面はヨコ方向のケズリ、外面はハケ後ナデ調整。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
38	6	SD 01	弥生土器？	甕	－	－	(4.2)	外反した口縁部は肥厚。内外面はヨコナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を含む。焼成良好。褐色。	弥生時代終末
38	7	SD 01	土師器	高坏	－	－	(4.2)	坏部・裾部を欠く。脚を大きく開き、坏部との接合部に大きな段をもつ。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。明茶褐色。	
38	8	SD 01	須恵器	坏蓋	－	－	(1.9)	口縁部を欠く。天井部は丸みをもち、左回りのヘラケズリ。	胎土には砂を殆ど含まない。焼成良好。青灰色。	
38	9	SD 01	須恵器	坏蓋	－	－	2.1	天井部は平坦で、右回りのヘラケズリ。口縁部内側のかえしは直立する。	胎土には砂を殆ど含まない。焼成やや軟。青灰色。	
38	10	SD 01	須恵器赤焼け	Ⅲ	17.4	8.6	3.2	外面のヘラケズリは、体部上位まで行う。	胎土に1～4㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
38	11	SD 01	須恵器	甕	－	－	(12.4)	外面は下位がヨコ、上位がナナメ方向のカキ目。内面は青海波文の当具痕。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成良好。灰褐色。	
38	12	SD 01	須恵器	Ⅲ	－	(11.2)	(1.6)	高台は高く、内外面はヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。青灰色。	
38	13	SD 01	須恵器	甕	－	－	(3.4)	口縁部外面を肥厚させ、平坦面を形成する。内面は若干、内弯させる。外面にヘラ描き文がある。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	
38	14	SD 01	白磁	碗	－	－	(3.0)	薄い玉縁口縁部。釉は厚め。	素地は白灰色。焼成良好。透明釉、白灰色。	大宰府Ⅳ類
38	15	SD 01	青磁	碗	－	－	(2.1)	口縁部を内弯させる。	素地は灰色。焼成良好。わずかに緑を帯びた透明釉、淡緑灰色。	
38	16	SD 01	染付	碗	－	－	(2.2)	口縁部外面を若干、肥厚させる。内面に呉須で雲文を施す。	素地は白灰色。焼成良好。透明釉、白灰色。	中国明
38	17	SD 01	土師質土器	捏鉢	－	－	(3.0)	口縁部を若干、内弯させる。内面はヨコハケ調整、外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。赤褐色～黒褐色。	
38	19	SD 01	土製品	－	－	－	－	形状は方柱状。現存長6㎝。現存幅3.5㎝。高さ3.7㎝。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。淡褐色。	製鉄遺物
38	23	SD 02	土師器	甕	－	－	(4.3)	口縁部は強く外反する。内外面はヨコナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。淡茶褐色。	内外面磨滅
38	24	SD 02	弥生土器	甕	－	8.2	(2.8)	平底。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は淡褐色。	
38	25	SD 02	須恵器	坏蓋	－	－	(3.0)	天井部は丸みをもち、外面の2/3まで右回りのヘラケズリ調整。口縁部内面のかえしは小さい。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成やや不良。外面は淡灰茶色、内面は灰色。	生焼け
38	26	SD 02	須恵器	壺	－	16.2	(4.4)	上げ底。内外面はヨコナデ調整。	胎土には砂を殆ど含まない。焼成良好。灰色。	
38	27	SD 02	弥生土器	壺	－	－	(6.3)	頸部の破片で、外面に扁平な貼付突帯。突帯上に斜格子目文。内面はヨコハケ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成やや不良。淡茶褐色。	弥生時代終末
38	28	SD 02	須恵器	甕	－	－	(6.4)	外面は格子目叩き、内面は平行叩き。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。暗灰色。	
39	29	SP 50	弥生土器	高坏 or 壺	－	－	(2.2)	坏部。鋤形口縁部。内外面はヨコナデ調整。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
39	30	SP 65	土師器	壺	－	－	(7.0)	二重口縁壺。屈接部に突帯状の強い段。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
39	31	SP 90	土師器	壺	－	－	(5.2)	長頸壺。薄手で、外反する口縁部。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成やや軟。茶褐色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
39	32	SP 12	土師器	器台	10.2	−	(4.9)	脚裾部を欠く。口縁部はわずかに外反する。脚内面は櫛目状の調整痕がある。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成やや軟。明茶褐色。	
39	33	SP 88	土師器	高坏	−	−	(7.6)	脚部片。坏部・裾部を欠く。筒部はふくらみをもつ。裾部内面はヨコハケ調整。裾部との境に径1㎝の穿孔が2ヶ所ある。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成やや軟。茶褐色。	
39	34	SP 22	須恵器	甕	−	−	(6.0)	外面は平行叩き後、ヨコナデ調整。内面は青海波の当具痕。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。外面は茶灰色、内面は青灰色。	
39	35	SP 25	須恵器	甕	−	−	(6.5)	外面はヨコ方向のカキ目。内面は青海波叩き痕。	胎土は精緻。焼成良好。茶褐色。	赤焼け土器
39	36	SP 134	青磁	碗	−	(7.0)	(2.5)	蛇ノ目高台で、釉は体部下位まで施す。高台・底部外面は露胎である。	素地は灰色で精緻。焼成良好。緑色を帯びた透明釉、緑灰色。	越州窯系青磁
39	37	SP 96	白磁	皿	−	−	(1.9)	体部は丸みをもつ。体部外面まで施釉し、底部外面は露胎である。	素地は白灰色で精緻。焼成良好。透明釉、白灰色。	
40	38	黒色土①層	弥生土器	甕	−	−	(3.2)	くの字形口縁部で、屈折が強い。端部が肥厚する。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。明茶色。	
40	39	黒色土①層	弥生土器	甕	−	−	(4.3)	くの字形口縁部で、体部はタテハケ調整。口縁部内面はヨコハケ調整である。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。茶褐色。	
40	40	黒色土③層	弥生土器	甕	−	−	(5.1)	くの字形口縁部で、端部が若干内湾する。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成やや不良。明茶褐色。	
40	41	黒色土③層	弥生土器	甕	−	−	(4.9)	くの字形口縁部で、内面に強い稜をもつ。端部を肥厚させる。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。明茶褐色。	
40	42	黒色土③層	弥生土器	器台	−	−	(5.9)	脚部片。外面はタテハケ調整、内面上位はヨコハケ調整。端部の内外面はヨコハケ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。明茶褐色。	
40	43	黒色土③層	弥生土器	壺	−	3.6	(2.6)	平底で外面に木の葉圧痕がある。内外面はナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。外面は淡茶色～黒灰色、内面は淡茶色	
40	44	黒色土③層	弥生土器	壺	−	7.0	(4.5)	平底。体部の立上がりは外弯する。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成やや不良。明茶褐色。	
40	45	黒色土③層	弥生土器	甕	−	−	(5.6)	体部外面にコの字形突帯を貼付。突帯に刻目あり。外面上位は平行叩き、下位は叩きの後タテハケ調整を施す。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。外面は黒灰色、内面は淡茶褐色。	弥生時代終末
40	46	黒色土	土師器	高坏	−	−	(5.0)	脚部片。裾部を欠く。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。茶褐色。	内外面磨滅
40	47	黒色土②層	土師器	高坏	−	−	(5.0)	脚部片。裾部を欠く。筒部は短く外面に叩きを施すまでの段を形成する。裾部は開く。筒部外面にヘラ痕がある。外面はナデ調整。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成良好。淡褐色。	内外面磨滅
40	48	黒色土①層	土師器	高坏	−	−	(5.4)	坏部を欠く。筒部は中空で、裾部との境は両面に段をもつ。内外面の調整不明。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成不良。茶褐色。	磨滅
40	49	黒色土①層	土師器	高坏	−	−	(3.9)	坏部を欠く。脚はラッパ状に開く。外面はタテハケ後ナデ調整、内面はナデ調整。径1.1㎝の穿孔が3ヶ所ある。	胎土は精緻。焼成は堅緻。茶褐色。	
40	50	黒色土①層	土師器	高坏	−	−	(3.2)	坏部を欠く。筒部は短い。裾部は大きく開く。	胎土は精緻。焼成やや不良。淡茶褐色。	
40	51	黒色土③層	土師器	鼓形器台	−	−	(5.9)	頸部の内面は強い稜がある。受部と脚部外面に突帯貼付。脚部内面はヘラケズリ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。褐色。	
40	52	黒色土①層	須恵器	坏身	9.8	−	(4.4)	蓋受は短く、口縁部の立上がりは長く内傾する。体部外面の1/3は左回りのヘラケズリを施す。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。黒褐色。	
40	53	黒色土③層	須恵器	坏身	11.6	−	(3.6)	蓋受を長くつまみ出す。口縁部は直立し、短い。体部外面の1/3にヘラケズリを施す。	胎土は精緻。焼成良好。青灰色。	
40	54	黒色土①層	須恵器	坏蓋	−	−	(1.9)	天井部は平坦で、口縁部内側のかえしは直立する。天井部外面は右回りのヘラケズリ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成やや不良。淡灰茶色。	
40	55	黒色土①層	須恵器	高坏	−	−	(1.7)	坏部片で、口縁部は直立気味に屈折し、端部は平坦である。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成やや軟。灰色。	
40	56	黒色土①層	須恵器	坏	−	−	(3.2)	体部は丸みをもち、口縁部は外弯する。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成やや軟。外面は灰色、内面は青灰色。	
40	57	黒色土①層	須恵器	坏	−	(8.8)	(1.8)	体部を欠く。脚は細く、外へ強く張る。	胎土は精緻。焼成良好。暗青灰色。	
40	58	黒色土①層	須恵器	高坏	−	−	(7.1)	坏部と裾部を欠く。坏部の底は平坦である。筒部から裾部は大きく外反する。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。黒灰色。	
40	59	黒色土①層	須恵器	甕	−	−	(6.6)	外面は平行叩きの後ヨコ方向のカキ目。内面は同心円の当具痕。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。外面は灰色、内面は暗青灰色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
40	60	黒色土③層	須恵器	甕	−	−	(10.5)	外面は格子目叩き。内面は同心円の当具痕。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	赤焼け土器。生焼けか
40	61	黒色土②層	土師器	甑	−	−	−	把手部分で、断面形は略隅丸方形状を呈する。甕内面に細めの青海波の当て具がある。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成やや不良。明茶褐色。	
40	62	黒色土②層	土師器	甑	−	−	−	把手部分で断面形は略隅丸の菱形を呈する。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。褐色。	
40	63	黒色土①層	土師器	竈	−	−	−	鍔の部分で、幅6.4㎝を測る。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成やや軟。明茶褐色～褐色。	
41	64	黒色土③層	土師器	坏	13.0	8.0	3.1	強く開く体部は若干丸みをもつ。底部は糸切りである。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成やや軟。明茶褐色。	
41	65	黒色土①層	青磁	皿	−	−	(3.1)	体部は強く外弯する。全体に厚めに施釉する。	素地は灰茶色。焼成良好。緑色を帯びた透明釉、緑灰色。	龍泉窯系
41	66	黒色土①層	白磁	碗	−	−	(1.8)	内面見込に沈線を施す。釉は内面に厚めである。高台は断面コの字形。	素地は乳白色で精緻。焼成良好。小さな気泡がみられる白の半透明釉、白灰色。	大宰府Ⅳ類
42	69	No.1グリット黒色土②層	須恵器	坏	14.0	6.4	4.05	断面コの字形の高台。体部は直線的に外反。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	8C中頃
42	70	No.1グリット①層	土師器	皿	−	−	(0.9)	ヘラ切り底。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成不良。白茶色。	内外面磨滅
42	71	No.1グリット①層	須恵器	坏	−	7.0	(1.4)	ヘラケズリの平底。内外面はヨコナデ調整。	胎土に砂を殆ど含まない。焼成良好。青灰色。	
42	72	No.1グリット①層	須恵器	甕	−	−	(9.3)	外面は平行叩き、内面は同心円の当具痕。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成良好。濃灰色。	
42	73	No.1グリット黒色土②層	弥生土器	甕	−	9.4	(4.4)	平底。立上がりは直線的。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
42	74	No.1グリット黒色土②層	土師器	小型丸底壺	10.2	−	(4.7)	口縁部は内弯する。体部は球体で口縁部との境は内面に強い稜をもつ。	胎土は精緻。焼成やや不良。明茶褐色。	内外面磨滅
42	75	No.1グリット黒色土②層	土師器	鉢	12.0	−	8.0	口縁部は短く、小さく外反する。内面はヨコハケ調整、体部内面はナデ調整、外面はハケ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は黒色。	
42	76	No.1グリット黒色土②層	土師器	脚付鉢	10.2	5.0	3.9	体部は半球体に近い。大きく開く脚が付く。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。白茶色。	内外面磨滅
42	77	No.1グリット黒色土②層	土師器	鉢	12.2	−	(3.5)	丸底で半球体に近い。外面下位は指頭圧痕とケズリ調整。口縁部外面と内外面はナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。茶褐色。	
42	78	No.1グリット黒色土②層	土師器	鉢or椀	12.2	−	(2.9)	底部を欠く。薄手で、体部は半球体に近い。内外面はナデ調整。	胎土は精緻。焼成やや不良。茶褐色。	
42	79	No.1グリット黒色土②層	土師器	器台	10.3	−	(3.0)	脚部を欠く。口縁部は外弯する。ヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。茶褐色。	磨滅
42	80	No.1グリット黒色土②層	土師器	高坏	−	−	(3.2)	脚部で、裾部を欠く。筒部は短く、空洞ではない。裾部は大きく開き、径1.1㎝の穿孔が3ヶ所ある。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成やや軟。茶褐色。	磨滅
42	81	No.1グリット黒色土②層	土師器	壺	−	−	(3.6)	外弯した口縁部の端部をわずかに内弯させる。内外面はヨコナデ調整。頸部外面にヘラによる斜行文がある。二重口縁壺。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	
42	82	No.1グリット黒色土②層	土師器	壺	15.8	−	(5.0)	口縁部を欠く。頸部との境に強い段をもち、頸部外面に貝殻腹縁による羽状文を施す。二重口縁壺	胎土は精緻。焼成良好。淡褐色。	
42	83	No.1グリット黒色土②層	土師器	甕	16.8	−	(14.3)	口縁部はわずかに内弯、端部を肥厚させる。内面はヘラケズリ、外面はタテハケ後、中位はヨコナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡褐色。	
42	84	No.1グリット黒色土②層	土師器	甕	14.0	−	(6.1)	外反した口縁部は強く内弯する。体部は球形で、内面はヘラケズリ。胴部外面ハケ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。淡茶色。	
42	85	No.1グリット黒色土②層	須恵器	坏	−	(9.0)	(2.8)	外に開く。高い高台が付き、内外面はヨコナデ調整。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成良好。黒灰色。	
42	87	No.1グリット黒色土③層	土師器	壺	11.8	−	(4.6)	口縁部は直線的に外反する。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。茶褐色～黒褐色。	
42	88	No.1グリット黒色土③層	土師器	壺	−	−	(3.9)	内面はヘラケズリ調整。外面にヘラ描き波状文がある。	胎土に1～5㎜の砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	布留式土器系
42	89	No.1グリット黒色土③層	土師器	高坏	−	−	(3.6)	坏部片である。底部は平底状を呈し、口縁部は強く外反する。内面にヘラ暗文、外面にハケ調整がある。	胎土は精緻。焼成良好。茶褐色。	
43	90	No.1グリット黒色土③層	土師器	甕	20.6	−	(6.0)	大きく開いた口縁部は内弯し、端部を平坦に形成。内外面はヨコナデ調整、胴部内面はヘラケズリ調整。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成良好。褐色～赤褐色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
43	91	No.1グリット黒色土③層	土師器	甕	－	－	(7.8)	開いた口縁部は内弯する。体部は丸みをもち、内面はヘラケズリ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成やや軟。白茶色。	内外面磨滅
43	92	No.1グリット黒色土③層	土師器	甕	－	－	(9.2)	開いた口縁部は内弯、体部は丸みをもつ。内面はヘラケズリ調整。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成やや不良。茶褐色。	
43	93	No.1グリット黒色土③層	土師器	壺	－	－	(4.2)	口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。頸部との接合部の段は弱い。頸部の屈折強い。二重口縁壺。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成不良。淡褐色。	
43	94	No.1グリット黒色土③層	土師器	台付鉢	－	6.0	(2.6)	鉢部を欠損。脚は外へ大きく開く。内外面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。淡茶色。	
43	95	No.1グリット黒色土③層	須恵器	坏蓋	－	－	(3.4)	天井部・体部は丸みをもつ。外面のヘラケズリは右回りで体部の1/2まで施す。	胎土に砂を含まない。焼成良好。灰色。	
43	96	No.1グリット黒色土③層	弥生土器	器台	－	－	(8.5)	外面は粗い平行叩き。内面は下位はケズリ状のナデを施す。	胎土に1～4㎜の砂を含む。焼成良好。茶褐色。	
43	97	No.1グリット黒色土③層	弥生土器	甕	－	6.8	(6.6)	上げ底。器壁が厚い。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。茶褐色。	内外面磨滅
43	98	No.2グリット黒色土①層	土師器	椀	－	(6.6)	(2.4)	坏部を欠く。脚は外へ強く張る。内面はナデ調整。	胎土に細かい砂を含む。焼成やや不良。外面は茶褐色、内面は黒褐色。	内外面磨滅
43	99	No.2グリット黒色土①層	須恵器	坏	12.0	10.0	(3.7)	ヘラ切りの平底。体部は直線的で、若干開く。	胎土に1～4㎜の砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	8～9C
43	100	No.2グリット黒色土①層	土師器	甕	13.0	－	(6.0)	直口気味の口縁部は内弯する。頸部内面に強い稜を有している。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。外面は淡茶褐色、内面は淡褐色。	
43	101	No.3グリット黒色土③層	弥生土器	甕	－	－	(5.2)	逆L字形の口縁部で、内面を突起状に肥厚させる。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。明茶褐色。	
44	102	黒色土①層	土師器	器台	10.0	－	(2.7)	脚部を欠く。口縁部は外弯気味に直立する。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成やや不良。茶褐色。	磨滅
44	103	黒色土(表土)	土師器	高坏	－	9.4	(3.4)	脚は大きく外弯する。坏部内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	磨滅
44	104	黒色土(表土)	土師器	壺	10.8	－	(5.1)	直立気味の口縁部は若干内弯する。体部は球形。内面はヨコハケ調整、外面はナデ調整。	胎土は1～3㎜の砂を少し含み、精緻。焼成良好。淡茶褐色。	
44	105	黒色土①層	須恵器	蓋	－	－	(2.8)	天井部は平坦で、左回りのヘラケズリを施す。擬宝珠形のつまみが付く。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成やや不良。灰色～灰茶色。	
44	106	黒色土①層	須恵器	坏身	－	－	(3.8)	蓋受け部は短い。口縁部の立上がりは短く、内傾する。外面下位は左回りのヘラケズリ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	
44	107	黒色土①層	須恵器	坏身	16.4	－	(4.2)	蓋受け部は短い。口縁部は内傾し、端部はやや尖る。内外面はヨコナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	
44	108	黒色土①層	須恵器	坏	－	(11.8)	(3.0)	断面形がコの字状の低い高台。体部は直線的に開く。ヨコナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成やや軟。外面は淡青灰色、内面は白灰色。	
44	109	黒色土①層	須恵器	坏	－	(10.4)	(2.5)	高台は外へ開く。体部は丸みをもつ。ヨコナデ調整。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成良好。小豆色。	赤焼け土器
44	110	黒色土①層	黒色土器(A)	椀	－	(8.4)	(1.8)	断面形が三角形の高台である。内外面の調整は不明。	胎土に砂を殆ど含まない。焼成やや軟。外面は明茶褐色、内面は黒灰色。	内外面磨滅
44	111	黒色土①層	土師器	椀	－	(9.2)	(3.9)	体部は丸みをもち、断面三角形の高台は細く、高い。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成良好。明茶褐色。	
44	112	黒色土①層	土師器	甑	－	－	－	把手部分。断面形は楕円形を呈し、上位に抉り込みがある。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成良好。明茶褐色。	
44	113	黒色土①層	須恵器	甕	－	－	(6.2)	外面は平行叩き、内面は同心円の当具痕。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。外面は淡緑灰色、内面は濃青灰色。	
44	115	試掘トレンチ	弥生土器	甕	16.0	－	(7.7)	口縁部はくの字形を呈し、端部は平坦である。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
44	116	試掘トレンチ	土師器	甕	－	－	(9.0)	体部は卵形を呈し、口縁部は直線的に開く。体部の外面はタテハケ調整、内面はヘラケズリ調整である。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成やや軟。外面は淡茶褐色、内面口縁部は赤褐色、体部は黒色。	
44	117	試掘トレンチ	土師器	壺	12.8	－	(5.9)	口縁部は直線的に開く。体部との境は内面に強い稜をもつ。内外面はハケ調整。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
44	118	試掘トレンチ	須恵器	壺	36.0	－	(6.7)	口縁部片で、大きく外反する。端部は丸みをもち、外面に小さな突帯がある。	胎土に1㎜前後の砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	

Tab. 13　第69次調査平瓦計測表　　(単位：cm)

挿図番号	遺物番号	出土遺構	長さ(現存長)	厚さ(現存厚)	幅		弧深	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
					前端部	後端部						
38	18	SD01	(6.7)	1.8	—	—	—	淡茶色	1～2㎜の砂を少し含む。	やや軟	背部と側面はナデ調整、谷部はナデ調整の後に粘土貼り付け。	旧遺構名M4
44	114	黒色土①層	(7.4)	1.8	—	—	—	灰白色	1～3㎜の砂を含む。	不良	谷部は布目痕が見られるが、磨滅のため不明瞭。背部は斜格子文の叩き痕。	

Tab. 14　第69次調査石製品一覧表　　(単位：cm)

挿図番号	遺物番号	出土遺構	器種	長(現存長)	幅(現存幅)	厚(現存厚)	重量(g)	石材	色調	特徴
38	20	SD01	石錘？	9.0	2.9	3.0	156	片岩か緑泥岩	灰緑色	長軸の中央に抉りを4ヶ所入れる。
38	21	SD01	砥石	10.6	4.3	1.9	—	硬質砂岩	暗灰色	A面・B面の2面を砥面として利用。両面と側辺に敲打痕がある。
38	22	SD01	砥石	4.8	3.1	2.1	—	砂岩	黒灰色	A・B面と両側面を砥面として利用。
41	67	No.1グリット黒色土①層	磨石	(9.0)	6.8	5.0	—	花崗岩	暗灰色	一部を欠損している。
41	68	No.1グリット黒色土①層	扁平片刃石斧	(4.7)	2.6	0.7	—	頁岩	灰白色	基部を欠損。刃部破損。刃は鈍角である。
42	86	No.1グリット黒色土②層	扁平石斧	(7.8)	5.8	1.7	—	玄武岩	淡茶灰色	未製品。風化が著しい。刃部を欠損している。

第６章　第73次調査 (調査番号8214)

１．地形と概要

(1)　立　地

当該地は福岡市早良区小田部１丁目189に所在し、発掘調査面積は62㎡である。

有田・小田部の台地は、北方向に開析が進み、台地は八ッ手状を呈しているが、当該地は舌状台地の西側縁辺に位置している。周辺では、遺跡の調査が多く実施されており、ローム層上面において遺構が発見されている。今回の発掘調査は専用住宅建設に伴うものであるが、調査対象地の面積が狭いため、残土は全て外へ運び出した。

(2)　概　要

当該地の旧地目は水田である。遺構面のローム層は深さ70～100㎝を測る。ローム層上面は南側へ傾斜しており、西南隅では大きな段落ちとなっている。しかし、段落ち部分において井戸 SE 01が存在することは、元来はこのローム層、及び段落ち部の上層に整地面があったものと考えられよう。土層状況は、調査区の東側においては６層が存在している。上層より第１層は耕作土、第２層は茶褐色粘質土、第３層は茶褐色粘質土で砂粒を多く含む、第４層は淡茶褐色粘質土、第５層は暗茶褐色粘質土である。南側の土層でみれば、西側が谷状に大きく段落ちになっており、東側と同じ高さまで盛が行われていることが判る。これは近年に谷水田の埋立てが行われたことを示している。

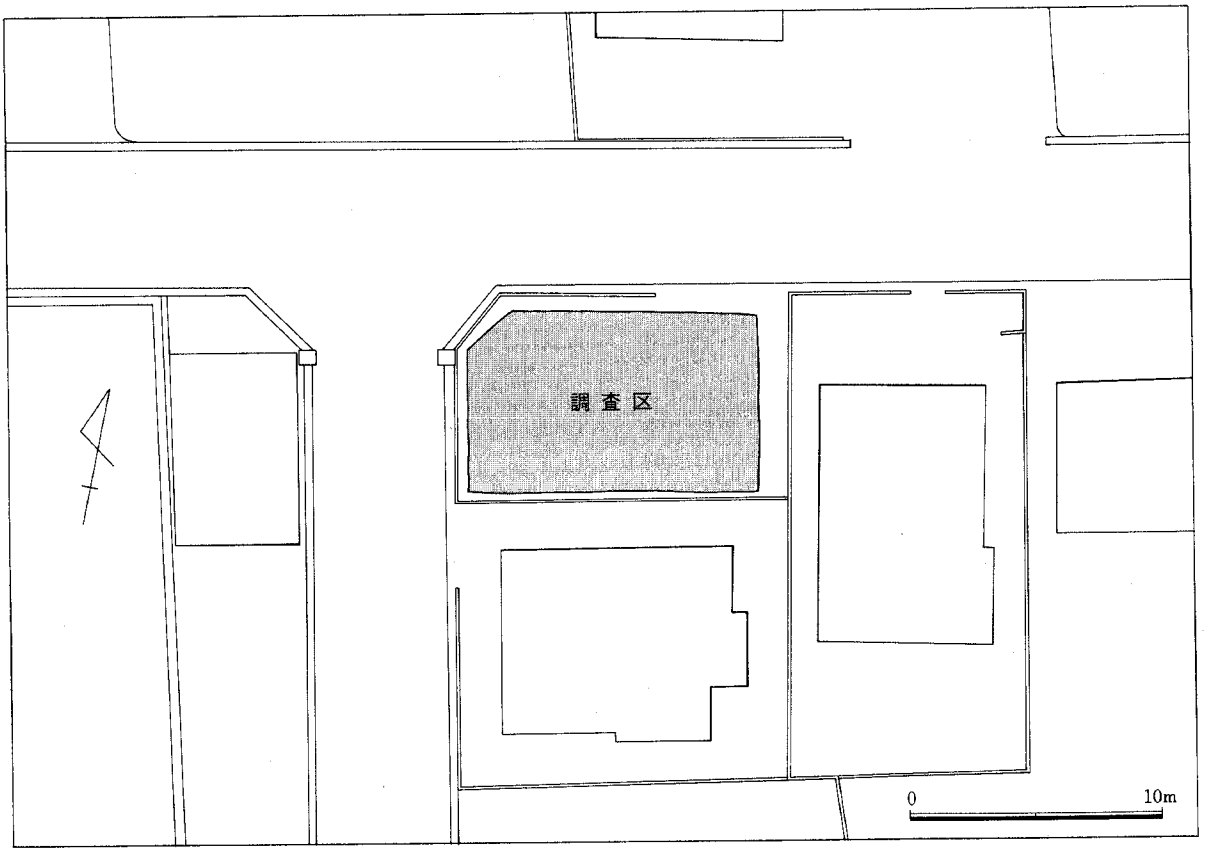
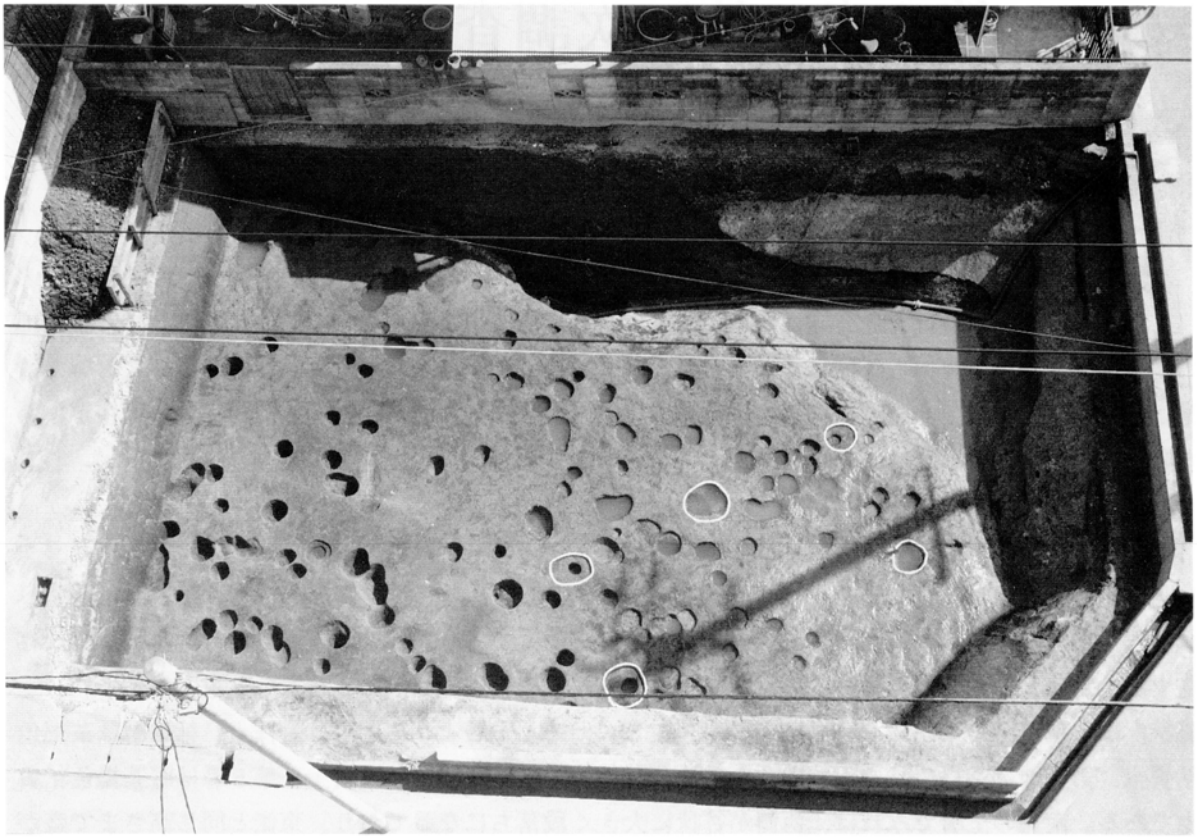
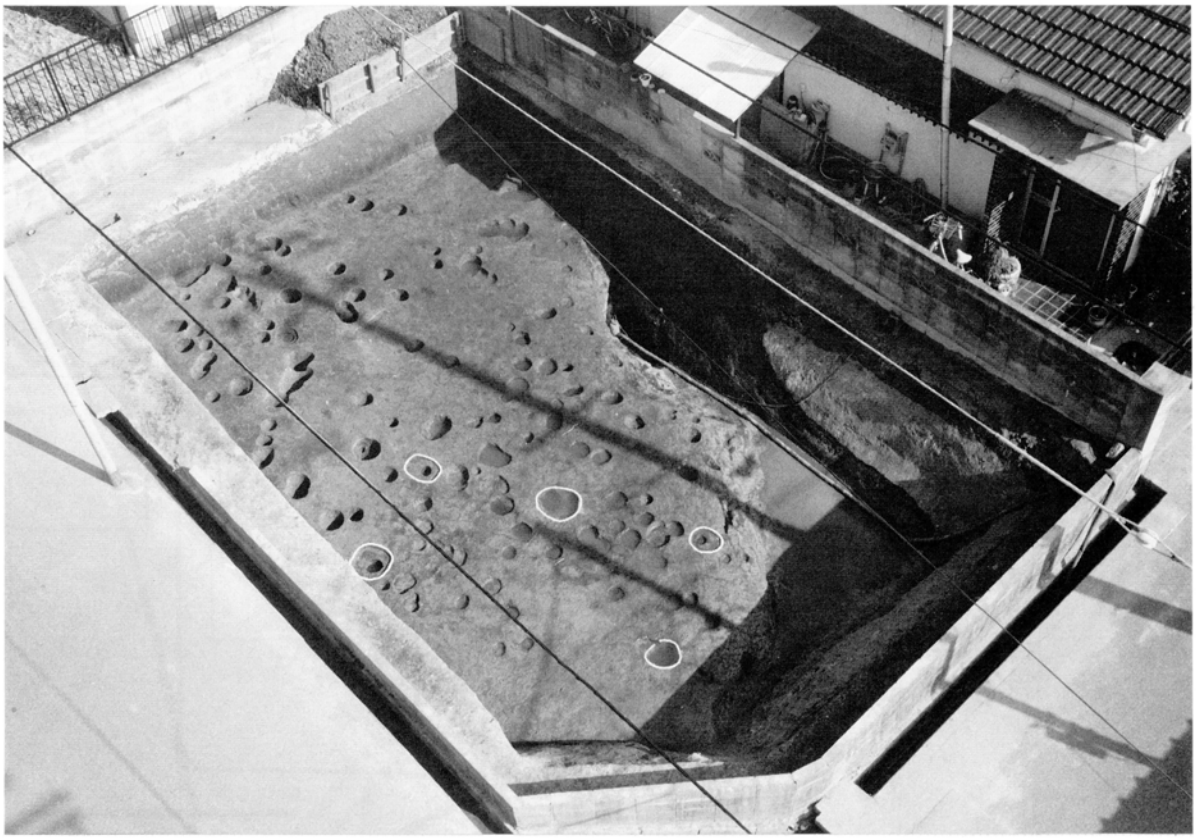


Fig. 46　第73次調査地点位置図（縮尺1/300）



第73次調査 全景（北から）



調査区全景（北西から）

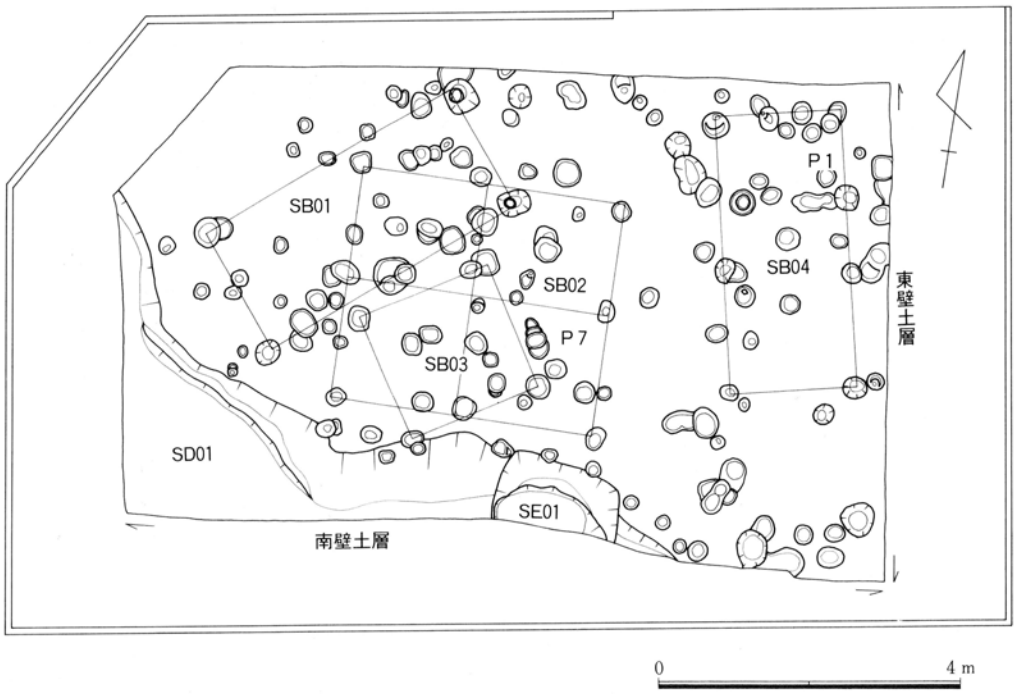
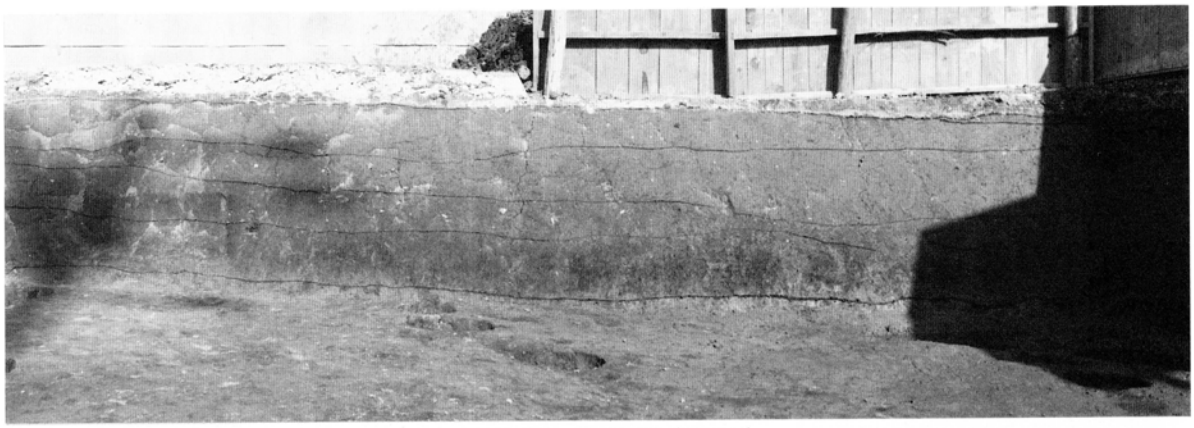
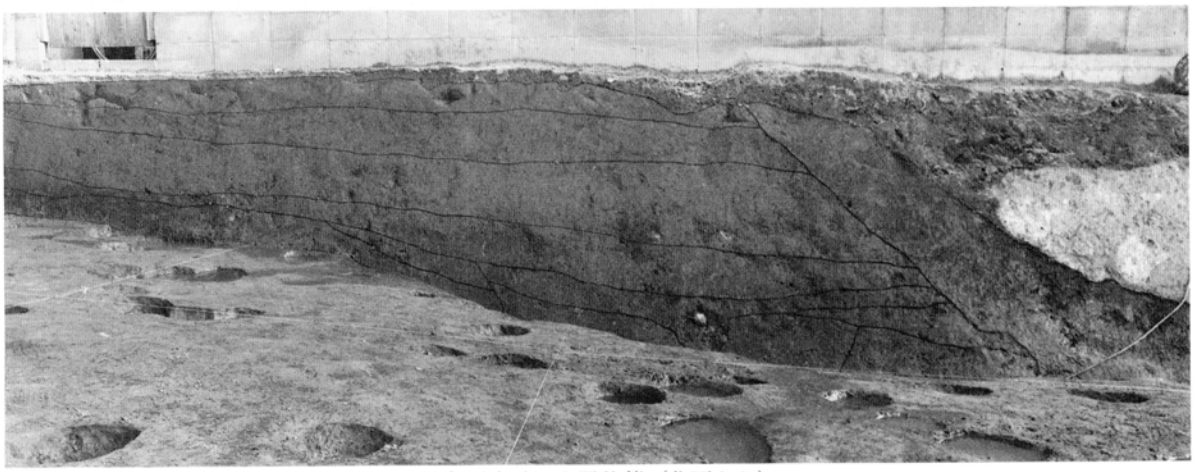


Fig. 47　第73次調査遺構配置図（縮尺1/100）



調査区東壁の土層状態（西から）



調査区南壁の土層状態（北西から）

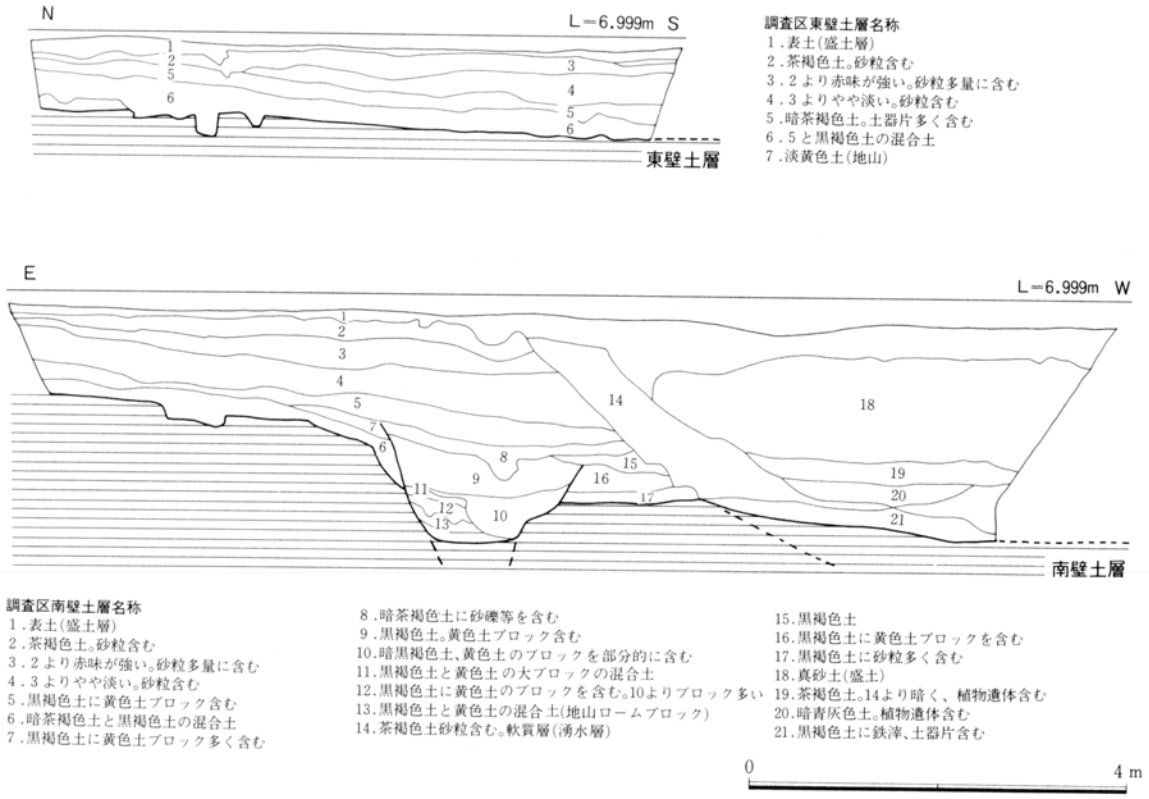


Fig. 48　第73次調査区周壁土層実測図（縮尺1/80）

井戸 SE 01　土層状態（北から）

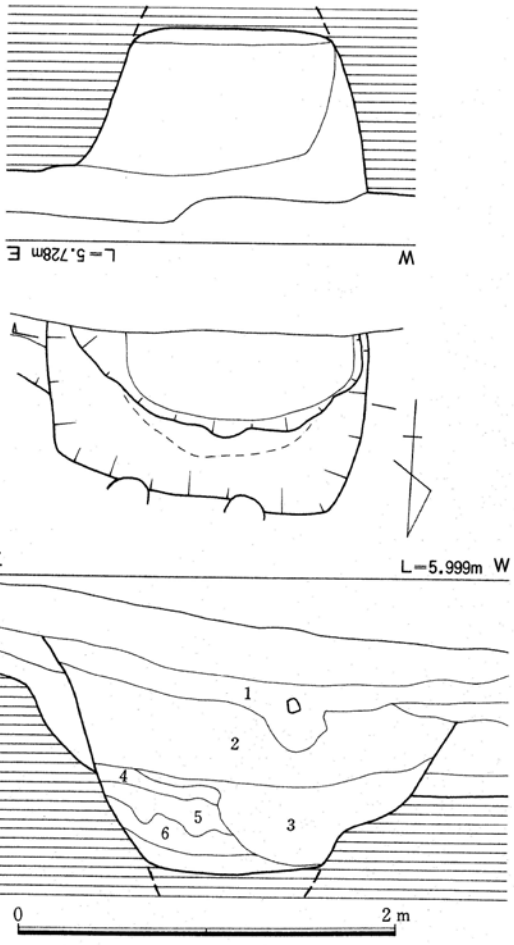
2．遺構説明

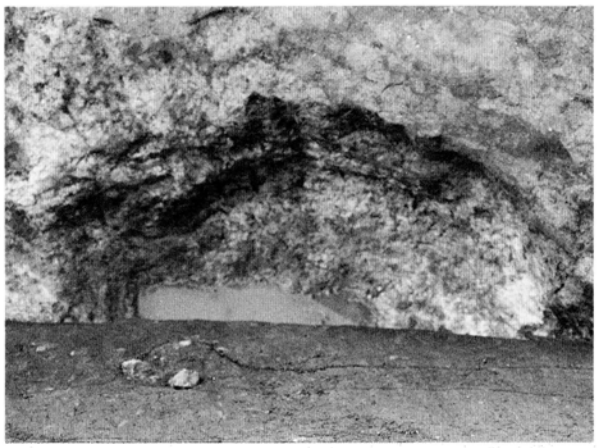
(1) 井戸 (SE)

SE01 (Fig. 49)　南側の台地段落ち部分にて1基のみ検出した。当初は土壙とみていたが、深さや湧水の点から井戸と見做す。調査区の南側境界地に位置しているため全体形は不明である。又、上部は削平を受けている。素掘りの井戸で、井戸上面の平面形は隅丸長方形を呈している。井戸上面の径は1.7m、深さは99cm以上を測る。井戸底までは未発掘である。井戸の覆土は暗い茶褐色粘質土を主体としており、覆土から弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、糸切り底の土師器坏等が出土しているので、12～13世紀の年代が考えられる。

Tab. 15　第73次調査遺構一覧表　　(単位：cm)

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形態		規模			出土遺物	時期	備考
			平面形	断面形	長	幅	深			
SE 01	D 1	井戸	不整円形	逆梯形	170	90+α	99	弥生土器、土師器皿・二重口縁壺、須恵器坏蓋・壺・甕、瓦器、磨石	中世	
SD 01	M 1	溝	−	−	660	114+α	59	弥生土器、土師器皿・高坏、須恵器坏・蓋・甕、瓦質土器摺鉢、鉄滓	中世	段落ち部分に相当
SP 01		柱穴	円形	逆梯形	25	25	18	弥生土器、土師器、須恵器坏		
SP 07		柱穴	不整楕円形	逆梯形	43	26	16	土師器甕		





井戸 SE 01 (南から)

SE01土層名称
1.暗茶褐色土に砂礫を含む
2.黒褐色土と暗茶褐色土の混合土(黄色土のブロック含む)
3.2より暗い
4.黒褐色土と黄色土の大ブロック混合土
5.黒褐色土に黄色土のブロック含む
6.黒褐色土と黄色土の混合土(地山ロームブロック)

Fig. 49　井戸 SE 01実測図 (縮尺1/40)

(2) 掘立柱建物（SB）

調査区内では数多くの柱穴を検出した。これらが掘立柱建物、或いは住居跡等の主柱となることが予想されたため建物の検出に努めた結果、4棟の掘立柱建物を検出した。掘立柱建物は1間×2間の建物2棟、1間×1間の建物1棟、2間×2間の建物1棟であった。

SB 01（Fig. 50）　掘立柱建物SB 02と切合う。梁行1間、桁行2間の規模をもった側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位をN50°Eに置き、柱間は梁間5.8尺、桁間6.1尺を測る。掘方径35～50cm、深さ39～60cmを測る。柱穴からは須恵器の坏蓋が出土しており、6世紀後半代の時期が考えられる。

SB 02（Fig. 50）　掘立柱建物SB 01と切合う。中央に束柱が存在する。梁行2間、桁行2間の規模をもった総柱の掘立柱建物が考えられる。主軸方位をN88°Eに置き、柱間は梁間5.2尺、桁間5.7尺を測る。掘方径32～35cm、深さ14～19cmを測る。遺物の出土はない。

SB 03（Fig. 50）　掘立柱建物SB 02と切合う。梁行1間、桁行1間の規模をもった掘立柱建物である。主軸方位をN33°Wに置き、柱間は梁間5.6尺、桁間5.9尺を測る。掘方径は32～35cm、深さ11～19cmを測る。遺物の出土はない。

SB 04（Fig. 50）　梁行1間、桁行4間の規模をもった側柱だけの掘立柱建物と考えられる。主軸方位をN12°Eに置き、柱間は梁間5.6尺、桁間6.0尺を測る。掘方径33～36cm、深さ24～37cmを測る。1間×2間の建物とも考えられる。

(3) 溝（SD）

調査区の南西側の境界地において大略東西方向の溝を1条検出した。当初は谷の落ち込みと考えていたが、覆土からみて中世の濠と見做すことも可能であるため、ここでは溝SD 01として報告する。

SD 01（Fig. 47）　調査区の境界に位置しているため、長さは6.6mまでしか確認できなかった。大略東西方向の溝で、断面形は不明である。溝上面の幅は114cm以上で、現状の深さは59cm以上を測る。覆土は茶褐色粘質土を主体としており、覆土から須恵器が出土している。有田・小田部地区の中世遺構の覆土の状況から、時期は中世後半期の遺構と考えられる。

Tab. 16　掘立柱建物一覧表　　1尺＝30.3cm

	規模	桁　行(cm)		梁　行(cm)		方　位	床面積(m²)	柱　穴　状　態					出　土　遺　物	備　考
		実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			Pit数	深　さ	長　径	短　径	柱根径		
SB01	1×2	370(12.2)	175(5.8) 195(6.4)	175(5.8)	175(5.8)	N50° E	6.475	6	39～60	35～50	30～45	20	弥生土器、須恵器坏蓋、炭化物	
SB02	2×2	350(11.6)	185(6.1) 165(5.4)	310(10.2)	160(5.3) 150(5.0)	N88° E	10.85	9	14～19	37～40	27～30	18	弥生土器壺、土師器高坏	
SB03	1×1	180(5.9)	180(5.9)	170(5.6)	170(5.6)	N33° W	3.06	4	11～24	32～35	28～34		なし	
SB04	1×2	365(12.0)	160(5.3) 205(6.8)	170(5.6)	170(5.6)	N12° W	6.20	6	24～37	33～36	28～36		土師器、須恵器	

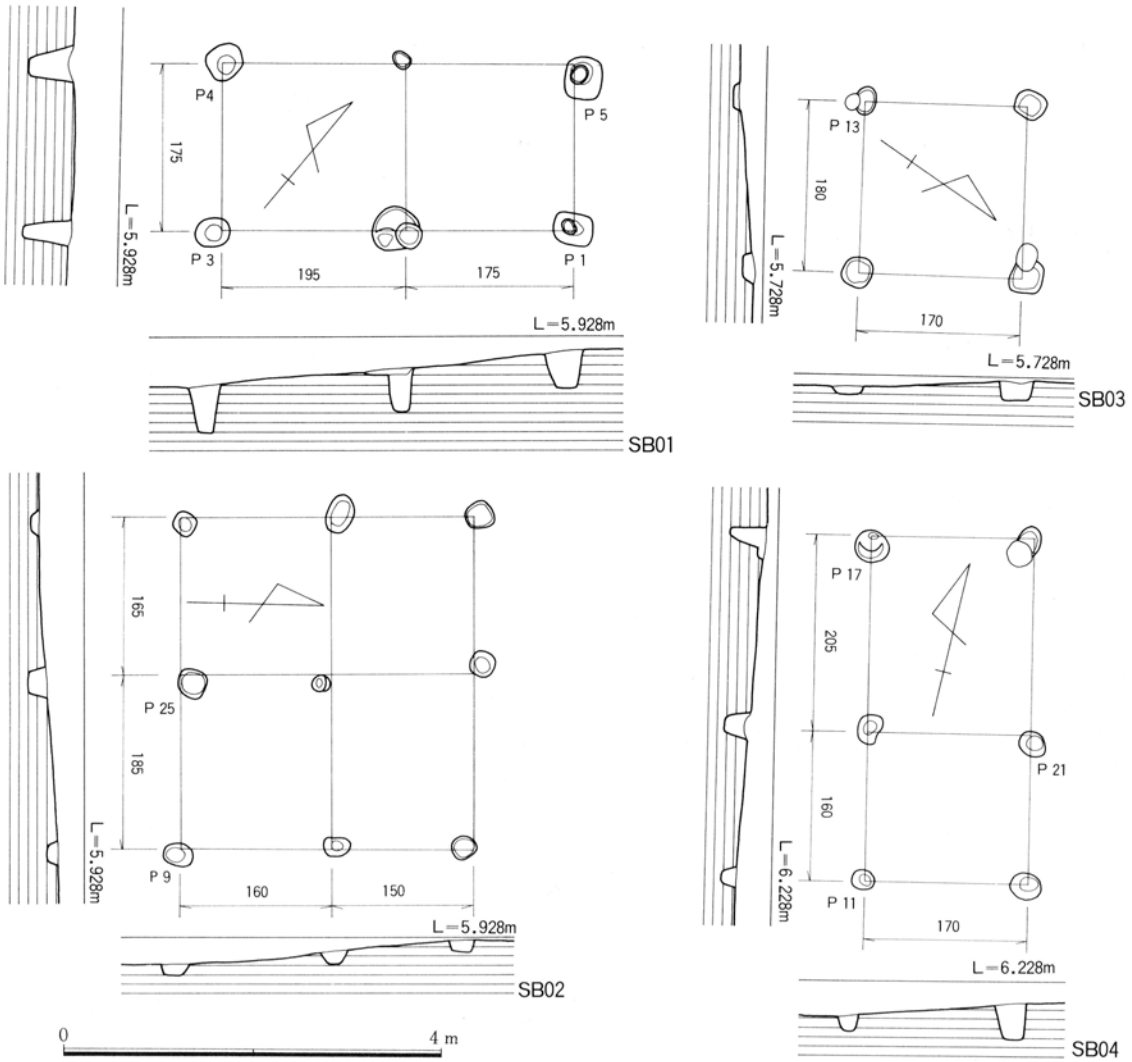
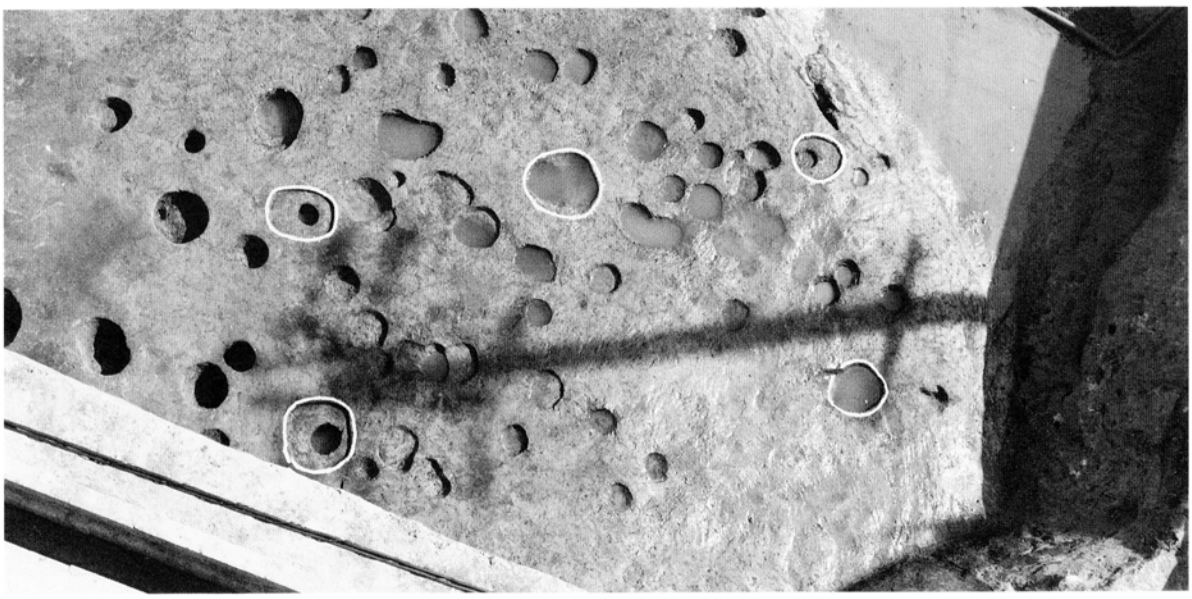


Fig. 50　掘立柱建物 SB 01～04実測図（縮尺1/80）



掘立柱建物 SB 01（北から）

(4) 柱 穴 (SP)

柱穴と考えられる。径15～50cmを測るPitを多数検出した。いずれも柱穴と考えられるが、建物として把握することができたのは、4棟にとどまった。SP01・07・25からは遺物が出土している。これらのPitの作られた時期は古墳時代から室町時代までの幅をもっている。

3．遺 物 説 明

(1) 井戸出土遺物 (Fig. 51)

SE 01出土遺物（7～9） 7は糸切り底の土師器坏片、8は古墳時代の土師器高坏片である。9は緑泥片岩製の磨石で、下部を欠いている。縁辺は良く使用しており、一部に敲打痕がみられる。

(2) 掘立柱建物出土遺物 (Fig. 51)

SB 01出土遺物（1） 1は須恵器の坏蓋で、SB 01-P 3の柱穴から出土している。6世紀後半代の時期であろう。

(3) 溝出土遺物 (Fig. 51)

SD01出土遺物（5・6） 5は須恵器の坏蓋、6は須恵器の甕片である。

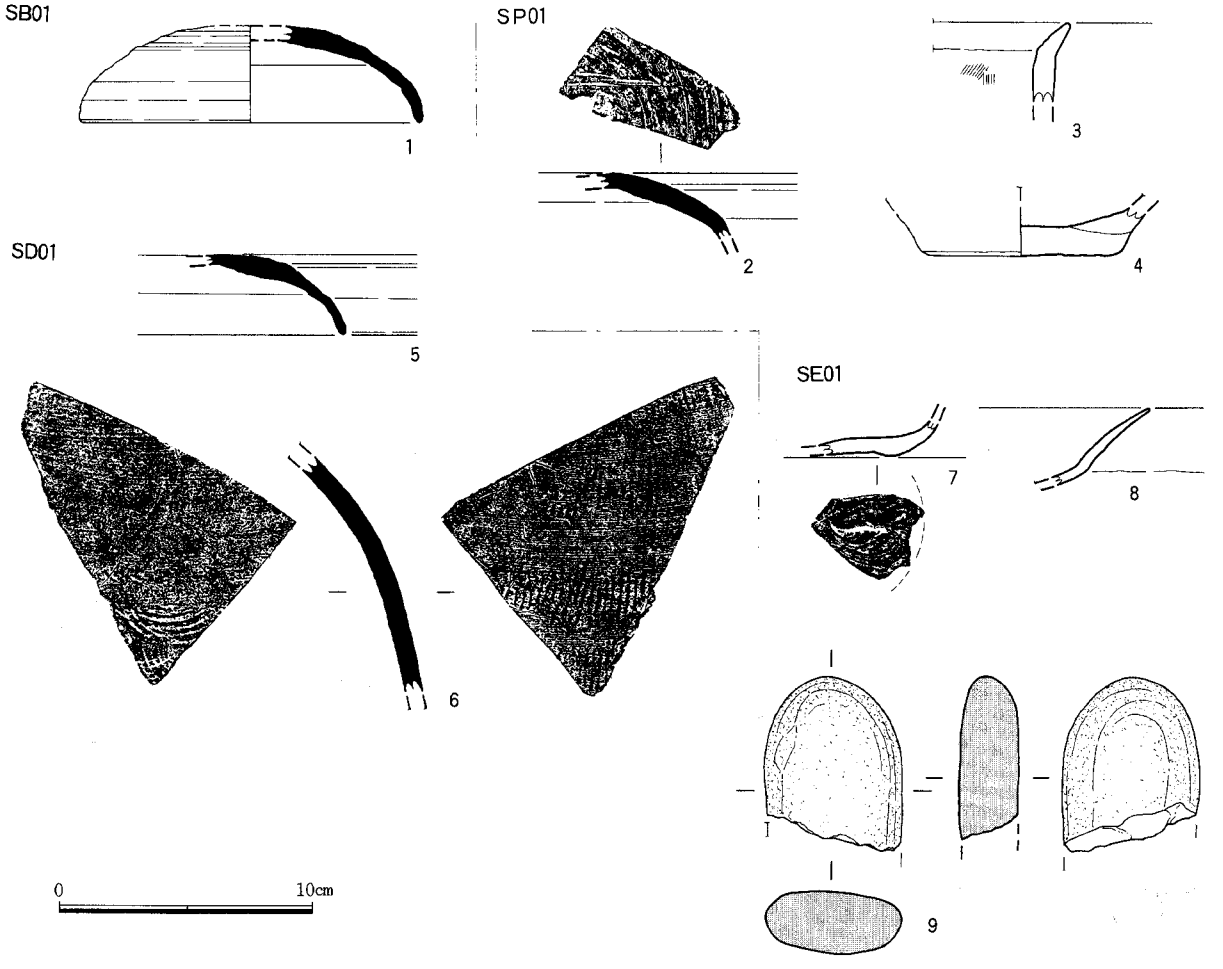
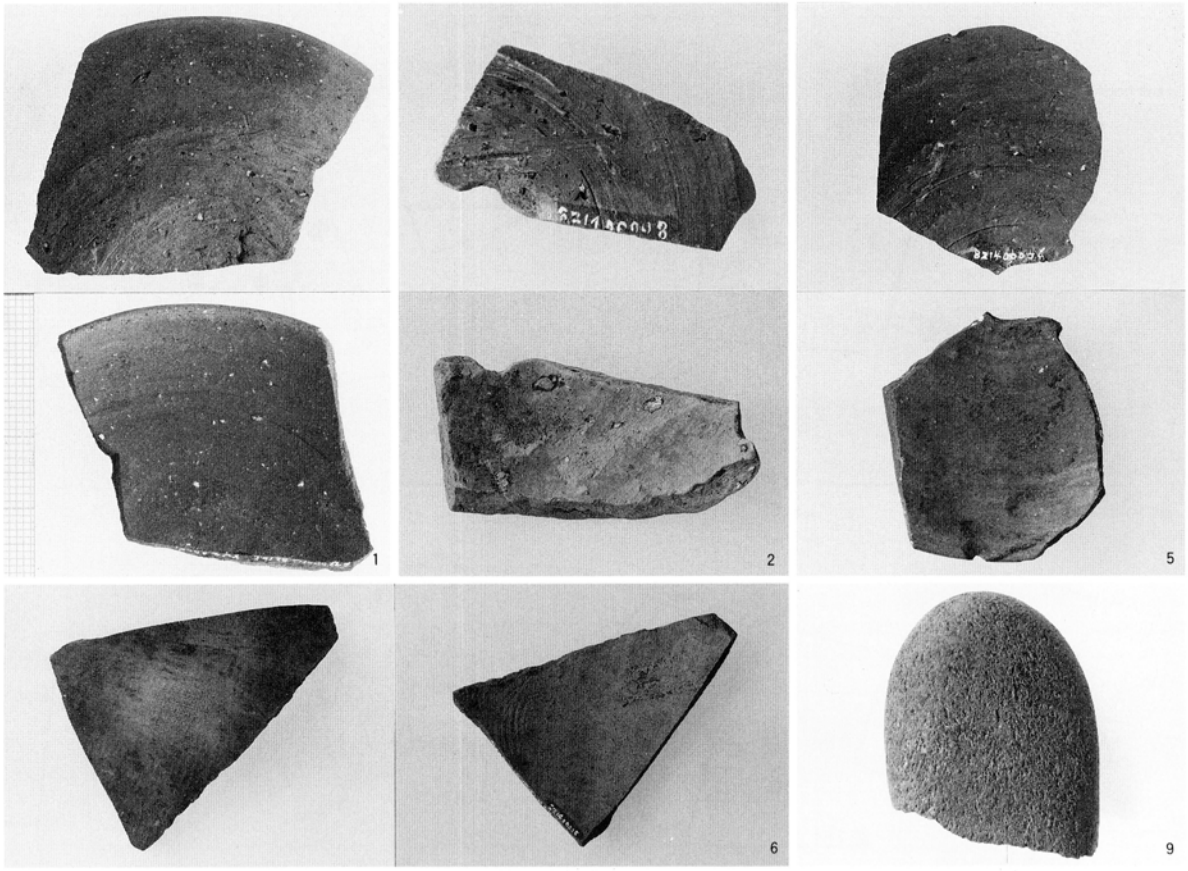


Fig. 51 各遺構出土遺物実測図（縮尺1/3）



第73次調査出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する

Tab. 17　第73次調査遺物一覧表　（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
51	1	SB01-3	須恵器	坏蓋	13.5	−	(3.9)	体部・天井部はやや丸みをもつ。天井部は左回りのヘラケズリ。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。外面は青灰色、内面は濃青灰色。	小田Ⅳ期 6C中~7C初
51	2	SP01	須恵器	坏蓋	−	−	(2.5)	天井部は左回りのヘラケズリ。	胎土に1～4㎜の砂を含む。焼成良好。外面は淡青灰色、内面は灰色。	小田Ⅳ期
51	3	SP07	土師器	鉢	−	−	(3.2)	口縁部は小さく外反。外面はヨコナデ調整、内面はタテハケ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	古墳時代
51	4	SP25	弥生土器	壺	−	7.8	(2.0)	平底。	胎土に1～4㎜の砂を多く含む。焼成不良。淡赤褐色。	弥生時代中期
51	5	SD01	須恵器	坏蓋	−	−	(3.2)	天井部は平坦、体部は丸みをもつ。天井部はヘラケズリ。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	小田Ⅲ期 6C中~6C後
51	6	SD01	須恵器	甕	−	−	−	外面は格子目叩き、内面は同心円叩き。内外面上位はヨコハケ調整。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成良好。外面は黒灰色、内面は青灰色。	古墳時代
51	7	SE01	土師器	皿	−	−	(1.4)	糸切り底。体部は丸みをもつ。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成やや軟。茶褐色。	中世
51	8	SE01	土師器	高坏	−	−	(3.1)	口縁部と底部の境に段をもつ。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成やや軟。茶褐色。	古墳時代

Tab. 18　第73次調査石製品一覧表　（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	器種	長(現存長)	幅(現存幅)	厚(現存厚)	重量(g)	石材	色調	特徴
51	9	SE01第3層	磨石	(6.9)	(5.5)	2.5	−	緑泥片岩	暗緑灰色	楕円形状を呈し、下半を欠く。縁辺は丸く、磨滅している。一部に敲打痕。

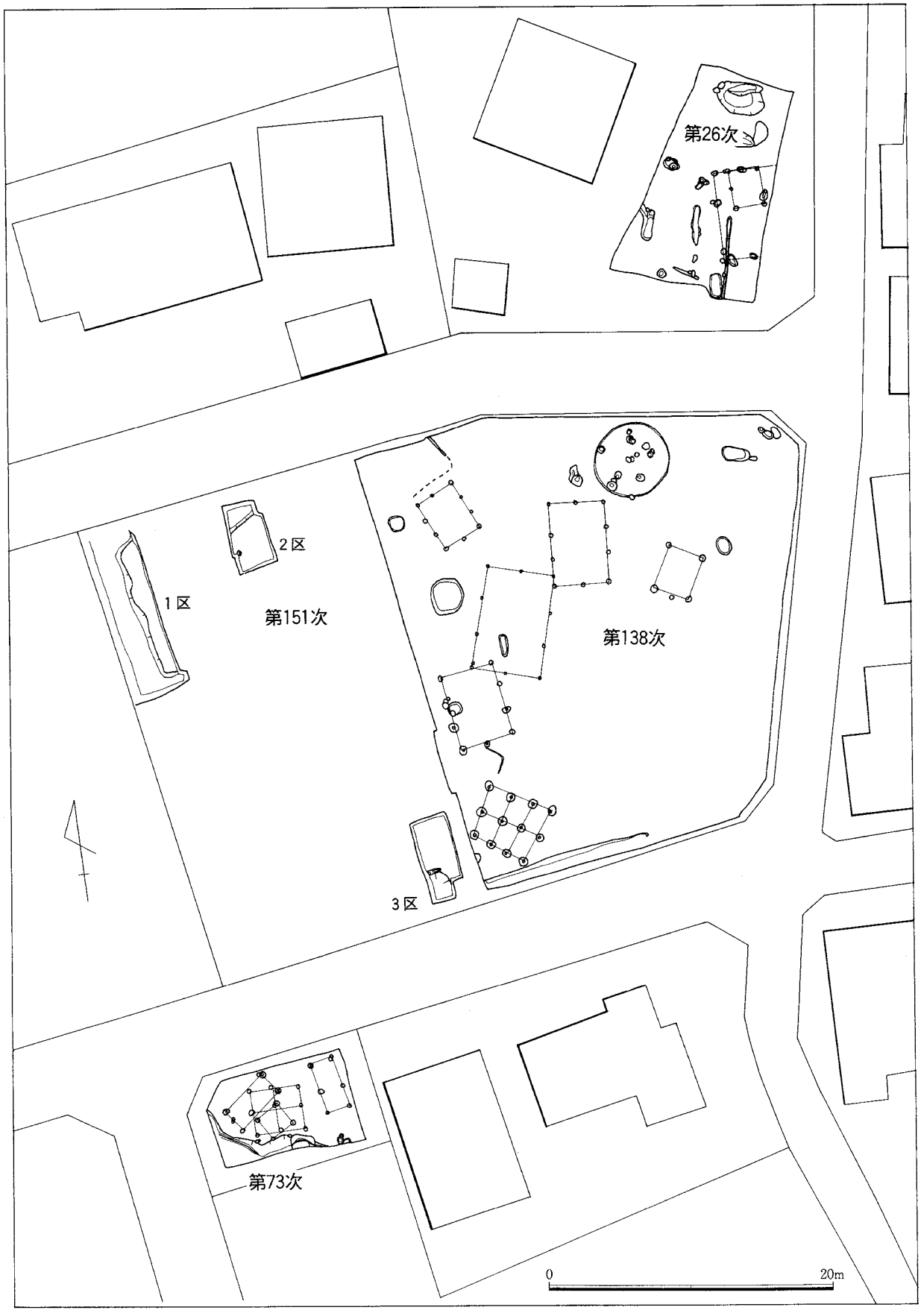


Fig. 52　第26・73・138・151次調査遺構配置図（縮尺1/400）

(4) Pit 出土遺物 (Fig. 51)

2 は SP 01出土。3 は SP 07出土。4 は SP 25出土である。2 は須恵器の坏蓋で、天井部は回転ヘラケズリを施す。3 は土師器の小型の鉢で、口縁部を小さく外反させている。4 は弥生土器の壺底部である。

4．まとめ

調査対象地が狭小であること、且つ、台地の縁辺部に位置しているため遺構の状況は把握し難いが、出土した弥生時代から中世までの遺物から周辺の状況を伺い知ることができる。

東側に近接している第138次調査では弥生時代から平安時代までの遺構を検出しており、今回の調査で検出した遺構はこれらに連続するものである。

調査においては、地山のローム層上面を便宜的に遺構面としているが、掘立柱建物等の柱穴がいずれも浅いことから、上層に整地層が存在したことを考えなければならない。土層図 Fig. 48において、西南側の段落ち部分に作られた井戸 SE 01の掘り込みの状況をみてみると、北側の井戸肩は第 6 層の黒褐色粘質土及び、第 7 層から掘り込んでいる。又、南側の井戸肩はやはり第16層の黒褐色粘質土を掘り込んでいるが、肩のレベルは北側に比べ低い。しかし、この黒褐色粘質土はローム層上面から谷部までほぼ水平に堆積していることから整地層とも考えられる。江戸時代の開田より第15層の西側を削平されている状況をみてとれることから元来は調査区西側の広い範囲に整地がなされていたと考えたい。

有田・小田部

第22集
福岡市埋蔵文化財調査報告書第４２７集
1995年（平成７年）３月31日

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目8-1
電話（092）711－4666

印　　刷　ダイヤモンド印刷株式会社
福岡市東区松田３丁目９番32号
電話（092）621－8711㈹